

ご注文は☒さそり☒ですか？

鯛焼きマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本のある地方にある、西洋風の街並みが美しい街。通称『木組みの家と石畳の街』。

しかし、この穏やかで平和な街には人の姿と記憶を奪って擬態する『ワーム』が息を潜めていた。

天々座理世の弟、天々座 刃は仮面ライダーサソードとなって、そのワーム達と人知れず『日常』の裏で熾烈な戦いに身を投じている。そんな彼が戦う理由を問われたなら、きつとこう答えるだろう。

「僕はただ自分自身の復讐のために戦っているだけだ」と……………。

目次

番外編

ハイパーエイプリルフル企画　く変身！　今日から君も仮面ライダーソード!?!?　く	1
仮面ライダーソード	
プロローグ	6
ツンデレの妹を持つ姉とツンドラの弟を持つ姉	12
ツンデレの妹を持つ姉とツンドラの弟を持つ姉	17
ツンデレの妹を持つ姉とツンドラの弟を持つ姉	21
ツンデレの妹を持つ姉とツンドラの弟を持つ姉	29
ツンデレの妹を持つ姉とツンドラの弟を持つ姉	35
初二段変身×2	41
初二段変身×2	48
初二段変身×2	62
初二段変身×2	75
初二段変身×2	87
初めて会った日の事憶えてる？　自分の家のメイドにしようとしてたわよね	108
初めて会った日の事憶えてる？　自分の家のメイドにしようとしてたわよね	122
初めて会った日の事憶えてる？　自分の家のメイドにしようとしてたわよね	139

番外編

ハイパーエイプリルフル企画　く　変身！　今日から君も仮面ライダーサソード!?く

「ライダースラッシュ」

【Rider Slash】

ゼクターからヤイバーに注入された猛毒が光子に変換されスパークを鳴らす。

黒刃は必殺の毒刃へと変わる。

「スウー……」

剣を上段に構え、息を深く吸う。

「ハッ！」

最後の足掻きで我武者羅に爪を振るうワームの横を擦り抜け様に、胴への一閃。

振り返り、切っ先を向け残心をとるサソードの前でその身は爆発四散。

残るは一陣の風のみ――。

「ああ、かつこいいいなあサソード！　ねえ、メグ？　チノ？」

「うん、あんな怖いひと相手に堂々とできてすごいねマヤちゃん！」

「あのマヤさん。今は他にお客さんがいないからいいですけど。できれば店内で動画見るのはやめてください」

「あわわ〜！　ごめんねチノちゃん〜！」

慌てて謝るメグに対してマヤは意気揚々と手を天（天井）に掲げる。

「よし！　私もサソードに変身する！」

「ええ〜!? マヤちゃんか!？」

「サソードって誰でも変身できるものなんですか？」

「そこはホラ、劍持ってサソリをガチャンと付けなければいけるんじや痛っ!？」

「適当なことを言っているマヤにバチを与えるように何かが彼女の頭に勢いよく着地する。」

『愚か者。貴様たちのようなヒヨッコ共ではサソードに変身することなど不可能だ』

「「そ、その声は!？」」

『そう、私の名はサソードゼクター。選ばれし者だけが手にすることを許された存在だ』

それはCV：三木眞一郎さんの今にも「降臨、満を持して……!」とか言いそうな声でしゃべるサソードゼクターだった。

「ヒヨッコってどういう意味だよお、このケチい」

『ケチではない。むしろ私ほど大らかな心を持つゼクターもそうそういなかろう』

「そもそもゼクターって何匹? 何機? いるの?」

『匹とか機で数えるでない! せめて体で数えよ』

「ご、ごめんなさい〜」

大らかな心を持つゼクターとは何だったのか。

『まあいい。本来ならジンの奴めの役目だが、奴は奴でアレだからしょうがあるまい。貴様達ヒヨッコに私自ら教鞭をとってやろう』

(ゼクターにすらアレ扱いされるジンさんって……)

チノがジンに同情のような感情を抱いている内にサソードゼクターは話し始める。

『まず、仮面ライダー……マスクドライバー計画によって生み出されたゼクターは基本的に五体だ。例外も複数いるが今回は言及しないものとする』

「うんうん」

『そしてゼクター一体一体が独自に意思を持っており、それぞれのゼクターが各々でゼクターの資格者を選ぶのだ』

「そしてジンさんはサソードゼクターさんに選ばれた、ということですね」

『そういうことだ。そしてゼクターにはそれぞれ資格者に求めるものが違う。例えばカプトムシ型ゼクター・カプトゼクターなら《天の道を往く者》、クワガタムシ型ゼクター・ガタツクゼクターなら戦いの神の異名通り《闘争心が強く、戦う覚悟ができている者》などだ。』

他にも《気ままな風のような自由人》を好むトンボ型ゼクター・ドレイクゼクター。逆に《集団・組織の統率者に相応しい者》を選ぶズメバチ型ゼクター・ザビーゼクターなどがある。まあ、ザビーの奴は私と違って心が狭すぎた所為で資格者になつてくれる者がいなくなつたらしいがな、フハハハハハ！』

大らかな心を持つているゼクター○の自慢をスルーしてメグが聞く。

「それとサソードゼクターくんを合わせて五体だけど、サソードゼクターくんが資格者に選ぶのはどういう人なの？」

「そうだよもつたいぶらないで早く教えてよお！」

『ええい、静かにするのだ小娘！ おい！ 尻尾の方を持って振り回すな！ 目が回るではないか！』

強硬手段に出たマヤをチノが止めてサソードゼクターはホツと息を吐く（ゼクターは呼吸しない）。

『なんと乱暴な娘だ……えっと、そう、私がジンを資格者に選んだ理由だったな』

「はい、その理由とはなんですか？」

意外とこの状況にノつているチノが質問する。

サソードゼクターはその期待を受け、口を開く（ゼクターに口は無い）。

『なに、単純な理由よ。それは奴が《力を求める者》だったからだ』
「力を？ ジンさんが？」

サソードゼクターの言葉にチノが疑問を持つ。

確かにジンは向上心の高い、総てにおいて頂点を目指す男だが、彼女には彼がそこまで貪欲に戦うための力を求めているように見え

なかったからだ。

そんなものがなくても彼は素で成績優秀、スポーツ万能だとチノはココアから聞いていた。

『そうだ。奴はゼクターの力が無くともそこらの人間より強い。身体能力も精神力も、それらに裏付けされた戦闘力も……だが、それでも奴は力を求めた。そこには執念や強迫観念とも言うべき使命感と責任感、そして復讐心があったからだ』

「復讐心……?」

少女らが生唾を飲む。

『ただの復讐心ではない。燃え盛る赤い炎よりも熱く、刃のように研ぎ澄まされた炎。静かに、されど激しく燃える青い火のような復讐心……それが仮面を剥いだ先にある天々座刃の正体だ』

サソードゼクターが語るはジンの抱える闇。

ゼクターはこう言ったのだ。

奴は、仮面ライダーは、正義の使者などではない。

復讐に憑りつかれた復讐鬼にすぎぬ。

闇から生まれた者は闇に還る運命だと。

……されど少女達はそれを否定する。

「ジンさんの突飛な行動で困惑したことは一度や二度じゃありません。でも、それだけじゃなくてジンさんには包丁の正しい持ち方とか、キャベツを綺麗に微塵切りにする方法とかたくさんのことを教えてもらいました。そんな何考えてるかわからないけどたまに優しかったり助けてくれるジンさんが復讐心だけの人とは、私は思えません」

ライダーとしてのジンを知らないチノは、ラビットハウスにいる時のジンを肯定する。

「私は、その、ジンって人のことはよく知らないけど、仮面ライダーに助けてもらったから……あそこで来てくれなかったら、あの男の人と私は怪物に殺されちゃってた。マヤちゃんも助けてくれた。それは事実で、それには感謝してもきれないよ」

ラビットハウスのジンを知らないメグは、自分や親友を助けてくれ

た恩人として肯定する。

「なんか難しい話はよくわかんないけどさ。私はあの、私を守ってくれた背中に勇気を貰ったんだ。悪い奴から身を挺して弱い人々を守る……それってさ、まるでゲームとかで出てくる勇者みたいでカッコよくない？ って思ったんだよね」

心の闇とかで深く考えないマヤは、感覚で彼の行いを肯定する。

『……貴様達がそう思うならそう思っているがいい』

それらの少女の想いを受け、サソードゼクターは静かに（ジョウント移動で）立ち去った。

立ち去りながらサソードゼクターは物思いに耽^{ふけ}る

（ジンよ。お前が思っているほど人は愚かではない。この街の光はいつでも貴様を歓迎している。いつか貴様がそれに気付く日がくればいいのだがな……）

サソードゼクターはクールに去るぜ。

「あああ……やっぱこの街は、俺にとって眩しすぎるんだよなア……」

そしてネガティブな謎の男は重苦しい溜息を吐きながら、ジメジメとした路地裏の闇に消えていった。

仮面ライダーサソード プロローグ

「はあっ——はあっ——!!」

私は馴染み深いこの木組みの街を全速力で走っていた。何故か？
それは私が今、〃ある人物〃に追われているからだ。

時間は数分前に遡る。

バイトの帰り。いつもより遅くなってしまい日は西に大きく傾いていた。そこで人通りの少ない裏路地を近道に使おうとしたのが失敗だった。

その人物に会った時、私は反射的にいつも携帯している愛用のモデルガンを向けた。

しかし意味は無かった。

それでも震える手で銃口を向け続けずにはいられなかった。

そもそも普段ならよっぼどの時か心許した知り合い以外に向けたりしないそれを躊躇無く向けたのは訳があった。

それは、

「何やってるんだ、私は〃ワタシ〃だぞ？ その銃に弾が入っていないことぐらい知っている」

そう、相手は〃ワタシ〃だったのだ。

「ああっ！ クソ！ 何なんだよ一体全体!？」

私以外に〃ワタシ〃がいるはずなんてない。そんなのは怪談やお

伽倻の世界だけだ。そう自分に言い聞かせる。

でもあの口調や仕草はどこまでも私でワタシで私がワタシ私わたしワタシ私わたし私ワタシワタシワタシワタシワタシワタシ——

「うああああああああああ!!」

もうパニックで頭がおかしくなりそうだった。

そんな状況で私の体を動かしていたのは「アレに捕まったら最期だ」という本能的な恐怖からの警報だった。

我武者羅に街を駆ける。恥も外聞もなく一目散に逃走する。

普段はバイト先の年下の女の子に偉そうにミリタリ知識や親が軍人であることを自慢している癖に、これではただの負け犬だ。

そう頭で考えても心はどうしようもなく恐怖に屈していた。私はこんなに弱かったのかと自分で自分に失望した。

入り組んだ細い路地何度も曲がり、石畳の階段を駆け上がる。

そこでようやく息を吐く。他人より体は鍛えていたつもりだったが流石に数分？ 十数分？ を休まず全力疾走すれば息も上がるうというものだ。

息が整ってきたところで振り向き後ろ、厳密には階段の十数段下を見下ろす形になるが背後を確認する。

何かを追ってくる気配は、無い。

やっと撒いたか、と安心して顔を上げ、正面を見た。

「あ」

そこに「ワタシ」がいた。

“ワタシ”の姿は次の瞬間人型の虫のような怪物に変貌し、禍々しい爪を振り下ろした。

咄嗟に回避できたのは奇跡といっても良いだろう。

それ程の不意を突かれた一撃であり、明確な殺意だった。だが回避といっても後ろに倒れ込んだだけだ。

そしてここは階段の最上部。

結果、私の体は高所から真つ逆さまに投げ出された。

受け身を取る余裕無し。

このまま落ちれば良くて脊髄損傷による半身不随。十中八九で死ぬだろう。

いや、どちらにしても目の前の怪物に殺されるか。

嗚呼なんとも情けなくつまらない最期だろう、と私は自分で驚くほど冷静に思考していた。

これが諦観というものと独りごちる。

——やけに落ちるまでに時間が掛かる。

これが走馬燈なのかな、と気付いたところで今までの人生を振り返る。

．．．．．うん。

決して楽しいことばかりではなかったが、悪くない人生だった。

最後の最後まで頑張つて一生懸命に生きたし後悔なんて．．．後悔なんて．．．

「.....いやだ.....まだっ.....死
にたくないっ！」

一粒、瞳から溢れた滴が停滞した時の中に舞う。

しかし、いくら体感時間の流れが遅くなろうと時は止まらない。

私の儂い願いは重力に抗えず、空しく粉々に砕け散った。

——はずだった。

いつまで経っても決定的な瞬間が訪れない。それに疑問を持つと
ふと自分の体の浮遊感に気が付く。正確には誰かに抱き上げられて
いるような.....

「.....！」

始めは薄目、次に見開く。目の前にあった「紫の仮面」に驚愕し、
息が詰まる。

仮面の主は何者なのか？ そもそも人間なのか？ とさっきの怪物のことも自分が世に言うお姫様だっこされていることも忘れ、グルグルと巡る思考が空回る。

そんな混乱は、階段下近くのベンチに優しく座らされたことで中断される。

「そ、そうだ！ あれは怪物はっ!？」

だがそれによって怪物のことにやつと頭が回り、私は周りを警戒するように見渡す。

しかし慌てる私とは対照的に紫の仮面の主、いや全体像を見て分かったがどうやら全身を覆う紫色を主とした特殊スーツ……ライダースーツにも似た装備で身を包んでいるらしい（場違いにも格好いなどと思ってしまった）。

彼は一言も語らずスツと丁度階段下付近に当たる場所を指差す。

そこには彼のスーツと同じカラーリングを基調としたメカニツクな剣が石畳に突き刺さっており、垂直に切っ先が刺さる根本には緑色の体液のようなものが広がっていた。

「もしかして、貴方が?」

続く言葉を察したのであろう彼はまたしても黙したまま首肯し、役目はもう終わったとばかりにこちらに背中を見せ歩き去ろうとする。

「え? 待つ、きや!？」

仮面の主が剣を引き抜いた所で呼び止めようと立ち上がろうとする私。

しかしどうやら完全に安心しきったがために腰が抜けていたらしく、ベンチの上で滑りながら意図しない嬌声を漏らしてしまった。

男勝りと自覚している自分には不釣り合いな少女めいた失態に顔の紅潮が耳まで昇る。

仮面の騎士（剣を携える様は正しく騎士……にその時の私には見えた）はそんな情けない私の姿を見て「ふっ」と笑う。

その彼が間違いなく一人の人間である事を証明する言動に私の羞恥心は加速し、顔を朱に染めたまま何も言えなくなってしまう。

そんな私を置いて再度、彼は背を向ける。

「あっ」

待って、の一言も言えず、私はただその頼もしくもどこか寂しげなその背中を見つめることしかできなかつた。

感謝の言葉一つ、言えなかつた。

そして、霞が晴れるように彼の姿は消え去つた。

まるでここで起きたことは全て幻だったのだ、と囁くように……。

ツンデレの妹を持つ姉とツンドラの弟を持つ姉

「ふああ……」

木漏れ日が草花を照らす朝。紫がかった黒の長髪が美しい少女、てでざりせ天々座理世は自室でいつも通りに目を覚ました。

「またあの時の夢か」

三ヶ月も前の出来事ではあるが、リゼの中であの時の事はそれだけ強い印象に残っていた。

（いや、もしかして本当に夢だったのか？）

しかし、あの出来事が夢か現か判別が出来かねてきているのも事実。

それだけ現実離れた出来事だった。

しかも後日あの場所に行ったが、痕跡は何一つ無くなっていた。

だから余計に疑念が大きくなる。

それでもリゼは一つ心残りがあった。それは、

（ただ一言、お礼が言いたい）

その引っかけかりのおかげでリゼの心には、あの仮面の騎士のことが焼き付いていた。

だが、どうも積極的に調査しようと思いう気になれない。

漠然とした忌避感があった。

理由は、わからない。

（そもそもが白昼夢じみた話だ。事情を話したところで誰も信じてくれないだろう……それに）

下手な好奇心は猫を殺す。

想いはあっても足が動かないのは、無謀の先には死しかないことを伊達に軍人の子ではない彼女は理解していたからか。

「……兎も角、そろそろ起きるとするか」

あるいは、彼女の心に染みついたあの「怪物」ワタシへの恐怖が、仮面の騎士も含めたあの日の事を無意識に遠ざけてしまっているからか。

何はともあれ今日は春休み明けの登校日、制服などの簡単な身支度を済ませた後に部屋を出る。

何故寝起きすぐに自室で着替えをするかというところ、リゼの家が城のような大豪邸だからだ。

勿論それに見合うだけの広大な敷地と多くの使用人（および父の部下）を抱えている。なので自分の家の中だからといってあまりラフ過ぎる格好をする訳にもいかない。

その使用人のほとんどが男性なので尚更だ。

だからといって別に自分の家に家族以外の人間がいる状況に不満はない。

ほとんどの使用人が自分が幼い頃から一緒に住んでいる半ば家族同然とも言える人達なので寧ろ突然いなくなられても嫌だ。

だが家族同然だとしても親しき仲に礼儀あり、という言葉通り一線は引かねばならない。主人の子と使用人の間なら当然。

それについて口うるさい家族が一人いるのでリゼも特に気を付けている。

（噂をすれば・・・）

曲がり角を曲がったところで一人の少年が見えた。リゼは見えない位置で一度深呼吸した後、意を決して挨拶を交わす。

「やあ、ジン。おはよう」

「おはよう、リゼ」

この少年の名前は天々座刃^{しん}。

リゼと同じ質の黒髪を持ち、姉弟揃って目付きが生まれつき鋭いので一目見ただけで血の繋がりを察することができる。

リゼとの大きな違いは、彼が男性らしく髪を短くしている点だろうか。

「えっと、朝食はどうしたんだ？」

ダイニングルーム（一度に十人は一緒に食事出来るぐらい広い。ちなみに客間とは別）から丁度出てきたジンに何気なく話題を振るリゼ

だが、彼の対応は質素なものだった。

「もう食べた。朝早く家を出る用事があったからね」

その言葉通り上から下まで身支度を完璧に済ませ、今すぐに外へ出ても恥ずかしくない格好をしている。

様子もどこかしら急いでいるように見える。

「用事ってなんだ？ 制服まで着て。入学式は明日だろう？」

急いでいるのは察したが流石に二・三言しか会話がなないのは実の姉弟にしては寂しすぎる気がするし、純粹に用事が気になったのもあってリゼはジンに再び問うた。

だが、

「リゼには関係ない。じゃあ、そろそろ行くよ」

取り付く島もないとはこのことだろう。

姉と容姿が似通っているジンのリゼとの一番の相違点はこの無愛想さだ。

その所為でただでさえ鋭い目付きも相まって、初対面の人からまず敬遠される。

リゼはそれを前々から気にしてよく諫めていたが、当の本人はどこ吹く風で気にする様子も一切無し。

父親も「男にはそういう時があるもの」と言い、彼女自身何度言っても相手にしてくれない弟に口を酸っぱくするのが空しくなっていくた。

そんな時からだろうか。彼女がジンに話がけ辛いと感じるようになったのは。

「……ああ、じゃあな。気を付けろよ」

こんな現状はどうにかしなければならぬ。

それが分かかっていても一歩踏み出せない自分が、リゼはどうしようもなくもどかしかった。

(昔は……あんな風じゃなかったのに……)

リゼは幼い頃のことを想起する。ただ無邪気に、二人で遊んだ日のことを。

昔のようには言わない。

それでも彼と向き合いたい。

当たり前の姉弟のように。

それがリゼの偽りない想いだった。

(やはり私はココアのようにはなれないな……)

自分がこの事を気にするようになったのはきつとあの子の影響だろう、とりぜが頭に浮かべたのは新しくできた無邪気な後輩の事だった。

※

木組みの家と石畳の街。清々しい朝の空気が通る街道を一人の少女が歩いていた。

「フフフフンフン♪ フフフーン♪」

商店が賑わうにはまだ早い時間帯故に人通りが少ない街中を、ご機嫌に鼻歌まで歌っているのは保登心愛。

春からこの街の高校に通うために、ついこの間下宿先のラビットハウスに引っ越してきたばかりである。

ココアは以前からこの街には何度か家族と来たことはあるが、その家族と離れて他所の家にお世話になることに心配が無くはなかった。

だが久しぶりに訪れた街の雰囲気依然在と変わりなく心地よかつたこと、そして下宿先の店のマスターのタカヒロさんの人柄良さで引っ越し前のちよつと不安だった気持ちはすっかり晴れた。

それにその店で一緒に働くことになった前マスターの孫で店の看板娘の香風智乃。

可愛くてモフモフの最高の妹(本人の許可無し)もできたことで彼女の気分は一周回って200%に快調だ。

今は新生入生として、新しい学校の入学式に出るために登校している。

(チノちゃんとはすぐに通学路が分かれちゃって少し寂しいけど、今日は良い出会いがあるような気がするし学校での生活が今から楽しみだなあ)

「待て」

そんなフワフワとした心持ちに水を差すような声と共に、ココアの手首が掴まれた。

「ええっ!?!」

驚いて振り返ってまたも驚く。

相手はココアと年が近いと思われる少年だった。

「えつとお・・・なに、かな?」

明るく朗らかな性格で誰とでもすぐに仲良くなれるココアといえど異性に手を握られる経験など無く、緊張して普段から自然と浮かべている笑顔もぎこちなくなってしまう。

それでも何とかそう問いかけるが相手は「違ったか」と小さく呟いた後、あっさりと手を離れた。

「すまない。人違いだったよ」

「待って!」

簡潔に詫びの言葉を入れて去ろうとする少年を今度はココアが呼び止めた。

「きみ、同じ学校の生徒だよね!」

第一学友との遭遇に目を輝かせる少女に少年、ジンは虚を突かれ一瞬固まる。そして

「・・・はあ」

面倒臭そうなヤツに声をかけてしまったと後悔した。

ツンデレの妹を持つ姉とツンドラの弟を持つ姉 2

「きみ、同じ学校の生徒だよね!？」

「はい、そうです、さようなら」

「ねえねえ何年生？　もしかして私と同じ一年生？　それなら一緒に青春時代を過ごす仲間だね！」

「はい、そのとおりです。それじゃあ僕はこっちなので」

「きみはこの街の出身なの？　私はこの前引っ越してきたばかりなの！　それで今はラビットハウスっていうカフェのお世話になってそこで働いてるんだよ！　あ、ラビットハウスって言うてもうさぎがいるカフェじゃなくて……」

「……どこまでついてくるつもりですか？」

面倒臭そうなキャラだとわかった時点で『あからさまな他人行儀戦法』を使ってみたが効果無し。

これは想像以上の手練れだとジンは内心辟易する。

「え？　だって同じ学校でしょ？　だから私も学校に行ってるんだよ？」

「全くの逆方向なんですが」

正直このまま連帯行動を続行してもお互いになんのメリットもない。

できるだけ早く目の前の少女と別れて「用事」の続きをしたいのがジンの本音だ。

しかし悪意無く純粋な瞳で接してくる彼女に少年はあまり強く言えないでいた。

「何できみは学校に行かないの？　入学式に遅れちゃうよ？」

「……?？」

そこでジンは妙な会話の噛み合わなさを感じた。

いやそもそもこういう手合いは彼の苦手とするタイプなので始めから噛み合いようがないのだが。

兎も角ジンは彼女との会話からその欠けたピースを探して、そして合点がいく答えに辿り着く。

わざわざ教えてやる義理は無かったがこれ以上つきまとわれてもいい迷惑なのでその誤解を解いてやることにした。

「入学式明日なの!？」

「やっぱり間違えていたんですね」

まさか入学式の日程を間違えるような人がいるとは思わなかったジン。

これは盲点である。

知らなければ何を見逃す事になっていたかは……ここでは関係ないので伏せよう。

「道もよく知らなかったようですし、僕がいなかったらフライング入学とはじめての登校（迷子）を併せたダブルパンチでしたね」

「うん……教えてくれてありがとう……」

さつきまでのハイテンションは鳴りを潜め、見るからに落ち込む少女。

よほど学校に行きたかったらしい。

大方さつきまではおしゃべりついでに学校までの道案内を自分させようとしていたのだろう、とジンは推測した。

「でも、きみも制服着てるし……あっ!」

「その仲間を見るような目は止めてください。違いますから」

だがすぐに訂正した。

この脳天気ハッそうな女ビーの子ガルはそんな強したたかなことを考えるようなヤツじゃない。

そう断定できる自信が彼にはあった。五万は賭けて良いと太鼓判を押せるくらいには。

「そういえば自己紹介がまだだったよね。私の名前は保登心愛っていうの。ココアで良いよ?」

「そうですか。では保登さん、僕は用事があるのでこれで」

あくまで他人行儀を続けるジンだがやはりココアには効果は無い。

むしろ先程よりグイグイ来る感じである。

「用事つてもしかして誰か探してるの? 手伝うよ?」

「手は足りてますから結構です」

そろそろ似非敬語が板に付きそうなほど拒絶の意思を全身から溢れさせているのに、彼女が退く様子は一切無い。

だからといって恩着せがましい様子でもなく、本当に真摯な気持ちでやっているようなので殊更始末が悪い。

さては世間で言うところのツンデレだと思われているのか？ とジンの中で疑念が挙がる。

だとしたら断固否定する。

訴訟も辞さない。

人にそんな安い属性レットを付加するな、とジンの元から鋭い目付きがさらに鋭さを増すが相手は気付いていないのか動じない。

「えつとどこだろう、ここら辺で人がいそうな場所は……」

「……」

もしや退く相手を攻めなくなるタイプか、相手から攻められるのが嬉しいタイプのどちらかなのか……と、ジンが失礼な考察をしている間も、どうやら彼女は彼女なりに真剣に悩んでくれたようだ。

流星に少し罪悪感を感じなくもない気がするジンだったが「行列ができてたあのクレープ屋さんのクレープおいしそうだったなあ〜今度チノちゃんと一緒に行こうかな〜ふえへ〜」とか関係のない妄想へ転化していつている様を見てそんな気持ちは完全に消滅した。

ただその後すぐにハツとした顔をして考え直している辺りに根の善良さは現れている。

しかしどうにも締まらない。

それが彼女の個性であり一種の魅力でもあるのだろうが、今のジンにとってはどうでもいいことだったので一旦彼女の内面についての話はそこら辺の小川に流しておくことにした。

「う〜んその探してる子ってどんな子？ 私と間違えたってことは女の子だよ？ 仲が良いの？」

当のココアは一通り悩んだが満足できる答えが見つからなかったらしく、ヒントを得るため探している相手について質問をする。

ジンは少し思索した後、その「相手」と自身の関係をとて簡潔に

教えてやった。

「……そうですね。会ったら即チャンバラごっこするぐらいには仲良しですよ」

「おお〜！　　“えきさいていんぐ”な間柄だねっ！」

答えを聞いた少女は言葉の裏を察することはなく楽しそうに興奮していた。

（いや今の言葉をどう受け取ったらそういう反応になるんだ？）

色々ツツコミ所はあったが上手く誤魔化すことができたようだ。

しかし質問に答えたことで協力を許したと捉えられるかもしれない問題が生まれる。

これでは余計に断り辛くなると頭を捻るジン。

（さて、どうしたものかな……）

そこでジンは思索すると同時に、ココアに会ってから五度目になる気配の探索を開始する……それによって立てていた予想が確信に変わる。

どうやら“探し人”を探す必要は無くなったらしい。

「……わかりました。それでは貴女にも“人捜し”を手伝って貰いましょうか」

そのうえで背に腹は代えられぬと心中で嘆息しつつも、ココアの提案に乗ることにした。

肯定的な反応に彼女も頬が緩む。

高校生にしては無邪気過ぎるその性格にジンは呆れ超えて心配になつてきた。

「うんっ！　おじいちゃんも『小さな親切を受けたら、大盛りで返せ』って言ってたしね！」

だが彼の懸念など知るよしもない少女は、意気揚々と太陽のような笑顔を輝かせるばかりだ。

「それは素晴らしい教えですね。その考え自体は尊敬できます」

（『ただし相手が過剰な見返りを求めない良識を持つ人である場合に限る』という一文が足りてないけど……）

初対面の少年の抱く、不穏な考えに気付くこともなく。

ツンデレの妹を持つ姉とツンドラの弟を持つ姉 3

前回、自分の間違いを教えて貰ったお礼にジンの「人捜し」を手伝おうと思ったココア。最初は断っていた彼だったが再三の申し出の後に（渋々）了承してくれた。

そして現在、ジンがその「探し人」の心当たりがある場所に向かうため彼に同行していた。

「ああ、こつちです。この道を通ると近道になるんですよ」

彼女は言うとおりに道を進む。

近道というだけあって大通りを外れ、道を曲がるごとに人の気配が薄くなる。

等々完全に人の目がない、日の光さえ満足に届いていない小道に踏み込んだ所で目の前の少年の足が止まる。

狭い路地のため必然的に彼女も足を止めることになる。

「どうしたの？」

彼の唐突な行動に疑問を感じるココアだが、振り返ったジンはそれを無視して彼女の隣に歩み寄る。

彼女は自然と壁を背にする形になる。

「……こんな人目に付かない薄暗い場所にホイホイついてくるなんて、危機管理意識が足りませんね。知らない人についていっただらいいませんって教えて貰わなかったんですか？」

「ふえ？」

状況を理解してないのか間の抜けた声を出すココアの顔の横の壁面に、彼女の行動を制限するように腕を伸ばす。

「そんな風は無防備じゃあ、何をされたって文句は言えませんよ？」

体格差のある男性に逃げ道を塞がれ、助けを呼んでも誰も来ない状況。

少女は正しく檻に囚われた兎同然だった。

絶体絶命のココア。哀れ、心優しく純粋な少女は残酷にもここで穢されてしまうのか。

このままではそりやもうきつとR15なんてもんじやない大変な

目に遭わされてしまうだろう。

「なんで指伸ばしてまで壁に触れてるの？」

「……………なに冷静に観察してるんですか」

ただし二人の距離が不自然に開けていなければ、の話だが。

肝が据わりすぎだよ、と真顔で目を反らしながら吐息を漏らすジーン。

「ま、相手が僕で良かったですね。そうじゃなかったら今頃きつと身の毛もよだつ酷い目に遭わされていましたよ」

次に腕を退け「入学前の良い社会勉強になったでしょう？」と言いつつ、路地から光指す表通りに去っていく。

「あー！ 待って！」

数秒間、脳の処理落ちで惚けていたココアがそれを追って裏路地から出た頃には彼の姿は影も形もなくなっていた。

「どこ行っちゃたんだろう？」

表通りから橋を通って向こう岸に渡り、尚も周りを見渡す彼女の目にあるものが映った。

「っ！ あれは……………噂に聞く……………」

ココアに電撃走る。

その衝撃は彼の少年のことを一時的に忘失するほどだった。

惹きつけられるかのように一歩、また一歩と少女は近づいていく。

それほどもで彼女の心が囚われるもの、それは……………

「野良ごさぎー！」

この木組みの街の特色とも言える野良うさぎだった。

三度の飯よりモフモフ好きなココアは溜まらず一匹の野良うさぎに近寄ると、その体を優しく抱き上げる。

「ほわあくモフモフ天国だあく」

うさぎの体躯の快さを堪能する彼女の頭からはジンのことなど、とつくにどこかへ飛び去っていた。

※

『日常』の中で見つけた小さな幸せを当たり前のように楽しむ少女^{ココア}を、さつきまで少女がいた路地の影からジツと見つめる者がいた。

川で隔たれた橋の向こう側にいる少女と影に身を隠してそれを観察する存在。

その両者の姿は異常なまでに同じだった。

顔も体格も服も装飾品など、細かな持ち物に至るまで全てが同一。否、姿形だけに非ず。その存在は少女の記憶さえ擬態^{コピー}していた。

故にもし少女と「擬態^{コピー}」がある日突然入れ替わったとしても、きつと親しい友人や家族でさえ気付かないだろう。

少女がいなくなった世界でも我が者顔で存在し続けるだろう。

そんな「存在」が今、少女の元に向かうため影から一步踏み出す。理由は、言わずもがな。

少女がこれから生きて体験するであろう幸せを、青春を、人生を、そしてかけ替えのない未来を奪うために……

「待て」

背後から発せられた一声によって、踏み出そうとした二歩目が止められる。

“擬態”は、元にした少女とは似てもにつかない無機質な壊れた人形のような動作で振り返る。

そこにいる一人の少年を見る。

「やつと姿を現したか……絶好のタイミングだから当然だけど。ランデブーをセッティングしてやった甲斐はあつたよ」

よつぽど彼女にご執心だったようだからね、と少年・天々座刃は不気味な“人の皮を被った怪物”を恐れることもなく皮肉る。

どうして彼がここにいいのか。

それは彼の言葉から察することができるよう、この状況は彼が意図して仕組んだことだからだ。

つまりココアのことを囮として使ったわけだ。

「でも、会わせるつもりはない」

しかし垂らした餌を食わすつもりなど彼には毛頭無かった。

ジンは制服を着てくる上で一緒に持ってきていた学生鞆の中から竹刀袋を取り出し左手で握ると、それを腰の側に打刀を帯びるがごく構える。

“擬態”も仮初めの姿を捨て本来の姿……蜘蛛に似た異形を晒け出す。

その時、彼の頭上からその異形と同じ型の新たな異形が襲いかかる。

「っ……！！」

ジンは流れるような動きで前方に回避。

しかし前と後ろを二体の異形に挟まれる形になってしまう。

ふと見ると少女は今、まさか自分が怪物の標的になっていることなど知る由もなく偶然会って意気投合したであろう同年代の女の子と談笑している。

「なるほど。僕を殺した後はあそこにいる二人をお前らで仲良く山分けする、というわけか」

異形二体は何も答えず、地球上のどの生物のものとも言えぬ独特の鳴き声を発するばかり。

だがそれに混じる歪んだ愉悦の感情が肯定の意となっていた。

何にしてもこの『前門の虎、後門の狼』のことわざを体现したかのような構図。

狭い路地の前後を押しえられ逃げ場はどこにもない。

このままではジンは一方的に袋叩きにされ惨殺されてしまうだろう。

「で？ まさか『逆に追い詰めてやった』とか考えてないよね？」

ただしそれは彼がただの一般人であったならば、の話だ。

ジンは左手で掴んでいた竹刀袋を地面に落とす。

代わりに中に入れてあった得物がその手には握られていた。

そしてメタリックパープルの柄に取り付けられたトリガーを引く。

【Stand by】

ジンの得物『サソードヤイバー』から発せられた電子音声と連動するのように、背後にいた異形の足下が爆発。

正確には地面を勢いよく突き破ってサソリ型の機械が異形に襲いかかり、牽制したのだ。

（身元不明の『制服姿』の『未成年女性』の変死体……を生み出すことになっていた『ワーム』）

サソリ型の機械『サソードゼクター』はその尾にある毒針で何度も異形の顔面を刺した所で異形の反撃を許さずに反転。ジンの元に飛ぶ。

「お前達の未来……」

彼はそのゼクターを一瞥もせず、掌を後ろに向けた右手で掴み取る。

「……僕が、奪う」

左手で握り、腰に携えたヤイバーの鏢に当たる部分にゼクターを

セツト。

同時にその身を戦士に変える意味を持つ言葉を放ち、刀を引き抜くような所作でヤイバーを正中に構える。

「変身」

【HENSHIN】

電子音声と共に変身プロセスが開始され六角形状に全身を包む重厚な鎧を形成していく。

上半身をオレンジ色のチューブで覆われ、頭部にバイザーが装着された物々しい姿と成る。

この姿こそがマスクドライダーシステム第四号たる『仮面ライダーサソード』。

その『マスクドフォーム』だ。

「ッ!!」

変身後の隙を狙ったか、間髪入れずに正面の異形・ワームが飛びかかる。

しかしサソードはそれを上段の構えから力づくで叩き落とす。

続いて先のゼクターの牽制から復帰したワームも背後から強襲するが振り向く彼の胴抜きが決まり脇腹を切り裂かれ、怯んだところを肩口から袈裟斬りにされる。

その後もそれぞれが挑むがマスクドフォームのパワーと装甲を活かす彼の剣技に為す術が無く、全て力業で切り伏せられる。

流石に無策に戦っても罅が明かないと気付いたのかワーム達は再びサソードを挟む形で布陣を組んで好機を窺う。

「.....」

だがしかし、黙して油断無く剣を構える彼に隙など存在せず、どころかその身に纏う闘志よりも深く鋭い殺気は時が経つごとに膨れあがっていく。

沈黙に耐えられなくなったワームは後ろから羽交い締めにし、前から爪を振り下ろし殺傷する波状攻撃によって挟撃した。

「キャストオフ」

しかしそれを先読みし、後の先を取ったのはサソードだった。

【Cast off】

ゼクターの尾をヤイバーに押し込むことで再び鳴る電子音声。
それに呼応して上半身を覆っていた装甲が飛散^{パージ}。

秒速2000mの硬質な金属塊がワームらを吹き飛ばす。

それは連鎖的に装甲の下に隠されたサソードのもう一つの姿を解放した。

【Change Scorpion】

蠍の意匠を頭部や体に施された『ライダーフォーム』への変身が完了する。

そして無様に吹き飛ばされたことで晒された隙。

それを見逃す彼では無かった。

まずその剣を目の前で起き上がろうと膝立ちをしているワームの腹に突き立て、腰を入れてさらに深く刺す。

続けて躊躇無く蹴り倒すことによって無理矢理引き抜く。

「うう……や、やめて……たすあがつ！……ア」

倒れて少女^{ココア}に擬態したワームの胸に追いついた打ちの振り下ろし。

逆手で持ったサソードヤイバーの黒い刀身が吹き上げられた噴水によって染まる。

その噴水は始めは赤だったがすぐ緑に変わり、最後には元の異形に戻ったワームの体が爆散した。

その光景を見て勝機は無いと判断したのか、もう一匹のワームが表通りに駆けだした。

おそらく当初標的にしていた少女達を人質にするためだろう。

「あ——」

常人を遙かに超えるスピードを持つ異形の魔の手が今まさに少女に伸びようとして

「クロックアップ」

【Clock up】

「ここから先は通行止めだよ」

首に当てられた黒刃によって止められる。

クロックアップによって別の時間流に乗ったサソードは通常の何十、何百倍のスピードで行動ができる。

普通の人にとって一瞬一秒に満たない時間の中で繰り広げられる戦いが始まった。

ライダーフォームに成ったことでパワーと装甲を失ったサソードだが、逆にこのフォームは行動を制限していた装甲が無くなったことでスピードと手数に物を言わした戦法を得意とする。

それを証明するように袈裟斬り、逆袈裟、胴薙ぎと続く怒濤の連撃が橋の上で展開される。

最後の切り上げはワームを橋から落とし、戦闘の舞台は橋下の小川の浅瀬に移る。

さらなる斬撃の舞いの締めたる刺突で転がるワームにトドメを刺すため、ゼクターの尾を一度持ち上げ再度押し込む。

「ライダースラッシュ」

【Rider Slash】

ゼクターからヤイバーに注入された猛毒が光子に変換されスパークを鳴らす。

黒刃は必殺の毒刃へと変わる。

「スウー……」

剣を上段に構え、息を深く吸う。

「ハッ！」

最後の足掻きで我武者羅に爪を振るうワームの横を擦り抜け様に、胴への一閃。

振り返り、切っ先を向け残心をとるサソードの前でその身は爆発四散。

【Clock over】

「……れ？ いま後ろに誰かいた気がしたけど。気のせいかな？」

残るは、一陣の風のみ。

ツンデレの妹を持つ姉とツンドラの弟を持つ姉 4

時計の針が正午を示す時間。中学の始業式が終わった香風智乃かふうちのは彼女にとつて我が家であり仕事場でもある『ラビットハウス』の前に来ていた。

ここで彼女は母を亡くしてから父と祖父(?)の三人で暮らしていた……のだがこの間、この街の学校に入学することになって下宿先を必要としたココアを招待したことで今では四人(?)暮らしとなっている。

夜は父がバーを昼はチノと上記のココア、そしてバイトのリゼの三人で喫茶店を営んでいる。

また今日は数ヶ月前からバイトをしているある人が久しぶりに顔を出してくれる日でもある。

(最近会ってなかったから変に緊張しないようにしないと)

その人はこの約二週間バイトを休んでいた。

父親の仕事の手伝いが忙しくなったためとのことらしい。

現在まだ中学生の身の上の都合、便宜上はお手伝いという立場で実家のラビットハウスで働いているチノはその事情に共感し納得していた。

店主である彼女の父も同意見のためその長期休職を許した。

むしろ反発したのは同じバイト仲間であり彼の実の姉であるリゼだった。

件の父親くだんの仕事の手伝いの内容というものが何か、彼女すら教えて貰っていないことが納得できなかったらしい。

その場は「家族やそれに類する間柄でも全てを教えられるものではない。特に仕事に関する事ではな」と祖父が収めてくれたが、あの時のギスギスした空気がチノの脳裏によぎる。

ココアが来てくれたことで彼女の陽気に当てられリゼの雰囲気は日に日に元の明るさを取り戻していったが、その分別の事で悩んでいるような様子が見られるようになった気がチノにはした。

(っ……いけない。こんな暗い顔してちや)

ブンブンと頭を振り気を引き締める。

(『料理とは常に、粋すいなものでなくてはならない』でしたね)

彼の言葉を胸に抱き、ラビットハウスの扉のドアノブに手を掛ける。

(それにココアさんがいれば何だかんだで場を明るくしてくれる……はず、です)

ただいま、の声と共に扉を開く。

「大人しく白状しろ……早く楽になれるぞ」

「なら黙秘権を行使する」

年季の入った木製のテーブルを挟んで向こう側にいるリゼからの質問に、ジンは即答する。

彼は現在、刑事ドラマの取り調べよろしく木製の椅子に座らされている。

「軍隊の尋問に黙秘権は、無い」

「捕虜にだって人権はあると思うけど?」

予想の斜め上をいく展開にチノは言葉を失い呆然とする。

「なんだこの状況……」

「あ! チノちゃんおかえり!」

やつとのこと一言絞り出した彼女を対照的に、相も変わらずマイペースなココアが出迎える。

彼が何故このような仕打ちを受けているのか。チノはココアに現状の説明を求めた。

「えーと、それはねえ……」

それを受け、ココアはつい三十分ほど前の出来事から語り始めた。

※

自分の学校の入学式が明日だと知ったココアはその事実を教えてくださいました少年を(そっぴいば名前を聞いてなかったことを思い出し)探

す途中で、彼と同じく自分と同じ高校に入学するという和服の少女に出会った。

話して意気投合した少女に少年のことを尋ねるが、当然であるが外見の特徴だけではわからないとのこと。

そこは残念だったが気が合う少女とココアは必然的に友人になり、明日は迷わないように高校まで（話が盛り上がり過ぎた所為で間違つて中学校を紹介されたアクショントはあったが）案内して貰った。

そんなこんなで時間は過ぎていき、今日の所は少女も仕事中心のことで明日の再会を約束して別れ、彼女も自身の職場であるラビットハウスに行くことにした。

店の扉には準備中の札が掛けられており、店に入るとまだ店内には誰もいない。

とりあえずココアは店の奥で事務の仕事をしていた現マスターのタカヒロさんに挨拶をして、更衣室で制服に着替える事にした。

ちなみにこの店の女性用の制服は何気に巷で有名だったりする。

ココアもシンプルながら秀逸なデザインを気に入っており、それを着て仕事をするのがやり甲斐になっている。

（そういえばタカヒロさんが『長い間バイトを休んでた子が今日から一緒に仕事をする事になるからよろしく』って言ってたけど・・・）

どんな人だろう、とまだ見ぬバイト仲間の人物像に思いを巡らせながら更衣室に向かう。

（あつ、使用中の立て札が掛かっている。リゼちゃんはまだ学校だろうし、それならチノちゃんかな？ よーし・・・）

ココアはただ今、更衣室で着替え中であろうチノを驚かせようとノックせずにドアを開いた。

しかし中にいたのはチノではなかった。

「チノちゃんただいまあう、えええええ!!」

「何奴なにやつ・・・って、君は・・・」

中にいたのは久しぶりにラビットハウスに来て、今まさに制服のバーテンダーの服に着替えている最中のジンであった。

タカヒロ以外にラビットハウスに男性はいないと思ひ込んでいた彼女は人生で十指に入るレベルのショックを受け、およそ女性が出してはいけない声で驚く。

その惨状を見て逆に冷静になってしまったジンは冷めた視線を送る。

「胸元セクシーな泥棒さん!？」

「なんだそれは」

泥棒という謂われない罪を言い渡され辟易する彼だったが、誤解を解く前にまずは一言言っておきたいことがあった。

「……………男の生着替えとか誰得だよ」

店主に提案して更衣室に鍵を取り付けて貰おうか、とジンは真面目に検討した。

※

「それでこの状況に？」

そこまでの話を聞いたチノは今なお言い争い（と言う名の一方的な詰問）を続けている彼らを横目で見ながら「嗚呼、そろそろ開店準備をしないといけないのになあ」とでも言いたげな心労の息を口から漏らす。

「ううん、その事は私の声を聞いて来たタカヒロさんが説明してくれたから誤解は解けたんだけど」

ココアはチノの予想を訂正し、本題を話した。

「その後来たりゼちゃんにジンくんと会った時のことを話したら、リゼちゃんが顔を真っ赤にしてキッチンに走ってっちゃって……………」

「答えろ、ジン」

キッチンでの支度を終え、暇潰しに新聞紙を広げるジンの前にリゼ

が立つ。

そしていつになく真剣な声と鋭い目をしたりゼは彼にこう言い放った。

「何故、婦女子を暗い路地に連れ込むようなマネをした？」

「……保登さんめ、名前で呼ばれなかったのがそんなに……いや違うか」

こうして話は冒頭のシーンに戻る。

「社会勉強って……まあ、色々やり方が極端なジンさんならしかねないこともないですけど……」

ココアとジンとの初対面時の話も聞き、まずは状況を理解したチノ。

「やり方が極端って？ 確かにあのリゼちゃんに一步も退かないのは凄いなと思うけど」

モデルガンとサバイバルナイフをそれぞれ手に持ち詰め寄るリゼに眉一つ動かさず応対することは、実年齢よりも大人びていると周りから評価されるほど冷静沈着なチノでも無理であろう。

「ええ、初めてラビットハウスに来た時も凄かったですよ」

あの人はある意味大物の変人です、と前置きしてチノは彼と初めて会った日のことを話し始めた。

※

元々ジンは進んでバイトを始めたわけではなかった。

その社交性の無さを案じたりゼに半ば無理矢理ラビットハウスに連れてこられたのが始まりだった。

「やあ、チノ。こいつがここで働かして欲しいと私が前に話した弟の……おい、何をしているんだ？」

チノに挨拶がてら彼の紹介をしようとしてリゼが振り返るが、肝心の彼はそんな話は他人事とばかりに壁や店のインテリアを観察することに集中していた。

「テーブルや椅子の傷や老朽具合……趣と取るか廃れと取るか……」

「それはどういう……」

弟の奇行を見て怪訝な表情をするリゼが疑問を言い切る前に彼は口火を切る。

「別にこの店に来るとは言ったけど、働くとは言っていない」

ジンはそう言って初めに彼女がチノに対して行おうとした説明を切り捨てた。

「料理とは常に、粋すいなものではなくてはならない。僕が働くに相応しい店か、見極めさせてもらおうか」

（なんだこの人……）

初対面の人から予想外の不遜な物言いをされ、困惑を隠せないチノ。

それが香風智乃と天々座刃の衝撃のファーストコンタクトだった。

ツンデレの妹を持つ姉とツンドラの弟を持つ姉 5

場所はラビットハウス。刻は午後三時半過ぎ。窓から薄く日が差し込み、見れば朧に映る三人の人影。

いつもなら静かにゆったりとした空気が流れる店内には現在、妙に緊張した雰囲気支配されていた。

チノが豆を挽く音だけがやけに大きく響く。

「ジン。あんな啖呵を切って何のつもりなんだ？」

そんな場の空気に困惑するリゼが黙して座るジンに耳打ちする。

「これは彼女と僕との真剣勝負。横槍は無用だよ」

まるで決闘前の剣士を思わせる佇まい。

料理の事となると梃子でも動かない彼の性格を知っていたりゼだったが、まさかコーヒーすら料理の一つとするとは予想しておらず戸惑う。

「真剣勝負って……相手はまだ中学生だぞ？」

「だから？ 僕だって一応まだ中学生だ。それに売り手として代金を取る以上、彼女だって飲食業を営んでいる者の一人であることに変わりない」

諫めようとする姉の進言を受けても意思を曲げない。

いつそ清々しいほどに頑な姿勢を貫くジンに彼女は閉口せざるおえなくなる。

「カップチーノです」

そのタイミングでチノが肅々とコーヒーカップをカウンターに置いた。

「……………」

ジンはそのカップの持ち手を人差し指と親指で摘み、持ち上げ、口元へ運ぶ。

味わうように香りを鼻に通した後、カップを傾ける。

その所作の一つ一つに彼の気品が感じられる。

「ちなみに僕はメニューに書いてある料金以下の不味い品を出した店には……………」

数度に分けて全て飲み干した彼は席を立ってズボンのポケットに手を入れる。

「料金通りに払って二度とその暖簾を潜らないと決めている。そして」

語りながら抜き身の刀のように煌めく瞳で目の前にいる小さなバリスタを見据える。

少女はその威圧に生唾を飲んだ。

瞬間、まるで時が静止したような空白が店内を包む。

時計の針が動く音がチクタクとリズムを奏でる。

誰も動かない、動けない世界で、彼はそんなことは関係ないとばかりにあっさり懐から手を出した。

「さつきは失礼な事を言つて悪かった。このコーヒーはメニューに書いてある以上の価値があるよ。あと、お釣りはいららない」
「え?」

彼は深く頭を下げ謝罪した。

続いて取り出した財布から抜いた日本銀行券を一枚引き抜き、流れる動作でカウンターに乗せた。

「僕は饒舌なグルメリポーターじゃないからね。君の最高の品コーヒーに一人の客として敬意を示す方法をこれ以外に僕は知らない」

「は、はあ……ありがとうございます」

戸惑うチノだが褒められた事自体は悪い気はしなかった。

しかし自分のコーヒーをここまで絶賛されたことは無かったのでどう反応したら良いものか困ってしまう。

「いや、素直に美味しかったと言えよ」

弟の変則的な褒め言葉に思わずツツコミを入れてしまうリゼだったがそれにジンは「その言葉は彼女が一流のバリスタになった時までとっておくよ」と間髪入れず切り返す。

「それに僕はいつでも素直なつもりだよ……自分の心にだけは、嘘は吐かない」

物寂しく呟いた続きの言葉は、チノの耳にかろうじて入った。

だが既にリゼの注意は別に移っており、その視線の先はテーブルの

上の紙幣だった。

厳密には新札の如く皺の無い、印刷された英夫の頭がチノ側に向くようにまつすぐに置かれた千円札（ラビットハウスのコーヒーの税抜き価格の平均は500円）を眺めていた。

「千円ってまた微妙な……何だその溜息は」

一度チノに断りを入れて席を立ち彼女から距離を取ると、手で招いてリゼも自分の隣の窓際に来させる。

「リゼ。粹すいとは、何だと思う？」

先程の物憂げな表情は鳴りを潜め、同じ小さな声でもリゼにはハッキリ聞こえる凜とした声で持論を語り始めた。

「粹すいとは、余計な不純物の無い最も優れていることを指す。では最高とは何か？」

問いかけるがリゼが答える間もなく答えをジンは言う。

「それはこの上なく素晴らしくそして現在において最も望ましい状態を体現した存在に与えられるべき賞賛だ」

あくまで僕個人の解釈だけど、と付け加えつつもその言葉は揺るがぬ自信によつて紡がれていた。ジンはそこで一旦言葉を切る。

「彼女はプレッシャー圧力や挑発を受けても余計な雑念を抱かず、プロとして無駄のない粹すいな振る舞いで最高の品を提供してくれた。ならそれに最高の報酬を返すのは当然のことだよ」

カウンターの向こうでコーヒーカーップを黙々と洗うチノを流し目で見て、ジンは話を結ぶ。

しかし彼の回りくどい言い方では結局彼女は要領を得ず、リゼは首を傾げる。

「ん？ つまりどういうことだ？」

ジンは首を傾げて頭を捻るリゼをジトリとした目で見返し、仰ぎ、一息。

「『過ぎたるは及ばざるが如し』と言えばわかる？」

言うが早いか彼は一人でチノの元に戻る。

「え、えーと……」

「すまない。待たせてしまった。それじゃあバイトの話だけど週何日

で何時間か、そこから話そう」

「ま、待てい！　また勝手に話を進めるな！」

ポカーンと惚けていたリゼだったが自分が明らかに軽んじられていることを感じ、カウンターに飛びつくように駆け寄る。

「いま僕はオーナーと話しているんだ。邪魔しないでよ」

「さつきまではバイトしにきたわけじゃないとか言ってただろ！」

「それは一体いつの話？　その僕はとっくに過去のものを。今は今の話をしているんだ」

「屁理屈を言うな！」

「僕の記憶に屁理屈なんて言った覚えは無い。リゼが理屈を理解できていないだけだよ」

「な、なにをお!?」

先程までの緊張感はどこへやら。

自分を邪険に扱われ怒り心頭に発するリゼに、あくまで自身の信条に徹するジン。

そしてそんな二人の間でオロオロするチノというカオスな空間が広がっていた。

「お、オーナーは祖父……今は父ですから私は違いますよっ。リゼさんも落ち着いてくださいってリゼさん!?　店内でのCCCは控えてくだ——」

※

と、こうような経緯によってジンはここ、ラビットハウスで働くことになったのだ。

「ふむふむ、なるほど……」

その話を聞いたココアは何事かを企んでいるように顎に手を置く。

「? あっ！」

それを訝しむチノだったがそこで思い出す。

何だかんだでまだ開店準備をしていないという事実には。

考え事をしていたココアと説教（馬耳東風）を切り上げたりゼも続いて気付き慌て出す。

しかしそんな状況でジンだけが冷静だった。

「その心配は無い」

彼は三人の横を過ぎて、カウンターを通り、自身キツチンが庭に帰る。

「掃除なら既に終わらせた」

その背後に広がるのは窓枠にすらホコリ一つ無い、輝くラビットハウスの御姿だった。

「こ、こんな綺麗なラビットハウス初めてっ……………！」

驚きを越え感動すら覚えたココア。

「説教の途中にやたら逃げ回るなど思っていたが……………」

一切悟らせなかった鮮やかな手際に冷や汗を流すリゼ。

「おおっ……………！」

人間的には兎も角、職人としてはある意味祖父より尊敬している彼の手腕を再確認し彼が復帰したことを喜び、言葉を失うチノ。

三者三様に圧倒されて立ち竦んでいる彼女らに、ジンは言い残す。

「仕事を請け負うなら最高の仕事をし、目指すならば頂点を目指す……………それが僕にとつての粋すいだからね」

そして彼は颯爽と店の奥へ消えていった。

※

その数分後、とある雑談。

「ジンさんは相変わらず性格はアレですが仕事の方も相変わらず完璧ですね」

「その意見は理解できるが、姉としては複雑だな……………」

チノは基本的には言葉数は少ない大人しい子だが、言うときは意外

と容赦なく言い切る。

(そこがジンと似ていて……だからこそチノに突っぱねられても尚も踏み込んでいけるココアに私は……)

「ホント凄いいよね！ リゼちゃんの弟くんだって聞いた時も驚いたけど、こんなにピカピカしたラビットハウス見たの私初めてだから見たからビックリしたよ！」

リゼの交錯した胸の内など知らぬココアはいつものように元気いっぱい自身への思いの丈をさらけ出す。

「そうですね……まるで昔に戻ったみたい綺麗です。ココアさんがやるよりずっと……」

途中で台詞を切り、ジツとココアを見つめるチノ。

その静観に始めは首を傾げるココアだが、ハッとその意図を察する。

「も、もしかしてチノちゃん。ココアさんいらぬかも、とか思っていよね？」

戦慄し、縋るすがように問いかけるココアだがチノの返答は無く、ただ静かに目を晒した。

「いやあああああ!! チノちゃんに捨てられるうううううううう!!」

ココアが悲痛に泣き叫ぶ中、リゼはその風景に呆れつつも独りごちた。

(やっぱり私はココアに憧あこがれているんだろうな……)

少女は一人、浅はかで惨めな自分を密かに嫌悪した。

初二段変身×2

始業式後の昼下がり。ジンはまっすぐに帰宅し、桜の花びらを舞い踊らせる春風が吹き抜ける街道を黒と銀のシンプルなツーカーラーのオンロードバイクで駆けだした。

喫茶で使う仕入れ品の配達をラビットハウスのマスターであるタカヒロにお願いされていたのだ。

仕入れ品を発注していた店舗を回りながら、その道中で確認するようにエンジンを吹かす。

(以前使われていた装備を整備・改造したマシンだと言っていたから実践前に試験的に走らせてみたが、予想以上に安定している……最高だ)

そうして父の部下達のためのお礼を考えているうちに目的地が見えてきた。

(とりあえず普段の生活で乗り回す分には問題無さそうだ)

十全なメンテナンスを行っているのがわかる上質なエンジン音を鳴らしながらラビットハウスの前でゆっくりと停車する。

エンジンを切りバイクを完全に停めると、被っていたメタリックパールのフルフェイスヘルメットを脱ぐ。

春風はヘルメットの下にあった彼の漆塗りのようになめらかな短髪をなびかせた。

「あつージンくん！なにそのバイクカッコイイ！」

タイミングよくただ今下校してきたばかりのココアとばったり出くわした。

ジンは手に持ったヘルメットをバイクのハンドルに掛けると億劫そうに振り返る。

「はあ……どうも、こんにちは保登さん」

ジンはこの天真爛漫な少女が苦手であった。

そう『嫌い』ではなく『苦手』。

大した違いが無さそうで大分違う。少なくとも本人にとっては。

「ねえねえちょっと触っても「ダメです」えー、何で？」

「新車ですから。それに保登さんに触らせると誤作動起こしそうですし」

優秀なメカニック達の品に限ってそんな事態は万に一つも起こらないだろうが念のために用心しておくジン。

それにココアならそんなバットミラクルを起こしかねないという直感的な懸念もあった。

だが当のココアは尚も食い下がり、目を輝かせながら手を合わせる。

「ちよこつとだけだから！先っぽだけ！」

「変な言い回しは止めてください。そんなにバイクと触れ合いたいなら免許取った後に自分で買ってください」

そんな彼にバイクをくれたのは父親だった。

しかしこれからも日常的に使うつもりとはいえ仕事の備品でもある訳なので、ジンに引け目は無かった。

「ちよつとだけだから」

しつこくつきまとうココアを無視してバイクを邪魔にならない場所に駐車したジンは、その足で頼まれた品を店内に運び込む。

仕入れ品を納品し終わった後、外の騒ぎを聞いたのかりゼが事情を聞く。

この時ジンではなくココアの方に聞いた辺りが、彼女の心境の複雑さを表していた。

「いつもお兄ちゃんが乗ってるから気になって、お兄ちゃんも危ないからってあんまり触らせてくれないし……でも一回だけ後ろに乗せてくれた時があつて、まるで風と一つになったみたいだったな」

ココアは遠い地にいる家族のことを想いながら寂しそうに懐かしそうに理由を語る。

その姿から彼女の家族思いな性格が見て取れた。

「なあ、ジン「やだ」

「……私はまだ何も言っていないぞ？」

一通り話を聞いたリゼが何かを言う前に、ジンは切り伏せるように

それを遮る。

『どうせ』ここまで言ってるんだから少しぐらい触らせてやれよ』とか言うんでしょ？ やだ」

ジンは嫌なことはハッキリとNoと断れる人物だった。

「やだやだって、お前は駄々を捏ねる子どもか!？」

最近思い詰めている所為もありつついつい口調が荒くなってしまうリゼ。

「駄々を捏ねているのは一体どちらか」

「ぐぬぬっ」

全くもって正論であった。これにはリゼもすぐには言い返せない。

「……あつ、そうだ！ ねえチノちゃん」

その様子を見ていたココアが唐突に何かを思い出し、カウンターにいたチノに何かしら聞きに行った。

先程までのバイク云々のやりとりなど忘れてしまったかのようだ。

無碍に断られても曇らない明るさもそうだが、この切り替えの早さもココアの長所だろう。

「大きいオープンならありますよ。おじいちゃんが調子乗って買ったやつが」

「ホント!? 今度の休みの日みんなで看板メニユー開発しない?」

「看板メニユー?」

その華麗なまでの心変わりに呆気にとられていたりゼもその突拍子のない話題に疑問符を浮かべる。

「焼きたてのパンだよ!」

ココアは疑問に元気良くに答える。

だが、まるで遠足前日の小学生のように高揚している彼女と対照的にチノは不安そうな表情になる。

「でも買ってからほとんど使ってませんし大丈夫でしょうか」

「それなら問題ない」

「「え?」」

今まで静観していたジンはチノの不安を否定する。

その言葉に三人が振り返る。

ジンは何も言わずキッチンを指し示す。

三人はそれに従ってキッチンに足を運ぶ。

「新品みたい、です」「おお！」

チノが感嘆の声を上げた（何かイケボのおじさんの声も一緒に聞こえた気もするが）。

埃を被っているどころか錆一つ無いオーブンがそこに鎮座していたのだ。

「キッチンは僕の庭。自分の庭を手入れすることは当然のことだよ」

彼にとってキッチンの設備の管理は庭園の樹木を剪定するのと同じことらしい。

「勝手に庭にしないでください」「そうじゃ！　ここはワシの店じゃ！」

オーブンの件は助かったがそれはそれ、これはこれ。

チノから細やかな（ついでにティツピーからも）抗議が入る。

何はともあれ準備は既に万全であった。

※

そして時が経って当日。

白地で袖に淡い紫のストライプが入ったポロシャツにベージュのズボンという出で立ちのジンは天々座家の屋敷の前で静かに腕を組んだまま待っていた。

「流石に早いな」

玄関から出てきた黒のブラウスとジーンズというこちらもシンプルながら元の容姿の良さも相まって十二分に着こなしているリゼは、半ば呆れつつも何から何まで準備と仕事が早い弟に感心する。

何故このいつもは休日のスタイルが違って中々二人で行動することの無い姉弟が私服姿で出かけようとしているかと言うと、ココアが言っていた看板メニューの開発をラビットハウスでするためなのだ

が………。

(それなり付き合いは重ねてきたがココアの行動は読めないな………)

問題は看板メニューの話題の際にココアがジンに料理対決で宣戦布告したことだった。

聞くところによると彼女の実家はパン屋であり、小さな頃から小麦粉と触れ合っているからパン作りの一点に関しては自信があるとのこと。

ジンも受けた挑戦を「その意気やよし」と快諾。

今日までやたら張り切って暇があればウチのキッチンを占領していた(おかげで夕食の時間が少し遅れたこともあった)。

だが現在リゼを逡巡させているのはその後、ジンが近くにいないことを見計らってココアが彼女に耳打ちした内容だった。

※

「はあ!? 私がジンに手料理を!?!」

「そうだよリゼちゃん!」

どうやらかつてチノとジンが初めて会ったときのエピソードから着想を得たらしい。

料理対決を挑んだのも、そうやって自分の得意料理を食べてもらい認めてもらうことでずっと他人行儀な姿勢を続けている彼の態度を変えられるのではないかと考えたからだ。

そしてあわよくばリゼも自身が作った料理でジンとの絆を深めるようココアは提案したのだ。

だがリゼは素直に首肯することができなかった。

天々座刃という人物がどれだけ料理に強い信念こだわりを持っているか姉であるリゼもよくわかっていたからだ。

彼は前提として料理が好きだ。それは「食べること」も「作るこ

と”も。

そして彼は妥協しない。それは”他人”に対しても”自分”に対してもだ。

お為ごかしや社交辞令など言わないし、やると決めたことや任された仕事は最後までやり遂げる。

初対面時のチノとのやりとりや今回の料理対決への意気込み具合がまさしくそれだ。

もし今更になってココアが「やっぱ対決は無しで」とか「あれは冗談だよ」とか言って勝負を反故にすれば彼は静かに怒り、失望して、彼女と一生口を利かないと心に誓うだろう。

日頃から携帯食料を好んで食しているリゼが料理を、ましては今まで作ったこともないパンを食べて（ジンは『料理を食べない』という選択はしないという確信がリゼにはある。どんなに不味くてもそれが毒物以外で料理と呼べる物ならとりあえず完食する。彼女の弟はそういう男だ）もそれで認められるとは思えなかった。

しかしそうやって躊躇しているリゼの背中を押すようにココアは励ました。

「大丈夫だよりゼちゃん。おじいちゃんが言ってたの『どんな調味料にも食材にも勝るものがある。それは料理を作る人の愛情だ』って」

※

「ほら、行くよりゼ」

不意にジンがリゼに何かを投げ渡した。

反射的に彼女がそれを受け取るとそれはゴーグルが付いたヘルメットだった。

リゼが見ると彼はバイクに跨っており、荷物を後部の荷台に載せてエンジンをかけている状態だ。

ついでに乗っていけと言いたらしい。

「ココアには頑なに触らせようとしなかった癖に」
リゼは意地悪な言い方をするがジンは「リゼなら変なところ触って壊したりしなさそうだし」とあっさり返す。
それは姉への信頼だと受け取っていいのか、とりゼは戸惑うがジンは急かされたことでそれを一旦脇に置いてまずはラビットハウスに向かうことにした。

※

「君は……………」

「貴方は……………」

そのラビットハウスの前で出会った黒髪ロングの少女。

少女を見た途端ジンの顔に僅かながら驚愕の色が見えた。

それは相手も同じらしく「まあ」とお上品に手を口元に当てている。

「二人は知り合いなの？」

彼女はココアが呼んだ客人のようで、新しい生活でできた新しい友達らしい。

聞かれた少女はココアにこう答えた。

「ええ、彼は『命の恩人』なの」

初二段変身×2 2

バイクを駆ってラビットハウスの前まで来た天々座姉弟を迎えたのは居候のココアともう一人。宇治松千夜うじまつちやと名乗る和服が似合いそうな雅な雰囲気まじなの少女がいた。

リゼとは勿論初対面だった彼女だが、どうやらジンの方とは面識があったようで出会って早々「命の恩人」と意味深に呼んだ。

「え？ それはどういう・・・」

藪から棒の千夜の発言に全員が動揺する。

ジンも動揺していた。

「いや何故お前も!？」

表情には出していないが口を噤んでいる様から察して反射的にジンに視線を向けるリゼ。

それに気付いたジンはややこしい状況に溜息を吐く。

「誤解を招く言い方はよしてくれ。その言い方だとまるで君自身の命を助けたみたいじゃないか」

「ふふ、言われてみればそうかも。でも貴方に感謝しているのは本当よ?！」

意図的に誤解を生む物言いをしたであろう、無邪気な微笑みを浮かべる千夜。

(あの日も君は、同じ笑みを浮かべていたな)

相変わらず人をからかうのが好きな千夜に呆れつつも、ジンは彼女と初めて会った日の事を思い起こす。

※

それは先月のある休日の日のこと。その日も今日のように天気は快晴だった。

その晴れやかな空を横切る影が二つ。

(まな板の上で大人しく捌かれる魚はいないとしても、ね)

影の一つは変身したジン・仮面ライダーサソード。もう一方は二足歩行のダニといった様相のワーム。ジンはそのワームを追っていた。

ワームは伊達にダニの姿をしていないと誇示するが如き跳躍力で、木組みの家の屋根から屋根へ飛び回り逃走していた。

足場が不安定な屋根の上ではサソードは満足に動けず、状況はイタチごっことなっていた。

「(直接斬るには、動きを止める必要がある。なら……)ライダースラッシュ」

【Rider Slash】

しかしそんな事実上の膠着状態に痺れを切らしたサソード。彼のライダースラッシュが飛んだ。

「——ッ?!」

ライダースラッシュの発動でサソードサイバーは、マスクドライダーステムによって身体を駆け巡る『タキオン粒子』とサソード固有の『ポイズンブラッド』を混合し光子に変換した猛毒を纏う。

サソードはこの光子を斬撃波のようにワームへ撃ち放ったのだ。

直接斬りつけるパターンと比べると破壊力が落ちる斬撃波だが、空中で無防備な相手を撃ち落とすには十分だった。

だが、そこで彼は気を抜かない。

「プットオン」

【Put on】

すぐさま『プットオン(『キャストオフ』したマスクドフォームの装甲を再度装着する機能)』により、両腕部にのみマスクドフォームの装甲を出現させる。そして装甲に付随するオレンジのチューブ『ブラッドベセル』を伸ばし、落下直後の無防備なワームを拘束した。

「——ッ!!——ッッッ?!」

ワームが慄く一瞬の隙に距離を詰める。

そして剣の柄頭を構え……殴打殴打殴打殴打殴打。抵抗するワームの顔を容赦なく殴りつける。

残酷なほどに。

それは異常なまでの執念を感じさせる所業だった。

「——これで、さっきの様に跳んで逃げれないよね」

熱の無い言葉。むしろこれだけの事を機械のような冷静さで行うサソードに、ワームは戦慄した。

しかし再度逃げだそうにも、頭部のダメージで立つことすらままならない。

(……………ここまで逃走を許してしまった。恥ずべき失態だ)

ワームの反撃を警戒しつつ剣を構え直し、サソードは自戒する。

何故ならあまり戦いを長引かせるのは、戦闘で破壊された建造物の補修や目撃情報を攪乱するカバーストーリーの流布などの隠蔽工作の時間が増加するからだ。

特に今回は手こずり過ぎた。ワームを発見した際の彼の一瞬の動揺が、ワームの逃走を許してしまった。

今回の後処理を任せる隊員達の負担は想像に難くない。

(だからここで、確実にトドメを刺す)

……………もしもこのワームを取り逃がしてしまったり、隠蔽工作が失敗してワームの存在が明るみに出たりした場合の最悪を考えれば、尚更ここで逃がす選択肢はない。

それを理解しているからこそ、サソードは静かに剣を振り上げる。

「まっ、待ってくれ！」

そこでワームは成人男性へ姿を変えた。

「あ、明日、娘の誕生日なんだ！ だからっ！ それまででいい！」

男は平伏し、涙を流し、必死に懇願した。

サソードの剣が止まった。

「あの子の笑顔をもう一度見たい！ それまで、待ってく

サソードの剣が断った。

男の姿をしたワームの背中から生えた、今まさにサソードに向けて突き出された鋭い触手を。

「あ」

返す刃が、男の姿を裂く。

サソードの重厚な鎧が緑の鮮血に染まる。

「……………その笑顔を受けるべき人を、お前は永遠に『奪った』んだだよ」

ワームの亡骸の傍に膝を着き、彼は囁く。

不思議と声色に強い憎悪は無く。

されど勝利の喜びも無く。

憂い、諭すような囁きだった。

既に自身の手で殺めた相手に対し、全くの無意味な行動だった。

彼自身、行動の虚しさを噛み締めるように頭を振って立ち上がる。

「ああ、そうだ。隊員達に早く連絡しないと」

飛沫は、紫の仮面にも飛んでいた。

異形の血に濡れた仮面には、獲物を狩る蠍の鋏を模した複眼。

その複眼はワームの血と同じ色だった。

血は鋏の縁に沿って流れ、地に落ちる。

サソードの視線先には、男の姿では無くなったワームの亡骸があった。

妻子を持つ、一人の成人男性の命と存在を奪った『擬態』の残骸が

あった。

「未来、奪えなかった……………」

彼の脳裏に、ワームが逃走時に踏み潰したプレゼント箱が浮かんで……………消えた。

「もう2時か」

正午からワームとの戦闘が長引いたことで昼食を食べ損ねていたジン。

こんな日はとりあえずおいしいものを食べて腹を満たすに限ると思つた彼は街に出かけた。

しかし運が悪いことに目を付けていたどの店も閉まっていた。

そもそもジンが好む飲食店は最高の品を出すという大前提の基に穴場的、隠れ家的な店が多くを占める（並んで待たされるのが何よりも嫌なので）。だから拘りが強い店特有の急な臨時休業は想定していたが、よもや全滅とは流石に考えていなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

出鼻を挫かれたやるせない気持ちを抱えながら、もういつそのこと自分で作るかとジンは帰路につこうしていた。

その時、すれ違う母子。

子供の方は6歳ぐらい。同年代の子の中では大人しそうな、されど子供らしい腕白な笑顔を見せる男の子。

母親は綺麗な黒髪をしていた。母親の慈愛と女性の包容力、どちらも内包する微笑みを我が子に向けている。

それを映したジンの瞳に、まるでフィルムを重ねるように記憶にある光景がフラッシュバックする。

しかしその二つは似ていたが、決定的違いがあった。

一方は現在いまにあり、一方は過去にある。

それらは二度と、現在で重なることはない。

「ねえお母さん見て見て！ うさぎさんがお空を飛んでいるよー！」

男の子の言葉に母親は首を傾げながら見上げる。

「ほんとねえ・・・・・・・・お人形かしら？」

母子の会話を聞いて、振り払うように顔を軽く振ったジンも釣られて空を見る。

すると確かにウサギが見えた。黒いカラスに掴まれた黒いウサギ

で頭には王冠を被っている。

微動だにしないため、遠目にはぬいぐるみに見えるだろう。

だがジンの目には僅かに身じろぎする姿が見え、同時にカラスはその爪を滑らせウサギを空高くから投げ出した。

「な——」

瞬間、彼は地面を蹴った。

幸い落下地点との距離は近く、スライディングするようにして抱き留めることができた。

「運が良いウサギだ。僕が近くについて良かったね」

悪態ともとれる台詞をウサギに言っつて、直後にウサギ相手に何を言っつているのかと自分を諫める。

その姿をさっきの親子に見られたことでバツが悪そうにウサギの顔を見下ろす。

さっきまでカラスに攫われ高所で吊らされあげくに落とされたにも関わらず、その目に恐怖や不安の色は無い。その装飾から誰かの飼いうサギかと思われるが、見知らぬ相手に抱きかかえられていても動じない様子からただの者でない風格を感じる。

「ごめんなさいーいー」

そうこうしていると緑の和服を着た少女が息を切らしながら走ってきた。

それが千夜だった。

彼女はその名を『あんこ』と言う黒ウサギの飼い主であり、攫われた彼をここまで走って追いかけていたのだ。

「この子を助けてくれてありがとう。あと、ごめんなさい。その所為で服を汚してしまって……」

「いいよこのくらい。服はまた買えばいいから」

千夜は自身の飼いうサギを助けてくれた感謝と謝罪をした。

彼女の言うようにあんこを抱き留めた際、ズボンが擦れて汚れがついてしまったのだ。

千夜からしたら素人目にも安くはないとわかる服を汚してしまつたので申し訳ない気持ちなのだろうが、ジンにしてみれば数ある私服

の一つなのでそこまで気にしてはいなかった。

それに天々座家の主たる父は民間警備会社の社長であると同時に、この街の有力な地主。金で買えるもので過度に頓着するのは逆にみっともない。

しかし恩を貸しっぱなしにするのも借りっぱなしにするのも嫌な性分なので「何か美味しい店を紹介してくれたらいい」という条件を（ちようどマンネリを感じていたのもあり）提案した。

「それなら私の店でご馳走するわ！」

その提案を聞いた千夜は嬉しそうに自分の喫茶店でお礼をすると答えた。

別に奢ることまで要求していないが、それで相手の気が済むなら良いと彼は承諾した。

「だけど、一つ聞きたいことがある」

あんこを抱いて案内を始めようとした千夜の瞳を真っ直ぐ捉えてジンは問う。

「その料理は最高かい？」

少女はその問いに言葉では答えずに挑戦的で、されど邪気の無い笑みを返した。

そしてその日からジンの行きつけに『甘兎庵』が加わった。

※

「ジンさんの人間関係の話はいつもそんな感じですよね」

話が終わって最初に口を開いたのはチノだった。

説明（千夜視点のみ）を始める際に店内に入ったので自然と中で待っていたチノも話を聞いたのだ。

「そんな話、私は聞いてなかったぞ？」

「身を挺して助けるなんてヒーローみたいだね！」

話を聞いて各々がそれぞれの感想を言うが、ジンにとって過去は過去、今は今。

「……『米粒から人間まで、総ての生命に敬意を払う』それが僕の心情だからね。あと、僕はヒーローじゃない」

「そう？ ウサギでも命を助けることができる人は、私はみんな『ヒーロー』だって思うよ？」

「……そんなことより小麦粉等の基本以外の材料はそれぞれが持参するという話だったけど、みんなはどんな食材を？」

「もー！ ジンくん無視しないでよー！」

ジンのヒーロー呼び否定に対し、不思議そうに首を傾げるココア。そんな彼女を無視して、ジンは話の流れをパン作りへ戻す。

大分強引な話題の切り替えだったが、そもそも当初の目的であるためココアから千夜、チノと順番に答えていった。

「私は新規開拓のために焼きそばパンならぬ焼きうどんパンで勝負だよ」

「自家製の小豆と梅干しと海苔を持ってきたわ」

「冷蔵庫にイクラと鮭と納豆とゴマ昆布がありました」

「なるほど、面白い」

「いやおかしいだろ」

まともなのは私だけか、とイチゴジャムとママレードを両手に持つリゼは狼狽する。

「ジンくんは何を持ってきたの？」

「少し待っててください。エートマト、玉ねぎ、ニンニク、ローリエ、オレガノ、タイム、バジル、オリーブオイル、その他諸々と調味料――」

ココアに質問を返されたジンは、食材を羅列しながらバックを開けて手を入れる。

そしてそこから瓶詰めを一つ取り出した。

「——を、調理したものだよ」

トンつと赤い液体が入ったそれをテーブルに置く。

「それは、まさか……」

その内容物を察した千夜が息を飲んだ。

「そう、これは——」

「パン作りだよな？」
——ピザソースだよ」

まさかのオシャンティーなイタリアン路線。いや梅干しやら納豆よりかは遥かにパンに合っているだろうが、この流れでピザソースを出してきたことに、そもそもわざわざ事前に作ってきたことにリゼは内心で「三分間クッキングかな？」とツツコミを入れざる負えなかった。

「インパクトも、女子力でも負けたわ……」

何故か千夜がガツクリと膝を着いてうな垂れた。リゼは気付いたが、そつちまで捌く余裕が無いのでスルーした。

さつきからチラチラと何か期待するように見てくるが、リゼは忽然とスルーした。

「ピザパンならチーズがいるんじゃないですか？」

「……ジンのことだから既に用意してるんだろ？」

そこでチノが常識的な意見を投げかけた。違うだろツツコミ所、と思いつつリゼも投げ遣りに振る。

その言葉を待ってましたと言わんばかりにジンはキッチンの冷蔵

庫の扉を開けた。冷蔵庫の奥には普段店で使わないカットされたモツツアレラチーズとパルメザンチーズがあった。

「当然だよ。料理は下準備が大切だからね」

「でも冷蔵庫の個人使用は止めてくださいね」

当然の指摘だった。

「……インパクトも、女子りよ——」

「わかった！ 聞こえてるから！ とりあえず立ってくれ！」

そして新しい知人から早速ツツコミ属性を見出されたりゼだった。

※

「さあ、やるよお！」

気合十分。ココアが鬨とぎの声を上げる。

「パン作りを舐めちゃいけないよ！ 少しのミスが完成度を左右する戦いなんだからね！」

「おおっ！ まるで幾多の戦場を潜り抜けた歴戦の戦士のようなだ！」

リゼはそのオーラから少し大袈裟に評価した。

「料理とは粋すいなもの。料理で妥協や適当をする者は………僕が許さない」

「こっちはまるで数多の死線を潜り抜けた厳格な剣士ねっ！」

そして千夜の言葉は意外と正鵠を射いていた。

「ただでさえ暑苦しいのに、さらに変な緊張感を混ぜないでください。二人とも料理くらいで熱くなりすぎです」

「それは違うよチノさん」

温度差に辟易した様子のチノにジンは静かな物腰で異を唱える。

「食材を調理することは生命を扱うということ。真剣であるのは当然だよ」

その言葉は穏やかで、流暢で、されど重い。

「ジんくんの料理に対する想いが予想以上に重かった」

ついココアも上手いこと言っちゃうぐらい重かった。

「ココアさん。ココアさんが喋ると残念な感じになっちゃうので控え
てください」

「発言権の剥奪!? ひどい!」

「まずは強力粉とドライイーストを混ぜるんだよね?」

「ジんさんは勝手に進めないでください」

「料理の胆は手際の速さ。故に僕は手際の速さにおいても頂点を目指
す」

「おい! 軍隊において協調性を欠くことは許されないぞ!」

「軍隊? それカツコイイね!」

「お! わかるかココア。では返事の後に『サー』を付けろ!」

「わかったであります、サー!」

「えーと、さー?」

「女性の場合は『ママ』でしょ」

「何か言ったかジん二等兵!」

「誰が二等兵だ。僕は常に頂点を目指す一等兵だよ」

「ジんさん。一等兵は頂点じゃないんじや……」

「そうだぞー、因みにその上には上等兵、兵長がいるんだぞー知らな
かったのかって……怖っ! 目怖っ!」

「ジん一等兵がどうしたでありますか隊長!」

「さー!」

「……」

「こ、ココアさん! これ以上ジんさんを挑発しないでください!」

「挑発?」

「さー!」

「……それじゃパン作り、始めるか」

「いえす、さー！」

「千夜さん。もう『サー』は良いですから」

深刻なツツコミ不足を抱えながらもパン作り小隊の行軍は始まる。

そこからココアの指導の下、生地作りを小麦粉から作っていく。

「パンをこねるのつてすごく体力がいるんですね」

「腕が、もう動かないい〜」

思いのほか重労働な生地作りに悪戦苦闘するチノと千夜。

チノはふとりゼに目を向ける。

「リゼさんは平気ですよね」

「な、なぜ決めつけた？」

あまり男勝り扱いされたくないリゼはチノの言葉に動揺する。

「ジンさんは……言うまでもなさそうですね」

「頂点を目指す僕にとって、この程度は準備運動だよ」

「そりや暇さえあればやたら太い木刀？ で素振りしているからな」

相変わらず息も切らさず黙々と生地を捏ね続けるジンにリゼは呆

れつつも負けじと自身も奮起する。

そういうところが男勝り扱いされる所以であるのだが、本人は気付いていなかった。

「一時間寝かせまーすっ」

全員の生地をこねる作業が終わり、あとは発酵を待つだけだ。

「それじゃあ、発酵が終わるまでゆっくり待とうか」

そう言っつてジンは丸椅子に置かれた新聞紙に手を伸ばす。

h f g h j k l , m n b v c x d d x s 7 8 g 5 8 n l o i j ○ 月 △
日 j k o 5 6 h b 7 k v v j h b t 5 d 6 l 9 c d g
6 9 j g f n 9 7 g d r g k 立ち入り禁止区域 X の神隠し j o k f
8 7 5 4 g n b c x a 3 k 9 f
h f s k m c t p h v v c d 少女が謎の失踪?! l k l l u b l f c
d s x c c v k j v d d
k h d x d s a d c f r j x z a d g y k 搜索難航。明日には打ち
切りか l g f k h v x z c n m , t f x s e f r d

「.....っ!」

文字羅列の濁流。それが切り抜きのように浮かび上がる。
脳を直接締め上げるような痛み、肉体と意識の乖離と共に強くな
る。

視界が暗闇に侵食され、文字が浮き彫りになっていく。

意識が、感情が、理性が、

深い深い闇に落ちていく

.....

「どうしたのジン君?」

ココアの声で我に返るジン。

「いえ、お構いなく。なんでもありません」

未だに激しく響く頭痛を噛み締めつつ、表情にはおくびにも出さない仏頂面で答える。

彼の言葉に安心するココア。

「ですが、ゆっくり待つことはできなさそうです」

初二段変身×2 3

バイクを駆り、街を走るジン。

間もなくインカムが内蔵された彼のヘルメットに、オペレーター担当の父の部下から無線通信が入る。

『ワームです。場所は……』

「始まりの場所……今は立ち入り禁止区域^{エリア}Xって呼ばれてる場所、だよな？」

立ち入り禁止区域Xとは木組みの家と石畳の街の郊外、北西部にある。

自然が豊かで、かつてはピクニックやキャンプができる自然公園でもあった場所。

現在は七年前の大地震で多数の死者が出た事と、その地震による地形変化によって露出した隕石から放射能が溢れている等の事情で自然公園は閉鎖され、立ち入り禁止区域となっている。

あくまで表向きはそうなっている。

『例の坊ちゃん能力ですね』

「まあね。だからもうそこに向かっている途中。詳しい位置情報を」

ジンの能力。それは簡単に説明すると『限定的な未来視』だ。

自身が何故そのような特殊能力を持っているのか、そんなことは彼自身にもわからない。

ただ、理由があるとするなら彼の瞳に流れるタキオン粒子にあるのでは、

と医療班のリーダーは仮説を立てていた。

まずマスクドライダーシステムは装着者の全身にタキオン粒子を駆け巡らせることで、

自在に時間流を行動する能力を持たせる。これがクロックアップだ。

これによって同じクロックアップ能力を持つワームと初めて対等に戦闘ができるようになる。

そもそもクロックアップ状態の存在を視認するにはタキオン粒子

が流れる眼を持たなければならぬ。

ジンはこの眼に流れるタキオン粒子が変身解除後も残留しやすい体質だった。

それが原因なのかはわからないが、ジンは特に気にしてなかった。未来視と言っても一時の猶予もない直近のタイミングであり、しかも断片的かつ未来に見る可能性のある景色だけ。

つまり頼りはジンの視覚情報のみで、詳細な情報や遠い場所の出来事はわからない。

『身内の惨殺死体』や『残酷な事件の書かれた新聞の見出し』などが電波の悪いテレビ放送のように見えるだけ。

それに未来が見えたところでそれを必ず変えられるわけではない。未来視には頼れない。それは三か月前のワーム襲来で身に染み込ませた。ラビットハウスを一週間休んだのは、前々から開発を進めていたワームを感知する装置をエリアXや街の各所に設置するのを手伝うためだった。

『ワームを感知したのはエリアX―8。ワームはそこから南東に移動。山の麓近くのX―14で一般人と接触したようです。現在はそこからエリアX―20に移動しています』

エリアは地域全体図を縦×5横×5の格子状に切って左上をX―1、右下をX―25として上から下に、方角でいうなら北西の位置から南東へ数字を振り分け区切ったものだ。

位置関係的に一概には言えないが、ざっくり言うなら数字が大きくなるほどに居住区に近くなる。

「エリアXは私有地にしていて、周辺には目立たないように警備が常駐していたはずだったよね？」

エリアごとの地形や環境、ワームの個体差によるが、エリア近くでも一般人が接触する可能性があるのは大体X―25かそうでなくても外枠辺り。

エリアX―14は立ち入り禁止区域内部で居住区からも離れていない。

「すみません。どうやら子どもが警備の目を盗んで侵入していたらしい。

く……自分達の落ち度です」

ジンの口からつい溜息が漏れる。

わざわざ危険地域と銘打たれた場所に自分から入り込むとは、傍迷惑な冒険心を持つ人もいたものだ。

「いや、責めているわけではないよ。そういう事の追求は僕がすることでは無いし、

みんながいつも頑張っているのは知ってる」

『いえ、そんな……そうおっしゃっていただけると有り難いです、坊ちゃん』

オペレーターは謙虚な態度で礼を言う。

ジンは正直無線で坊ちゃん呼びはこそばゆいな、と感じつつ素直に礼を受ける。

「起きたことはしようがないよ。過去は変えられない、今は今だ。現状は？」

『一般人の避難を優先しつつ、常駐隊員が戦闘中です。衛生兵も含めた実働部隊も向かっています』

「……っ！ こちらも現場に急行する」

(常駐隊員の装備じゃワームには効かない。急がないと)

人目が無い郊外へ出たところで腰のベルトに挿していたサソードヤイバーを片手で抜き、正面に構える。

【Stand by】

召喚されたサソードゼクターがジンのヘルメットの上にジョウント(ゼクターが持つ、時空を寸断して行う特殊移動)して、器用に着地。そこから跳んでヤイバーと合体した。

「変身」

【HENSHIN】

マスクドライダーシステムを装着。

「キャストオフ」

【Cast off】

【Change Scorpion】

重厚な鎧を飛ばし、スマートな姿に変わる。

すぐさまヤイバーを左大腿部にあるホルダーに挿し、バイク速度メーター下にあるパッド画面を操作。

特定の操作で現れる暗証番号入力画面に4桁番号を入力。

画面に映る『Camouflage-release』の文字。

「擬態機能・解除」

ジンのバイク……マシンゼクトロンはその真の姿を解放した。

フロントカウルから白兵戦用の武器になる牙が展開。

複眼のように三つのライトが対になっているヘッドライトと相まって、それは昆虫の顎に見えた。

さらにフード部には蠍を模したパープルカラーの紋章が浮かび上がり、その中央には『ZECT』の字が綴られていた。

その『ZECT』の文字は車体の側面や背部コンテナにも施されている。

前身である組織の名残だ。

そして変化したのは外見だけにあらず、この擬態装置は一般的なバイクとは次元違いのゼクトロンのマシン性能を隠すためのものでもある。

マシンゼクトロン。その最高速度、時速400km。

比較例として、オートバイの高速道路での法定速度は時速100km。

市販されているオートバイの、スピードメーターに記載されている

最高速度は時速180km。

因みに新幹線の最高速度は時速300km前後。

全長僅か2070mmのマシンゼクトロンのスピードは、新幹線を置き去りにする。

そして、このスピードはクロックアップを使用していない場合の速度である。

「クロックアップ」

サソードはベルト腰部のスライド式のトレーススイッチを、着物の帯を締めるような動作で作動させる。

【Clock up】

クロックアップが発動し、世界が止まる。

否、彼が世界を置き去りにした。

途中ですれ違う歩行者も、追いついた自動車も、何者も彼を認識することはできない。

彼は時間を抜き去り、我が道を往く。

※

「急いでどこ行っちゃったんだろジンくん」

「……………」

「リゼちゃん？」

リゼは自分が席を外している間に、急に「予定ができた」と言っ
てラビットハウスを飛び出したジンのことを考えていた。

また例の仕事の手伝いなのだろうか、どうして姉の自分に何も言わ
ずに行ってしまうのか……………疑念と疎外感が彼女を苛む。

『「ちゃんと一時間以内に帰るよ（キリッ）』って言ってたわよ？」

「え？ あ、うん」

場を和ませようと、あえて冗談めかしにフォローしようとする千夜
の声もどこ吹く風。

反応が遅れて急いで生返事を返す。

千夜は続けて何かを言おうと口を開き、何も言えずに閉じた。

リゼのあまりの落ち込みようから、彼女の抱えているものが言葉で
払拭できるものではないと悟ってしまったのだろう。

ココアも何気ない話題のつもりで振った手前、予想外に陰鬱として
きた空気をどう変えたものか判断を戸惑っている。

さつきまでの和気藹々わきあいあいな雰囲気あひが嘘のように静かになってしまっ
ていた。

（ジンが自由奔放なのはいつものことだ。それをいちいち心配しても

みんなを不安にさせるだけ。

寧ろ変に気にしている私が普通じゃない)

リゼも自身の不自然な情動に自覚はあった。

だが感情の問題は、理性では拭えない。

(でも何故だろう。そう頭では分かっているはずなのに、妙な引つかりを感じる)

自他共に原因が何であるかわかってなければ尚更に。

(何なんだ……この慢性的な偏頭痛に似た苦痛と、

心許ない蠟燭の火一つを頼りに暗闇を歩くような寒気は……)

突如、脳裏に例の虫の様な怪物とそれを倒した騎士の姿が浮かんだ。

思い出す恐怖と安堵、相反する感情。

脈絡を感じない想起にリゼ自身、動揺する。

(何故あの夢? のことを思い出すんだ? あれは白昼夢というには

現実味があり過ぎたが、だからといってジンとは一切関係が)

瞬間、頭によぎる。

「リゼ、——よ! はや——つれて——まで逃げ——っ!」

「——だめよ。あなたが——。お姉——ん——だから、
ね?」

(なん．．．．だ？　これは、昔の記憶？　いつの記憶だ？　私にはこんな記憶、覚えは無い、はずだ。覚えは．．．．)

映像も音もノイズが激し過ぎて、一体どういう状況なのか読み取れない。

まるで開けてはいけない箱に誤って腕をぶつけて蓋がズレ、急いで閉めたがその時に中身がチラリと見えてしまったかのような。

はつきりと見てはいないけど、見てはいけないということだけは本能的にわかってしまったかのような。

そんな形を持たない危機感がリゼの心中を支配する。

ただ、辛うじて聞き取れた声から火より優しく、布より確かな、触れていると表面からではなく体の奥の奥から温もりが広がっていく感覚を．．．．そんな不思議な温かさを感じた。

同時に自分は何か大切な事を忘れてしまっているのではないかという不安と焦燥が沸き上がった。

しかし無理に思い出そうとする度に、酷い頭痛がリゼを襲った。

「リゼちゃんっ」

「うわっ、何だココアか」

急なココアの声で現実に取り戻された。

さつきまでの頭痛が消え、朧気な記憶も霧散する。

「大丈夫？　何回も呼んだのに全然気付かないから、リゼちゃんまで立ちくらみを起こしたかと思ったよ」

「え？　立ちくらみ？　ジンのことか？」

またしても自身の失言でリゼに余計な心配事させてしまったかと思顔を強張らせるココアだが、それも一瞬だけですぐに何でもないことのように能天気な笑みを作る。

「本人がなんでもないって言ってたし、すぐに顔色も治っていたからそれほど体調が悪いわけじゃないと思うよ？」

それにほら、ジン君って熱中したら周りが見えなくなるタイプっほいし、それで疲れが溜まってたんじゃないかなあ」

「そうか．．．．そうだなっ」

ココアの言い分に心当たりがあるリゼは一先ず妥協して納得する。
(そうだ大丈夫だ。ジンは大丈夫。大丈夫大丈夫……)
リゼは自分に必死に言い聞かせている事に無自覚のまま、気を紛らわせるため近くに置いてあった新聞紙を手取る。
やけにアダルティックなハーブティー専門店のバイト募集の広告が目立つ以外は、何の変哲もない街の新聞社が発行しているローカル新聞だった。

※

薄暗い森を少女の手を引き、若い男が走っている。

二人の目に映るは恐怖と焦燥。

男は少女を狙う怪物から少女を連れて逃げていた。

彼らを逃がすため5人の同僚が足止めをしようとした。

男は同僚たちの中で一番歳が若かった。

同僚たちは要救助者の少女を含めた、二人の未来ある若者を守ろうとした。

だが怪物は同僚らの放った銃撃を物ともせず、得意の高速移動で蹴散らしてしまった。

厳しい訓練を共に耐え、切磋琢磨し、同じ釜の飯を食った仲間が有象無象の塵芥のごとく吹き飛ばされる。

一度も組手で勝ったことのない先輩達が、赤子の手をひねるよりも容易く地面に叩きつけられた。

ただバケモノの凶悪さ残酷性を表現するための舞台装置ようにあつさりと。

「チクショウ」と、男が何度口の中で反芻したことか彼自身わからない。

悔しかった、仲間を見殺しにするしかない無力さが。

恐ろしかった、あつさりと人間を殺傷する怪物が。

怪物はその気になれば彼らを一瞬のうちに、簡単に捕まえられる。だがそうしない。何故か？

(野郎……人間おれたちで遊んでやがるっ！)

怪物は狩りを楽しんでいた。

中世の貴族が狐狩りを愉しむように悠々と、残酷に。

自分より弱い獲物を弄ぶことに快楽を覚えていた。

逃げるしかない獲物が無駄に足掻くさまを観察していた。

「危な——いづっ!？」

「きゃっ!？」

そして唐突に飛び掛かり爪で切りつける。

致命傷にならない程度に、されど痛みと恐怖で徐々に絶望していくように。

咄嗟に少女の手を引いて庇ったことで、足を切りつけられた男は地面に倒れる。

少女は自分を庇って傷ついた男に駆け寄った。

「ごめんなさいっ……ごめんなさいっ……わたしのせいで……」

少女はボロボロと大粒の涙を流して泣いていた。

男の足を止血しようと、持っていたハンカチで必死に押さえながら泣いていた。

そのハンカチで自分の涙を拭かず、赤の他人の男の傷を押さえ続けた。

薄ピンクの可愛らしいハンカチは、男の真っ赤な血でビチャビチャになってしまっていた。

折角の可愛いハンカチが台無しだ、と場違いなことを思いながら男は何とか上体を起こす。

「傷は深くない、大丈夫さ。そんなことよりひどい顔じゃないか」

男は自身の恐怖と痛みを抑えて笑顔を作り、血で濡れた少女のハンカチの代わりに自分のハンカチを渡す。

飾り気のないうえ皺が寄っている、男自身の性格を反映したかのような無骨なハンカチ。

少女の如何にも年頃の女の子が持っていていそうなハンカチとは比べべくもないが、こちらに男の血が付いていなかったのは僥倖だった。男は少女が涙を拭いている間に自身のネクタイを外し、負傷した足を心臓に近い部分で強く縛る。

そして懐からペンとライターが合体したような携帯用小型銃・ゼクトガンを取り出す。

見渡すと近くに金属コンテナ型のゴミ捨て場……自然公園であった面影を匂わせる人工物を発見した。

それを見て何か思いついた男は息を大きく吸って、吐き、覚悟を決めた。

「嬢ちゃん。落ち着いて聞いてくれ」

「え？ は、はい！」

急に話しかけられたことで少女が動揺して声の上擦る。

元々押しに弱い大人しい子なのだろうか、男は想像しつつ自分の考えを伝えた。

「あいつは俺が足止めする。その間このコンテナに入って内側から蓋を占めてくれ」

「そ、そんなー！ 隠れるなら一緒に！」

少女は話を聞き、そんな自己犠牲を前提にした考えに反論する。

男はそんな少女の優しさを噛み締めながらも首を横に振る。

「いや駄目だ。あいつは遠くから常に俺たちを監視している。二手に分かれても無駄だろう」

怪物はその気になれば一瞬で二人とも仕留められる。

「だけど君だけを助けるのなら可能……かもしれない」

奴は遊んでいる。獲物が自分から逃げ切れるはずがないと高をくくっているからだ。

逆に遊んでいるうちはすぐに息の根を止めようなことはしない、とも言える。

だからこれは賭けだ。

少女が近くにいて、男が怪物の遊び相手をしている間は少女に手を出さないかもしれないという賭け。

ただの時間稼ぎだ。

だが時間は彼らの味方だ。

何故なら、もうすぐ正義の味方が来てくれるから。

「それじゃ、あなたが……」

少女は男の意見に反対するが、気配を悟った男が少女を抱き上げ無理矢理金属の箱に入れる。

男は少女の否定の声を無視して蓋を閉め、振り返る。

そこに怪物はいた。

「来い、ワーム！ 俺が相手だ！」

怪物の姿を男は初めて正面から見た。

まるで髑髏顔の悪魔の全身に、バラバラに分解したタランチュラの部品をくつつけたような醜悪な怪人。

肩からは非対称な蜘蛛の足が生え、体の節目を白い体毛が覆っている。

見ているだけで怖気が走り、足が竦みそうになる。

男は腰が抜けるのを気合で耐え、怪物を睨みつけた。

怪物が飛び掛かるその瞬間。男には、その動きがやけにゆっくりに見えた。

（あ……俺、死ぬわ）

それが走馬灯だと男は無意識に理解した。

男の脳裏に記憶が駆け巡る。

職人気質で厳格だった父親、逆に温和で優しくかった母親。

運動神経しか取り柄のない自分とは違う優秀な弟と、その弟と遊んだ幼少の記憶。

実家の寿司屋の跡取りを弟に押し付け、逃げた記憶。

その時チラリと見えた、今まで見たことがなかった哀しそうな父の顔。

何故か最後に思い出したのは、坊ちゃん自身がポケットマネーで丸ごと買った本マグロを、鯖包丁とかいうほぼ刀剣で捌いて部下に振る舞ってくれた時の記憶だった。

何故その時の記憶が家族の記憶と共に浮かんだのか疑問に覚え、思い出した。

みんながマグロ料理を食べる中それを見つめるだけの坊ちゃんに自分も食べないのか、と男は聞いた。

(その時坊ちゃんが言った『振るまう側が品に手を付けるわけにはいかない』って言葉)

小さい頃に彼が店で使うネタを盗み食いした際、父親が鬼の形相で叱った後に、

母になだめられながら言った言葉に似ていたのだ。

(坊ちゃんの怪訝な顔というかムスツとした表情が親父に似ていて、ちよつと笑いそうになって、ちよつと泣きそうになって……)

その節は先輩達にも心配をかけてしまったと、今更ながら申し訳なかった。

(なあ、坊ちゃん。こんな不甲斐ない親不孝な俺でも、女の子を命を懸けて守ればヒーローになれるかな?)

何かに変わったかった。でも変われなかった。

男はそれでも諦めきれなかった憧れに焦がれながら、目を閉じた。

「残念だけど貴方はヒーローにはなれない。そんな未来は、ひげき僕が奪うからだ」

どこからか、そんな声が聞こえた気がした。

だが、激しくも気品のあるエンジン音はその疑問を切り裂いた。
一台のオンロードバイクが男と怪物の間に躍り出る。
片手に刀剣を握りしめた騎士が、バイクの跳躍と同時に怪物を一
閃。

怪物は飛び掛かった方向と逆方向に吹き飛ばされる。

騎士は着地後にカーブしながらバイクを止めると、無駄のない優雅な動きで地に降りる。

「ワーム。お前の未来は、僕が奪う」

刀剣を怪物に構え、騎士は宣言する。

お前に何も奪わせない。

お前から総てを奪い返す。

男は死の恐怖で腰が抜けながら、箱の中の少女にただ一言だけ伝えた。

仮面ライダーが来てくれた、と

初二段変身×2 4

エリアX：X―20：南西地点。

舗装された地面の影響か単純な植生や地質の関係か、木々に囲まれた中そこだけ開けた広場になっている場所。サソードとワームの両者は睨み合う。

それを見守るのは常駐隊員の男と一般人の少女。

本来なら一般人の少女にワームやライダーに関する現場を見られるのは避けるべきだが、男は場の剣呑な雰囲気には飲まれ忘れていた。サソードは言わずもがな。敵を前にして、そんなことに気を向けている余裕はない。

ジリ、と地面を踏む音が聞こえるほどの静寂。

木々の葉を擦らせるそよ風が、騒がしく感じる沈黙。

フィクシオンにおいて、このような一騎打ちの状況でよく言われるジンクスがある。

先に動いた方が負ける、というものだ。

まさしくそれが当てはまる状況。

人の生死に関わるという現実やワーム関連の事情という前提を抜きにして、ラビットハウスのメンバーがこの状況を見ればどういう反応をするだろうか？

ココアなら興奮しそうだ。

千夜なら燃えそうだ。

チノなら緊張するだろうし、リゼなら武者震いをするだろう。

ジンにしてみれば「それが何？」だが。

先手必勝。見敵必殺。正面突破。

彼の戦いはそれが総てだ。

猪武者も良いところだが「猪なんて豚の親戚みたいなものでしょ？」と甘く見ていると怪我ではすまない。

突進力は成人男性を跳ね飛ばし、訓練された猟犬に縫合が要る傷を負わせる。

牙は作業服程度の布切れは容易に切り裂き、人間の大腿動脈を切つ

て失血死させる。

故に先に踏み込んだのはサソードだった。

成人男性を吹き飛ばし、それだけで殺傷しかねない突進力で踏み込む。
む。

鉄を容易に断ち、人間を文字通り二つに裂ける牙の切っ先は敵の喉を狙っていた。

しかしてサソードの足は止まる。

ワームが見るからに接近戦仕様のサソードを見て、露骨に距離をとったからだ。

今まで戦ってきた感情的で凶暴なだけのワームや強者に対して逃げの一手のワームとは違う。

生き残ってきたタイプのワームではない。

勝ち残ってきたタイプのワームだ。

(蟲毒の壺………)

ジンは無意識にその言葉が頭に浮かんだ。

理由はエリアXの事件、その真実にあった。

あの事件の真実。

突発的に起きた地震による衝撃で隕石から目覚めた大量のワームが自然公園にいた人々を襲った。

ワームは隕石に乗って星を渡る地球外生命体。

およそ半世紀前に東京・渋谷に落ちて地球を訪れたワームは秘密結社『ZECT』によつて、それから十数年で全滅したものと思われていた。

だが、その生き残りがいたのだ。

大勢の人がいると真ん中で孵化したワームは、その場にいた老若男女問わずたぐさんの人間を殺害した。

しかし突如、正体不明の時空の裂け目が生まれ、それに飲み込まれて総てのワームは時空の彼方へ追放された。

………荒唐無稽な話だが、それが事実だから仕方がない。

何より、ジン自身が当事者としてそこにいた。

(だから僕は笑えない……違うな。天々座刃は笑えなくなつたが正しい)

だがその事件自体は過去のもの。今は戦闘中だ。深く考えないようにした。

ただし過去の事件であつたとしても、それでめでたしめでたし……となつてないから現状だ。

あろうことか奴らは時空の彼方で成長し、時空の壁を喰い破つてきた。

時空の彼方に奴らが餌とする人間はいないはずだ……なのに何故？

餌が無ければワームはサナギ体から成虫体になれないはずだ……なのに何故？

……ところでこんな話を知っているだろうか。

外界と区切られた環境においてカメラ蠟螂は他に獲物のいない時、自分より弱小さい同胞を喰うらしい。

「くっ………！」

ジンらしくなく、相手の出方を待っていたところにワームの攻撃が迫る。

それは二対の槍だった。

二本の蜘蛛の足だった。

タランチュラの遺伝子情報をコピー模写したワームの、肩から生える足を異常な速度で伸ばすことによる攻撃。

矢の速度で突き出される槍。

機関銃の連射性能を持つ腕。

その表現が過言ではない脅威がサソードを襲う。

だが、サソードも負けてはいない。

連続で突き出される蜘蛛の足を剣で捌く。

全てではなく、あくまで致命打になるものだけを選んで斬り払う。

装甲の表面を掠るだけもの、ミスを誘うフェイントを見抜いて無視する。

捌きながらも観察し、パターンを見つけていく。
そして実力と執念で距離を詰めていく。

機関銃を乱射している相手に、刀剣で銃弾を弾きながら近づくような出鱈目な所業。

並の人間なら背筋が凍る。

実際、観戦していた常駐隊員の男は「敵でなくて味方で良かった」と生唾を飲み、畏ろしさと頼もしさを感じた。

お互いに攻めきれない状況が続く、実質的な膠着状態。

その流れを変えたのは、またしてもワーム側だった。

ワームの口吻が蠢いたかと思うと、そこからロープのように編み込まれた蜘蛛の糸が放出されたのだ。

吐いた糸がサソードの刀身に絡みつく。

「……………」

サソードが引き千切ろうと力を籠めるがびくともしない。

実在する蜘蛛の糸でさえ同じ太さの鋼鉄の4〜5倍の強靱さと、ナイロンを超える伸縮性を併せ持つ。

なれば蜘蛛の性質をコピーしたワーム、その体内で生成された糸の強度は計り知れない。

ワームはサソードが蜘蛛の糸を切れない事を察すると、右へ左へ揺さぶりながら糸を振り回す。

その動きに引っ張られ、サソードが地面を転がる。

サソードがその名の通り剣を主体に戦う戦士と理解したうえで、ワームはその剣を奪おうと全力で糸を引く。

「!!」

とうとう剣がサソードの手を離れてしまう。

ワームは嘲笑に似た鳴き声を上げ、自身の優勢を確信する。

剣は放物線を描き、空高く飛んでいく。

サソードの手が届かない速さで、ワームの頭の上を跨いで後方に落ちていく。

口吻から糸を伸ばし、そのまま引つ張っていたワームは自然とその軌道を目で追う。

綱引きで勝った直後の気の緩みがあった。

早く動くものに一瞬気を取られてしまう動物の本能もあった。

慢心があった。

必然があった。

意図があった。

【Clock up】

だから、剣から手を離れたサソードが流れるような動作でクロックアップを発動したのを見逃した。

クロックアップは高速移動。一瞬でも対応が遅ければ十分。

さらに言うなら相手は一本釣りを成功させた漁師気分。腹が良い感じにガラ空きだった。

「てイー！」

そこに迷いなく、真っ直ぐに、一息で距離を詰めたサソードの中段蹴りが突き刺さる。

「——ッ!？」

ワームは不意打ちを受けて大きく仰け反る。

無様に倒れなかったのはワームながら天晴だが、逆に倒れなかったことでさらなる追撃を食らう。

顔面パンチだった。

それも一発二発に留まらない『お前のターンねえから』と言わんばかりの左右の連撃。

さらに反射的に顔を守ればボディブロー、拳を警戒すれば足を蹴って体制を崩す隙の無さ。

ワームがたまらず反撃の爪を振るう。

だがそんな破れかぶれのテレフォンパンチは、頭の側面で構えた腕に防がれる。

そこからサソードは防御から一転攻勢。振るってきた腕を上半身

ごと絡め捕り、ワームが前のめりになったところで顔面に膝蹴りを食らわす容赦のないカウンターを叩き込む。

それはCQCだった。

天々座家は秘密裏にワームを倒している傍ら、と言うより本業で民間警備会社を営んでいる。

そんな家に生まれた天々座家の長女であるリゼは父への憧れもあつてCQCを使える。

だとすればジンが使えてもおかしくはないだろう。

むしろジンは七年前からずっとワームと戦うために本格的な戦闘訓練を受けてきた。

体格差による戦闘力を引いた、純粋な技の熟練度も天才肌のリゼより高い。

兎も角、劣勢と思わせた逆転の連打は見事に決まった。

しかしそれも長くは続かない。

予想外の反撃を食らった混乱から覚めたワームは素早く距離をとる。

またしても槍の掃射が開始される。

……ただし、これはワームにとって致命的な判断ミスだった。

ワームには幾つかの見落としがあつた。

一つ、クロックアップはまだ終わってはいない。前述のCQCによる連打は、剣が飛ばされ地面に落ちていくまでの数秒間の出来事である。

二つ、クロックアップは高速移動であり時間停止ではない。クロックアップ中も時間はゆっくりとだが進む。

三つ、一連の攻防でソードとワームの立ち位置は逆になっている。さて、剣はどっちへ飛んでいったでしょう？

風に舞う木の葉が宙に浮き、掻き分けられた雑草が掻き分けられたまま静止する世界。

それは逆に木の葉のように空から舞い落ちてきた。

浮いた木の葉を押し分け、掻き分けられた雑草の道を作ってソード

ドはそれを掴む。

勝機、という名の剣を^{それ}。

「ライダースラッシュ」

【Rider Slash】

振り向き様にライダースラッシュを発動。

猛毒の光子の奔流が、絡みつく蜘蛛の糸を溶かし弾き飛ばす。

サソードが得物の取り戻したことに気付いたワームが再度、蜘蛛の足を伸ばす攻撃を始めるが遅い。

ワームが見落としていたこと四つ目、サソードは最初の攻撃を捌いていた時点で動きを観察していた。そして既にパターンの解析は終わっていた。

パターンが読める攻撃は、攻撃する前に対処ができる。

どこにくるかわかる攻撃ほど、対処しやすいものはない。

プロ野球レベルの時速140 kmの剛速球も、投げる場所がわかるピッチングマシーンが投手では素人でもホームランが打てるように。だから遅すぎた。

ワームは最初の掃射の時点で勝負を決めておかねばならなかった。

逆に蜘蛛の糸を先に使えば勝機はあった。

何にしても後の祭り。過去は過去。過去は変えられない。

ワームは最早勝負が決していることにも気付かず、蜘蛛の足を射ち放った。

矢の速さを持つ槍が風を切り、サソードの右肩を穿たんと伸びる。

サソードの必殺剣が煌いた。

一本目の蜘蛛の足が節目で切られ、宙を飛ぶ。

ワームはすかさず二本目を放つ。

サソードが手首を回して剣を返す。

飛ぶ斬撃が二本目の蜘蛛の足を根元から断ち切る。

焦ったワームが蜘蛛の糸で剣を封じようとする。

顔面パンチ。

糸はあらぬ方へ飛び、ワームの体も吹き飛ばす。
ワームのクロックアップは吹き飛ばされた衝撃で解けた。
必然的にサソードの時間流から置き去りにされ、その動きは緩慢になる。

【Rider Slash】

サソードはもう一度、猛毒の光子を生成する。

連続で行われた必殺技発動の影響か、光子に成り切れなかった猛毒がドロリと刃先から流れ落ちる。

彼は剣の露を払う所作で余分な猛毒を落とし、腰を落とした中段、居合に似た構えをとった。

「ライダースラッシュ」

放つはワームへ手向ける、神速の居合斬り。

【Clock over】

両者のクロックアップが解除されたことで、戦いを見ていた男と少女の目によくやく両者の姿が映る。

ワームの体は十字に斬られ、爆散した。

サソードの剣には、まるで血糊のように猛毒が滴っていた。

※

晴天の真昼でありながら森によって光が閉ざされた獣道。

舗装されておらず、道とも言えない道。

しかもただでさえ暗い中、成人男性の腰の高さまで生えわたる雑草や古い蜘蛛の巣の所為で視界は遮られている。

だがそんな足元すら碌に見えない暗がり、息を切らしてなお走り続ける小柄な少女がいた。

口元に光る八重歯がチャームポイントのハツラツな性格の少女だった。

しかし今、その面影はない。

菌は恐怖でガチガチと音を鳴らし、瞳孔が開いた眼は辺りを見渡してギョロギョロと動いている。

その姿は天敵から逃げ惑う小動物の生々しい姿を思わせた。

「ひゃっ!？」

だが足元をまともに見ていなかったため、地面に浮き出た木の根に足をとられて転倒する。

ぬかるんだ地面で濃紺の洋服は泥に濡れ、固い根で膝を擦り剥いてしまう。

泥は顔にまで飛び跳ねているらしく、口の中でジャリジャリとした嫌な音が鳴る。

小柄な少女は倒れたまま立ち上がれない。

体力はまだ少しあった。

しかし心が立ち上がらなかった。

(私が冒険に行こうって、誘ったせいで……)

小柄な少女は同い年の友人を誘ってこの立ち入り禁止の森に来ていた。

友人は小柄な少女の親友だった。

キツカケはこの森近くを通った際、森を囲うフェンスに少女たちならギリギリ通れそうな小さな穴を発見したことだった。

ほんの少し、冒険心と好奇心が掻き立てられた。

通称・立ち入り禁止区域^{エリア}X。大層な名前と呼ばれている場所には様々な噂があった。

曰く、今は閉鎖された自然公園にはかつて秘密の研究所があった。

曰く、森の中に謎の生物の影が目撃されることがある。

曰く、この街には半世紀前に東京で有名だった都市伝説『仮面ライダー』がいてその秘密基地がある。

など如何にも子どもが好きそうな眉唾物の噂ばかりだが、学校ではちよっとしたブームになっていた。

小柄な少女は口より手が出る、口であれこれ言うより行動に起こすタイプだったので噂の真贋は実際にその目で確かめたかった。

……まさか噂の一つが最悪の意味で事実だったとは思いませんでした。

親友とは怪物から逃げている途中ではぐれてしまった。

(ごめんね……ごめんね……)

小柄な少女は心の中でずっと親友に謝っていた。

自分が誘わなければこんなことにはならなかった、と。

親友は最後まで小柄な少女を止めようと、すぐ引き返そうと言っていた。

自分だけが逃げ切れて代わりに彼女の方が捕まってしまったのではないのか、と。

親友は少しどんくさいところがあるが大人しく穏やかな子だった。

こんなことなら一緒に逃げていれば良かった。

後悔と罪悪感が胸中に渦巻き、小柄な少女の気力を奪う。

それでもまだ親友は無事だと自身に言い聞かせ、何とか振り絞った力でゆっくりと立ち上がる。

親友のために助けを呼んでくること。

それだけが小柄な少女の希望だった。

「いつ……?!」

草木を分ける物音が聞こえ、肌が恐怖で粟立つ。

咄嗟に木の陰に身を潜める。

息を殺す。

やたら心臓の音が煩く聞こえる。

この心音が聞かれていたらどうしようかという突拍子のない考えで泣きそうになるが、しゃくりあげそうになった声を口を塞いで無理矢理抑え込む。

耳を澄まして、音の主がどこにいるか探る。

目で見える勇氣はなかった。目が合う瞬間を想像してしまつたら下手に顔を出すこともできない。

「マヤあ〜！ どこにいるの〜！ 助けが来てくれたからもう大丈夫だよ〜！」

聞こえたのは親友の声だった。

最初はパニックによる幻聴かと思ったが、頬をつねって違うらしいと確認する。

もう一度聴き耳を立てるが、間違いないと判断できた。

伊達に付き合いは長くない。

独特の緩い話口調は間違いなく親友だと確信できた。

何だかわからないが、もしかしたら噂の『仮面ライダー』が助けに来てくれたのか？ という期待が胸に浮かぶ。

だとしたら不幸中の幸い。いや、親友も無事ならお釣りがくる。

そう思つて木の陰から出た。

そうして木の陰から出た直後、小柄な少女の頭に一つの疑問が浮かんだ。

と
そういえば今まで彼女に呼び捨てにされたことはなかったな？

※

「え？ 嬢ちゃん以外にももう一人？」

男は 奈津恵と自己紹介をした少女に聞き返した。

「は、はい。たぶんまだ森の中に……」

奈津恵……メグと友人から呼ばれる少女は人見知りを発症させ、時折詰まりながらも言葉を紡ぐ。

「そりや大変だ。ワーあああの怪物がいなくても、遭難したり怪我したりしてたらヤバイな……ん？ どうしたぼっちゃああサソ」

「ドお？」

男は機密保持や何やら色々もうダメダメになりながらも、ゼクトロンの無線で実働部隊と会話するサソードに声をかけた。

しかしサソードは男の言葉に応えず、無線が切れるのも待たずにバイクに跨る。

「とりあえずここに実働部隊は呼んだ。あとよろしく」

言うが早いかそのまま森の奥へ向かって走り去ってしまう。

遅れて男の持つ無線機にも連絡が入る。

ワームは二体だった模様。

一体はサソードの戦闘中、隣接しているX-15に移動した。

「え？」

男は呆けて声が漏れた。

横で聞いていたメグは声も出さず、顔から血の気が消え失せた。

初二段変身×2 5

もう一匹のワームを追い、森の深淵へ飛び込むサソード。擬態装置を解除した際に操作したパネルを再度操作。

画面に『Hovermoed|active』の文字。

「^{ホーバー}浮揚移動形態・起動」

ゼクトロンの前後の車輪がファンデルワールスカ（分子結合・分離の理論の一つ）に基づいて二分割される。

四つに分割された車輪は、内側から内蔵されたイオンエンジンを四方向に噴出して機体を地面から浮遊させる。

同時に背部コンテナも展開・変形を開始。従来は偵察用昆虫型ロケットが搭載されていた場所に改造によって取り付けられた浮遊した機体を時速250kmで前進させる強力なイオンエンジンが火を灯す。

バイクの車輪がとられる凸凹な地面が多いエリアXを探索するために開発・実装された変^{モード}身^{チェンジ}が実戦で花開く。

正体を隠し平穏を守る擬態装置。道なき道を踏破し敵を追う浮揚移動形態。

この街で戦うライダーのために生み出された二段変身。

もたらした存在がいなくなったがために失われていた技術を、経費も技術者の数も限られた悪条件を覆して解析し発展させたことで完成したシステム。

街を守るのはライダーだけではないことを証明する、裏で支える者達の努力と研鑽の象徴。

それがこの新たなマシンゼクトロンだった。

サソードはそのバイクに身を預け、闇が広がる大口を開けた荒波立つ樹海に飛び込んだ。

※

「なあ千夜」

「なにかしら?」

チノが四人分のコーヒーを淹れてくると言って席を立ち、手伝いを申し出たココアがそれについて行ってリゼと千夜二人だけがキッチンに残された。

今日が初対面の者同士、リゼは気まずさを感じた。

自分が空気を悪くしてしまっていた自覚があるのも尾を引いていた。

だが黙っていたら余計気まずくなると思い、話しかけたのだ。

「えーと、千夜は、ジンのことどう思っているんだ?」

双方が認知している共通の話題がジンのことだったから自然と……というだけでなく、純粹にリゼが初めて千夜とジンの関係を知った時から気になっていたことだった。

「同年代のお得意様?」

「いやそういう感じじゃなくて、こう、一個人として見てどう思うのかな、と」

店員とお客の関係を答えられ、食い気味に否定するリゼ。

積極的な態度と裏腹に、リゼの言葉は歯切れが悪い。

「気難しくて妙な行動力もあるヤツだから……何か迷惑かけてるんじゃないか?」

そう言ったものの実際に迷惑をかけているとリゼは思ったわけではない。ただ自分の中にあるジンに対する不明瞭な感情を、他者の言葉から見つけようとしているだけだ。

相談をする、という行為にはおおよそ聞きたい答えがわかっていながらも、それを肯定してもらおう、または第三者視点から答え合わせをするために行う……という側面がある。

だが、今のリゼは自分の気持ちでさえあやふやだ。

自分で何を聞きたいのかわからないから要領を得ない。

しかしそれでも知りたい、向き合いたい……ジンとも、自分とも。その想いは本物だった。

それを感じ取った千夜はその思いに応えるため、慎重に言葉を選びながら自分の想いも伝えた。

「前提として、甘兎庵ウツチをご鼻負ウツチしてくれる人を迷惑な人だなんて思わないわ。『お客様は神様』なんて言わないけど、やっぱり接待業に従事するからにはお客様にはまず敬意を払うようにしてる」

店員も客も相応に敬意を払うべきってジンくんなら言いそうだけど、と心の中で思いつつ千夜はそんな彼を表す言葉を思索する。

「その上でジンくんは……そうねえ」

あえて一言で言い表すなら、と千夜はリゼにもつたいぶる様に前置きする。

千夜の妖しげな流し目にリゼが身構える。

「街に出れば傾奇者、道を歩けば伊達男……と言ったところかしら」

「お、おう?」

何が出てくるかと思いきや、妙な異名めいた言葉と渾身のキメ顔だったためにリゼの調子が狂う。

戸惑うリゼに「傾奇者は一風変わった趣向の人、伊達男はお洒落でカッコいい人って意味よ」と千夜から補足が入る。

「つまりイケてる変人、ということか?」

あまり自身やチノの評価とあまり変わらない結果に物足りなさを感じるリゼ。

「そうね、簡単に言えばそうかもしれないわね……でもこれの一つ、わかったことがあるんじゃないかしら?」

しかし千夜はリゼの直球な物言いがツボに入ったのかお腹を抱えて笑いを堪えた後、リゼとは逆に満足げな顔をした。

「どこに居ても彼は彼、貴方の知ってる天々座刃に変わりはないってこと」

「……ああ、そうか」

リゼは千夜の言葉に一つの解を得た。

そう、彼女は不安だったのだ。

自分の目の届く範囲から離れた彼が自分の知らない何かに変わっ

ただそこで一つ問題が生まれたのです。

苺大福を半分ずつ食べようとしていた兄妹でしたが、苺大福は普通の大福と違い中にイチゴがある分脆いうえ、そのイチゴも一個しか入っていないかったです。

子ども故の早計による失敗、と言うは易しですが、もう買った後なので取り返しはつきません。

手で半分に割ろうとすれば中のイチゴが潰れて折角の苺大福が台無しになることぐらいは子どもながらにわかっていました。

そこで「イチゴと大福を一度分けてから半分にしよう」と兄が提案します。

しかし妹は「そんなの苺大福じゃないわ、ただの苺の付いた大福よ」と反論します。

「だったら一緒に食べれば良いだろ」と兄が言い返しますが妹は聞く耳を持ちません。

その後もあーだこーだと話は平行線を行くばかり。段々とお互い語調が激しくなり、ちよつとした騒ぎになってしまった。

それで困るのは店員である宇治松千夜。

彼女は子どもを相手に店から追い出すという強硬手段をとれませんが。

されど、このままでは他のお客に迷惑が掛かるでしょう。

その板挟みになって悩んでいました。

するとその騒ぎがピタリ、と止まったのです。

見ると竹刀袋を肩から下げた少年が兄妹の許もとに立っておりまして。

少年は店の常連客の一人でした。

感情の見えぬ少年の貌かおに兄妹は言いえぬ恐怖を抱き、静まり返っていたのです。

無表情のまま少年は手の平を出し「黒文字、貸して」と言いました。

兄妹は初めそれが何を指す単語かわかりませんが、少年が指で示したことでようやく菓子こしの横に添えてあった楊枝のことだと理解し、それを言われるがまま少年に渡しました。

すると少年は続けて「半分こで良いんだよね？」と聞きます。

兄妹は一度顔を見合わせたあと、頷きました。

それを確認した少年が楊枝の先を苺大福に当てたかと思うと、一息に大福を割りました。

突然のことに「あ」と兄妹から声が漏れます。

それは少年が楊枝で大福を潰してしまったから……ではありませんでした。

苺大福は見事に真つ二つ。中から綺麗なイチゴの断面が覗いています。

少年は「押して潰す」のではなく「当てて引き切る」というまるで刀のように楊枝を使って苺大福を二つに切ったのです。

兄がお礼を言いました。遅れて妹がお礼を言いました。

少年は「礼には及ばない」と返しつつ、兄妹に店内では他の客に迷惑がかかるから騒がないように注意して、自分の席に戻っていきま

す。

兄はその華麗な手際がカッコイイと思いました。
クラスで一番足が速い子がヒーローと呼ばれる年代の子どもらしい憧れです。

兄は少年の背に「どうすれば自分もそんな風になれるのか」と聞きました。

少年は「僕は大福を切り分けることにおいても頂点を目指しているだけだ」答えました。

兄は少年の言っていることがさっぱりわかりませんが、何となく少年が凄いということはわかった気がしたので「ちようてんをめざすってスゲー」と目を輝かせました。

そして妹は、男の世界ロマンなんてそっちのけで自分の分の大福を食べていましたとき。

めでたし、めでたし。

「その少年っていうのはやはり……」

弟の武勇伝にリゼは恥ずかしさを感じた。

千夜は唇に指を当て「二人だけの秘密よ」と可愛らしくウインクする。

そして興に乗ったのか更なる後日談……というほど後のことではないが、その後のオマケ話までリゼに話した。

「それでね『私の仕事だったのにごめんなさい』って言ったらジンくんどう答えたと思う？」

リゼは首を傾げて考えたがわからず、ギブアップして首を振る。

千夜はやたら上手いジンの声真似をしながら答えた。

『そうだった、すまない。君の仕事を奪ってしまった』って真剣に謝ったの」

そう言って千夜は笑う。されどそれは嘲笑の類ではなく、微笑ましさやむしろ尊敬の意すら含んだ温かい笑顔だった。

釣られてリゼも微笑んだ。しかし少しぎこちない笑みだった。

千夜は深呼吸によって気持ちを整理して……リゼが求めているであろう言葉を紡いだ。

「ジンくんなら大丈夫よ、リゼちゃん」

その言葉は、リゼが自分に無自覚に言い聞かせていた言葉だった。

それが千夜の言葉で、無自覚が自覚に変わった。

リゼは千夜の言葉を静聴する。

肯定の言葉を、あるいは答え合わせを待つ。

ただし、千夜の言葉はリゼの求めていたものとは少しだけ違っていた。

「ジンくんはきつと強い人なのよ。例えば自分が恐れられたり嫌われたりしても『間違ってる』、『認められない』、『放っておけない』って思ったら迷わず踏み込んでいける人。その結果、自分が不利益を被っても割り切って前だけを見て往ける人。そんな誰よりも強く在れる人……でも」

その所為で誰よりも無理をしてしまう……無茶ができてしまう人でもある、という言葉は飲み込む。

ここでリゼに言うべきことじゃないと思ったからだ。

そのうえで念を押すように、願った。

「だからこそ、そんな人こそ、誰よりも帰る場所が必要、だと私は思うの」

それは目の前のリゼだけでなく、本当に伝えたい別の誰かに向けた願いでもあった。

積もった想いは力強く、重ねた願いは純粹だった。

純粹な想いを束ねた千夜の言葉はリゼに、肯定も答え合わせも越えた新たな知見をくれた。

それはリゼの心の隙間というジグソーパズルにはまり、その隙間を埋めた。

「リゼちゃん。いつまでもジンくんの帰る場所でいてあげてね」

そうすれば彼はきつと大丈夫、と千夜は言った。

リゼは千夜が何故そんな哀しそうな眼をするのかわからなかったが、その真摯な想いを受けて強く頷いた。

ジンを信じて待つことを誓った。

※

「あ………あ………」

小柄な少女は悲鳴すらあげられず立ち尽くす。

無力な彼女へタランテスワーム・二体目はその禍々しい爪を構える。

ワームは小柄な少女を殺した後は彼女に変わり条河麻耶としてのこの街に溶け込むつもりだ。

そうやって奪ったマヤの未来を食い物にして、それすらも古い服を変えるような手軽さで捨てるだろう。

ワームにとって欲しいのはDNA情報だけであり、それを擬態コピー&ペイストに使用して、同時に自身を強化アップグレードすることが彼らの目的。

コピーに必要なのはほぼ数秒で、コピーが終わればオリジナルなど

用済みだ。

愚かな同類が邪魔者を引き付けている間に終わらせる。

そして遊びの無い殺意が振り下ろされた。

「うううううおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

しかしそこへパトカーのサイレンなどで有名なドップラー効果を生みながら、バイクのようなものが高速で突っ込んできた。

バイクのようなものはワームを巻き込み、近くの開けた空き地にそのまま吹っ飛んでいく。

バイクのようなものことマシンゼクトロンに乗っていたサソードはその衝突によって空中に投げ出されるも、地面を転がることで衝撃を拡散させダメージを最低限に抑える。

(スピードあり過ぎて木に衝突しかけたから気合でワームに体当たりしてやったけど。ま、結果オーライかな)

と、立ち上がりながら本人は冷静に分析しているが、つまりは「電柱にぶつかりそうだったので歩行者の方へ突っ込んだ」と同じである。

そんなことをするのは最早ヒーローではなく、ただの過激派だろう。

だがそこは入り組んだ自然の迷宮を、人命を優先して全速力かつノーブレーキで急行したために起きた不幸なアクシデントとして大目に見てほしい。

「ッ!!」

それに巻き込まれたワームも未だ健在。

あと少しの所を邪魔された怒りか、闘争本能を燃やしてサソードを睨みつけ爪を構える。

サソードもまた剣を構えてワームと相對する。

「生憎、彼女がお前の獲物であるように総てのワームは僕の獲物。もう一人も殺させないし、一匹たりとも逃がさない」

誓いの口上を立てる。頭に複数の人の顔がよぎっていく。

それは五才なっただばかりの娘を持つ父親だった。

それは七年前この森にピクニックに来ていた母と姉弟だった。

ワームという理不尽にかけがえのないものを奪われた人達を思いながら、サソードは剣を握り直す。

「え………仮面ライダー?」

しかしそこに、殺気渦巻く戦場に似合わない呆けた声。

マヤが森から出てきてしまったのだ。

「そんな所で何をしているんだ、早く——」

逃げろ、とサソードが言い終わる前にワームが動いた。

ワームは両肩にある槍のように鋭い蜘蛛の足を、あろうことかマヤに向けて放った。

「っ………!」

マヤの前に飛び込むサソード。

それがワームの狙いだった。

『人間は何故だかわからないが自分より弱い個体を守ろうとする』。

メグ、マヤという二人の人間の記憶をコピーした情報からワームが考えた策略だった。

ワームは人の記憶、そして情さえも利用した。

「………え?」

怪物の攻撃を受け反射的に目をつぶったマヤは無傷だった。

彼女が目を開くと戦士の背中が見えた。

荒れた芝生に剣が落ちていた。

※

コーヒーカップの割れる音がキッチンに響く。

「ココアさん………」

「ご、ごめんチノちゃん」

どうやらそそっかしいココアがカップを落としてしまったようで、チノに手伝われながらカップの破片を集めている。

千夜も手伝おうとするが、ココアが「今日は千夜ちゃんがお客さんだからいいよ」と気持ちだけ受け取り断った。

その時、リゼは時計を見ていた。

パンの発酵が終わるまで15分を切っていた。

「む?」

リゼが袖を引かれて振り返ると、破片を片付け終わったチノがいた。

「チノ?」

唐突な行動にリゼが呆気に取られていると、チノがゆっくりと口を開く。

「大丈夫だと、思います」

控えめな声量ながら、その瞳はまっすぐリゼを見ていた。

「ジンさんはマイペース過ぎて何を考えているかわからないときがたまに……多々ありますが、決してウソは言わない人ですから」彼はラビットハウスを出ていく前に「ちゃんと一時間以内に帰るよ」と言っていた。

パンの発酵が終わる前に帰ると約束していた。

チノの張りのない声に籠る、ある意味信頼と言っているいい感情。それに相反する気持ちを自分が抱いてしまっていることを自覚し、リゼは我に帰る。

改めて、千夜の言葉を思い出す。

「そうだな。ジンなら大丈夫だな」

その顔は晴れやかだった。

※

「ッ!？」

「……言った、はずだよな? もう、一人も、殺させないと」
二本の蜘蛛の足はマヤを庇ったサソードの両肩を貫いていたはずだった。

しかし、そうはなっていないかった。

「……鎧を着た勇者?」

逆光でサソードのシルエットしか見えないマヤが無意識に呟く。

そう、サソードはマヤの目の前に飛び込む一瞬でマスクドフォームへ変身。強化された腕力でワームの二対の槍を両手で掴んで止めたのだ。

先の戦いで同種のワームの攻撃パターンは解析済みだった。

だからこそ攻撃の軌道を読み、防ぐことができた。

それが同類を囿にして見捨てた、タランテスワーム・アナザーの敗因。

「何、してる」

「え?」

「行け! 走れ! 生きたかったら走れ! 立ち止まるなア!!」

マヤに対しサソードが今までにないほどに声を張り上げる。

その叱咤にマヤは跳ね、一目散に森の中へ駆けだした。

「!」

獲物が逃げた、とワームが慌てて追おうするが……そこで体が動かないことに気付く。

「どこを、見ている。獲物は、お前、だ」

サソードは蜘蛛の足を離してはいなかった。

むしろより力を込めて、一步、また一步と、ワームへ近づいていく。

サソードの予想以上のパワーと気迫に気圧され、仰け反るワーム。

そして足の張力が限界にきたところでサソードがさらに腕に力を込め、蜘蛛の足をへし折る。

「!!?」

先の攻撃を受け止められたことを含めて二度、ワームは虚を突かれた。

同胞を殺したサソードへの怯えと染みついた逃げ癖もあった。よって、次の反応が遅れる。

そんな怯む相手に容赦なく、サソードはへし折った鋭い二対の足を構え——返礼の如く、ワームの胸に突き刺した。

血の噴水が、天を覆う枝葉を濡らして染める。

声にならない絶叫が、樹海の闇に融けて消える。

「……こんな……こんなはずではあ………！」

致命傷を受け倒れたワームは、メグともマヤでもない乱れた残像をその身に浮かべながら呪詛のような苦悶の声を漏らす。

声を出すたびに、口から、傷口から、大量の血が吐き出される。

ワームといえど、その姿はあまりに痛々しく、哀れだった。

「折角、アイツらのいないこの世界まで来てっ………クソお………あの時、男の方をコピーしていれば、こんな、こんなことにはあッ………！」

この期に及んでワームは自身の敗因を擬態元に求めた。

確かに、少女らは血濡られた戦闘とは縁の無い人達だったかもしれない。戦闘訓練の記憶を持つ男の方をコピーしていれば少しは勝率をあげられたかもしれない。

しかし過去は過去だ。後悔しても何も変えられない。

それが、誰も抗えない残酷な真実。

「………擬態元が弱かったんじゃない。お前が弱かったただけだ」それを身を以て知っているサソードはその妄念を、苦痛を、一刀によって断ち切った。

※

「……どうやら、丁度間に合ったようだね」

「いやいやさらっと定位置に着くなジン。いつの間に来たんだ？」

「今だよ」

冷たく返すジンだが、リゼの顔が曇ることはない。

いつも通り変わらないジンに呆れつつ、憑き物が落ちたように彼女の顔は清々しい。

「何かあったの？」

「別に？」

苛立ちではなく茶目つ気でやり返す余裕があるくらいだ。

リゼと千夜がアイコンタクトをして微笑みあう姿に首を傾げるジンだったが、良い意味での変化だということは何となく空気でもわかったので「なら良いや」と一人ごちる。

閑話休題。

パン作りはココア主導のもと順調に進み、全員のパンができた。

……さて、みんなは覚えているだろうか。今回はラビットハウスの新メニュー作りとココアとジンのパン作り対決（そしてリゼの料理大作戦）を兼ねていたことを。

ココアは最初に宣言した通りの新規開拓『焼きうどんパン』。

ジンは三分クッキング的やたら凝った『ピザパン』。

両者のパンが揃い、試食開始。審査員はチノ、千夜、リゼの三人。

まずは先手、ピザパン。

「この濃厚なトマトの風味……！」

「素材を活かした味だわ！」

「二種類のチーズとの相性も抜群だ！」

「ちなみに材料は全て仕入れ品を発注している店で揃えられるよ」

「「？」」

「ジンさんは時々、父から仕入れ品の受け取りを任されていますが」

「それで品揃えを把握していたのね！」

「我が弟ながら、その用意周到さが恐ろしい……！」

「くっ……まだだよ！ 私は！ 私のパンは負けない！」

次は後攻、焼きうどんパン。

「こ、これは……！」

「焼きうどんとパンの完全調和!？」

「完璧ネタだと思ったのに！ 食がとまらない！」

「……これは、カロリーハーフのマヨネーズで炒めてあるね」

「なるほど。それが焼きうどんの味をまろやかにしつつ」

「油っぽいしつこい味になるのを抑えているのか！」

「小さく切った具材のお陰でパンに挟んでも食べやすいわ！」

「おじいちゃんが言ってたの……」『料理とは粋いきなもの、さりげなく気が利いてなければならぬ』って」

「粋いき……か」

以上で試食終了。

結果は……

チノ、『焼きうどんパン』

千夜、『ピザパン』

リゼ、『焼きうどんパン』

勝者、ココア『焼きうどんパン』

「これは……しょうがないね」

勝敗結果にジンは静かに納得した。

「どっちも美味しかったです、が……」

「飲食店の者としては材料の仕入れルートをちゃんと把握しているのは良いなと思ったわ」

「接戦だったけど……すまないな。どっちかというところココアだった」

「いや良いんだ。身内鼻根で勝っても嬉しくはないから。それに負けた理由もわかってる」

ジンの肩にココアが手を置く。

「愛、だね」

『好敵手』と書いて『とも』とか読みそうな顔をしていた。

「……愛かは兎も角、僕のピザパンはソースが悪い意味で勝ち過ぎていた。その所為で折角のパンの風味が塗り潰されていったんだ。その点保登さん「ココア」……今日のところは勝者に従うよ。……ココアさんは焼きうどんの味の濃さを調整して、パンと喧嘩しないようにしていた。それが僕の敗因だ」

ジンは肩に置かれたココアの手をやりわりどかしつつ自身の敗因とココアの勝因を述べた。

ココアはそんなこと聞かずに喜びの舞を（チノを巻き込んで）踊っていた。

「だげどココアさん」

ジンの強めの語調で流石のココアも舞を止めてジンの話を聞く。

「今日は君が勝った。それは君が僕より強かったからだ。だが、僕は総てにおいて頂点を目指す。つまり未来あしたに勝つのは僕だ」

「うん！ いつでもかかってきなさい！」

最初はココアが叩きつけた挑戦状。

そして勝ったのはココア。

ならば次に挑戦状を出すのがジンなのは当然の理。

ジンは生来の負けず嫌いなのだ。それは魂に刻まれていると言っているほどに。

ココアもその挑戦状を快く受けた。

彼女は強敵とか好敵手とかを『ともだち』とか読んじやう女の子だから。

「まあ、どっちも美味しかったですけど……総菜パンはコーヒーには合いませんよね」「そうじゃな」

「ええ……今それ言うのかチノ……」

オチはチノがつけたのだった。

「それじゃあみんなでパン食べよう！」

パン対決が大局的に見たらドロミみたいな結果に終わったところで本来の新メニュー開発……という名目のパンパーティーに戻った。

「なあ、ジン」

ジンが中にイチゴジャムが入った人面パンを半分に裂いて「最後まで中たっぷりだね」と笑えないブラックジョーク言い、デザインしたチノとデザイン元(?)のティッピーを戦慄させていると……リゼがその背に声をかけた。

ジンが振り返ると、リゼはおずおずと皿を差し出した。

「私が作ったのだ。良かったら食べてみてくれ」

それはサンドイッチだった。

「どうしたの？ リゼ、ジン」

「あつ、お母さん！ 聞いてよジンが銃より刀の方が強いとか変なこというんだよ！」

「そんなことないよ！ 日本刀は世界サイキョウの武器なんだってマンガに描いてたもん！ お姉ちゃんこそ銃なんて単純な力に頼ったシレモノだよ！」

「痴れ者なんて言葉どこで……そのことで喧嘩しているの？」

「刀振りまわしても、近づく前に撃たれたらどうしようもないよ！銃が強いのはノブナガが証明してるの！」

「そんなタマシイのこもってない銃弾なんて全部はじけばいいでしょ!? で、そこからまあいいに入ってそく首チョンパだよ！」

「もう、リゼはお姉ちゃんだからムキにならないの。ジンも首チョンパなんて怖い言葉を使わない……うーん。二人が仲直りしないなら明日のピクニックどうしようかしら」

「えっ?!」

「ピクニック行きたい人〜?」

「はーい!」

「じゃあ仲直り、ね?」

「はーい」

「はい……くっ!」

「ジン〜?」

「はーいっ!」

「明日はアレ、作ってくれるよね!」

「アレってサンドイッチのこと?」

「うん!」

「ホント、ジンはサンドイッチが好きね。じゃあ明日は早起きしないといけないわね」

「ジン! お母さんは体が弱いんだからワガママ言わないの! それだけ好きなら街のコンビニで買えばいいじゃない」

「えー!? 僕はサンドイッチはサンドイッチでもお母さんの作ったのが良いの!」

「分かったわ、明日のピクニックにはサンドイッチを作って行きましょう。リゼもお母さんを心配してくれてありがとう。気持ちだけでも嬉しいわ」

「でも……」

「それならリゼ、明日の朝、サンドイツチ作り手伝つてくれる?」
「うん! わかった!」

「えー」

「……その『えー』はどういう意味だジン」

「もくひけんこーし」

「なにおう!? じんもんしてくれる!」

「はいはい、仲直りした端から喧嘩しない二人とも……ホント
仲良しねえ」

「仲良くない!」

「ふふふ、はいはい……」

「リゼ、行くのよ! はやくジンをつれて山の麓まで逃げるのよっ!」
「リゼ、ジン……あなたたちだけでも逃げ——」

「お姉ちゃ……助け……」

「いやだ、いやだっ……お母さん、ジンっ……いやだ
よ、そんな……ああああああああ!!」

「・・・・・・・・僕に、それを食べる資格は、ない」

「え？　なんで？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい・・・・・・・・」

聞き返してもジンは押し黙るばかり。

リゼはジンを信じていた。

ジンなら例えどんな酷い出来だったとしても、食べてくれはするだろうと。

それが、裏切られた。

リゼの手から、皿が零れ落ちて「ジンくん」

「え？」

零れ落ちそうだった皿をココアが支えていた。

そしてそのサンドイッチを、ジンに差し出した。

「ジンくん。食べて」

「・・・・・・・・断る」

「・・・・・・・・なんでかな？」

「ココアさんには、関係ない」

ココアは笑顔のまま、その口調も穏やかなままだ。

されど同時に強さのある言葉だった。

そして『温かさ』のある言葉だった。

例えるならそれは『子供を宥める母親に似た温かさ』だった。

ココアは何も知らない。

リゼの苦悩も過去も。

ジンの苦痛も過去も。

でも、友達が苦しんでいたなら迷わず手を差し伸べようとする。そんな女の子だった。

「ジンくん言ってたよね『米粒から人間まで、総ての生命に敬意を払う』って」

「……それが？」

「ジンくん。料理には生命いのちが宿るんだよ？」

「料理に、生命が？」

リゼは放っておいたら永遠にジンと向き合うことを諦めそうだった。

ジンは放っておいたら永遠にリゼと向き合うことを止めそうだった。

二人を放っておいたら永遠に擦れ違ったままになりそうだった。

「人の愛情が籠った料理には生命が宿るの。だって料理は時に、人の人生を変えるものだから」

『絆とは決して断ち切る事の出来ない深いつながり。例え離れていても心と心が繋がっている』

『そばに居ない時は、もっとそばに居てくれるもの』

そんな祖父の言葉通りに、二人にはいてほしいと思ったから。

現在、家族と離れ離れに暮らしているココアだからこそその共感だった。

「それに今日のところは勝者に従う、今日は私が勝者、でしょ？」

ココアはそんな口実を作って、朗らかな笑顔を浮かべた。

ジンは……その口実に甘えることにした。

「………いただきます」

何故そうすることにしたかはジン自身にもわからない。

あるいはココアに今は亡き母の面影が見えたのか。

兎にも角にもジンは今日、保登心愛という少女に、二度負けた。

「涙………」

リゼが、口からつい漏れ出した言葉を、呟いた。

「え………」

その言葉通り、ジンの瞳から一筋の涙が流れていた。

七年越しの仮面が、外れかけていた。

初めて会った日の事憶えてる？ 自分の家のメイドにしようとしてたわよね

サンドイツチ落涙事件。

特にそんな呼称はついていないが先日以来、ラビットハウスの雰囲気は少し変わった。

ちよつぴりだけ明るいか、緩くなった。

それはあの日からジンの周囲への当たりが少し柔らかくなったからだろう。

閑話休題。

放課後のラビットハウス。 開店前。

開店準備を一通り終わらせたりゼ、チノ、ココア、ジンの四人はチノの淹れたコーヒーでまったりしていた。

「このコーヒー一杯のために私はここで働いていると言ってもいいね！」

「大袈裟です」

絶賛するココアにチノは冷静にツツコミ。

「このコーヒーが無ければ僕がここで働くことはなかっただろう」

「説得力が違いますね」

「チノちゃん!？」

賞賛(?)するジンにチノは冷静に納得。

「賃金を稼ぐために働いているわけじゃないからね。 欲を言うならチノ^きさんが欲しい」

そして爆弾発言にコーヒーを噴き出しかけ、むせるチノ。

「正しくは我が家のメイドになって欲しい」

「ジンお前つ………本気で言っているのか？」

リゼは自身の弟のことながら割とドン引きしていた。

「本気だよ」

いつになく目がマジだ、リゼは思った。

やっぱりジンはジンはジんだ、チノは悟った。

「メイド！　メイドさん可愛いよね！」

「ココアさん!？」

ココアは昂った。チノは焦る。

「違うよココアさん。メイドと言っても電気街の方じゃなくて、ハウスマイド使用人のことだから」

ココアを窘めるジン。

おまいう的な、とてもちぐはぐな構図だった。

「私はラビットハウスを継ぐつもりなので無理ですよ？」

「そうなんだよね」

ジンは困っていた。

チノのような接客術、もといおもてなしの所作ができる使用人が欲しい。

だがラビットハウスで飲むコーヒーも美味しい。

二律背反の問題だった。

しかし実のところ今回の論点は別にある。

「厳密には僕が今一番求めているのはステイルルームメイドなんだよ。勿論、ハウスマイドとしてチノさんを雇いたいというのも嘘じゃない」

「ステイルルームメイド？」

聞き慣れない単語にチノは首を傾げる。

「ステイルルームメイドというのはお茶やお菓子の貯蔵・管理を専門職にしているメイドのことだよ。自分でお菓子を作ったりもする、簡単に言えば専属のパティシエのようなものかな」

他にも酪農専門のデイリーメイド、洗濯専門のランドリーメイド、等の担当する仕事によって多くのメイドの種類があるのだ。

「メイドの種類はともかく、どうしてそのステイルルームメイドを雇いたいんだ？」

三人が飲み終わったカップを片付けるために来たリゼが、ついでに脱線してきた話を修正するためジンの方を向いてステイルルームメイドが欲しい理由を問う。

リゼからの問いにジンは少しだけ逡巡しつつも、リゼの方を向いて

答える。

「……最近上手くないことが多い。この前なんてココアさんに数学のテストで負けた」

「え!?! ココアがお前に?!」

ジン達が通っている高校は、最近でこそ少子化の煽りを受けて共学になったばかりであるがそれ以前からこの街でも(リゼのお嬢様校には劣るが)偏差値が高いことで有名な学校だ。

ジンはそんな学校で学年トップ3争いに食い込む成績を出している。

そのジンにココアが1教科とはいえ勝ったこと。何より彼女が理系女子であったことにリゼは驚いた。

別にバカと思っていたわけではないが、意外な事実であったのは否定できない。

「まあ、それは置いといて。それで?」

「紅茶には疲労回復やリラックス効果がある。勉強の合間に飲むのに最適なんだよ」

普段から奇天烈で高慢な態度をとっているジンだが、紅茶やコーヒーを嗜むみやび雅な趣味を持っていたりする。

そういう所も含めて良いところのお坊ちぼっやまっぽい。

少なくとも自分よりかは自身の生まれを自覚していてある意味『立場に相応しい姿』という『型』を守っているようにも見える、とりゼも以前から思っていた。

「そこまで知っているなら自分で淹れろよ……」

「紅茶に割く分の手間や脳の容量を勉強に使いたい」

「そこから行き着いた発想がお坊ちやまにもほどがあるだろ」

リゼは呆れながらもジンのことがわかってきた気がする。

『わがままでプライドが高いお坊ちやま』『でも認めた相手は素直に敬うし、困っている人には不器用だが優しさを見せる』……そういう二面性を持っているのだ、彼は。

なんにしろリゼにとっては今も昔も『手のかかる弟』に変わりない。たぶん、それだけで十分だったのだ。

リゼはそう思えるようになってきた。

「いいなく、リゼちゃん達。いかにも姉弟って感じで」

「前回のパン作りでの出来事は驚きでしたが、丸く収まって良かったです」

雨降って地固まるとはこのことか。

少し離れた位置からココアとチノは微笑ましく二人の姿を見ていた。

「しかし意外ですね。前までのジンさん、あんなにリゼさんを避けていたのに」

「いやいやチノちゃん。ジンくんはああ見えて実はお姉ちゃん大好「君といっしょにしないでくれ……」チノさん、そろそろ時間だから行くね」

「あ、はいっ。お疲れ様です」

ココアの妄言をジンがインターセプト。

そして時計を見て、席を立つ。

彼は今日、特別な予定があった。

なので重い荷物を運ぶなど男手がいる準備の手伝いだけして、早めにバイトを終えるようにしていたのだ。

「もうこんな時間か。それじゃあジン、よろしくな」

「うん」

その予定というのとはある人達に病院へ見舞いの品を持って行くことで、それはリゼにとっても他人事ではなかった。

今日はジンだけだったが、一昨日は二人一緒に行っただし、明日はリゼが行くこととしている。

「またねっ、ジンくん！」

店を出る前、ココアと目が合う。

ジンは結構根に持つタイプで、それでいて負けず嫌いだ。

態度が柔らかくなったのも『あんな醜態(落涙)を晒したのはあくまで僕の意思であって、ココアさんに絆ほどされたわけではない』という意地プライドによるもの、とジンは思っている。

しかし、そこに数学のテストで彼女に負かされるというダブルパン

チが入る。

彼はテストにおいても常に頂点を目指している。

高校での初テストながら数学は特に自信があり、ココアに負けなければ実際に一位頂点になれただけにシヨックは大きかった。

つまりジンはココアに一種のライバル心を抱いているのだ。

「うん、またね。じゃあみんな、僕はお先に」

ジンはココアにメンチ切りながらラビットハウスを後にした。

「さっきの（お姉ちゃん大好きっ子って言われた）ことで照れてるのかな？」

だが、当のココアに自覚は無かった。

※

ここは木組みの街にある、とある病院の一室。

その病室の窓際のベットに男が一人腰掛けていた。

男の片足には包帯が巻かれている。

「おう、ありがとな……うんうん……いや良いつて……
そうか？ あはは……」

男はお見舞い来てくれた客と談笑していた。

「いや、大丈夫だよ。俺は明日には検査入院も終わって退院できるし……え？ 言つてなかった？ そうだっけ？ ……むっ、何だとお？ これでも今年で21だぞ？ ……そうは見えないって、えええ……ん？ ああ、もうそんな時間か……おう、じゃあな」

見舞いに来てくれた客が帰り、男は一息吐く。

「随分、楽しそうじゃないか」

「うお!? って、いきなり近づいて話しかけてくるのホントにビックリするからやめてくださいよ、坊ちゃん」

そして音もなく病室に現れたジんに驚かされる。

男は、先日ワームに足を負傷させられた常駐隊員だった。

ならば見舞いに来た客というのも、察しが付くというものだ。

「ライラック、それにチューリップ、か」

「あ、それ、今日来てくれた恵ちゃんが花瓶に挿してくれたんです」

「恵……とは、奈津恵？ あの日、貴方と一緒にいた方の？」

「はい。呼び方は本人に、下の名前の方が呼びやすいからって勧められて。今日は来れなかったみたいですけど、昨日はもう一人の麻耶ちゃんって子も来てくれて……色々根掘り葉掘り聞かれて大変でしたけど。勿論なにも話していませんよ？」

「うん、そこは聞き耳立ててた先輩達の証言があるから心配してない」

「ええ!? そんなあ、信用ないなあ……」

「そもそも盗み聞きなんて悪趣味つすよ、と男は同室の入院患者たちに抗議する。

しかし各々がテレビを見たり、本を読んでいたりと別の事に集中している……フリをしている先輩達、同じくワーム襲撃からどっこい生き残り入院している常駐隊員の5人の同僚達はその抗議を受けてもどこ吹く風。

「おいおい、んなこと言ったって、なあ？」

「壁も敷居もない同室ですし？」

「聞こえちまうもんはしようがないよな〜？」

「と言うかぶつちやけ、あんなバタバタなラブコメなんてレアもの過ぎ。見なきゃ損っしょ」

「右に同じ」

むしろ下世話な笑みを浮かべて後輩をからかう。

体育会系特有の後輩いびりだ。

「ちよっ、ラブコメってどうゆうことっすかあ!？」

高校時代に野球部だった男はその空気に慣れてはいたものの、脈絡の無い邪推に動揺する。

「紫色のライラックの花言葉は『初恋』、

桃色のチューリップは『恋する年頃』、

赤色のチューリップは『愛の告白』……だったかな？」

「な、なに坊ちゃんまで悪ノリしちゃってるんですか!」

さらにジンまでもが、見舞いの花の花言葉を材料にラブコメ肯定をしだして男は焦る。

「なんてね、冗談だよ」

「坊ちゃん! 真顔の冗談はキツイから勘弁してくださいよお」

ジンのジョークは真顔のジョーク。

真顔でティツピーパンにかぶりついて「……………ティツピー、頭スツカラカんだね」とか、ぬかし出すのでティツピーの怒りを買って戦争が勃発する。

それを一々止めないといけないチノの心労は絶えない。

しかも、止めた端から「ところで何故にその毛玉おやじは喋るんだ?」などとオリブオイル感覚で火に油をぶち込んでいく天然属性まで持ち合わせている。

流星にチノが本当に困り果てると二人(?)ともすぐに静かになるのがせめてもの救い。

最初からそうであってくれ、とはリゼ談。

「でもあの子が貴方に特別親しさを感じているのは事実だろう」

「? そうですか? ワームを倒したのは坊ちゃんですか? 俺なんて……………」

自分はワームに対してロクに何もできなかった。そう自認しているために男は少女がよく見舞いに来てくれる理由がわからず、ずっと疑問に思っていた。

「……………僕はあくまでワームを斃しただけ。奈津恵かのしよを守ったのは貴方だ」

「そう……………なんですかね? 確かに同じ危機を乗り越えた者同士ですけど……………」

ジンにそう言われても男は納得できなかった。

男にとってヒーローとは平和を守り、無辜の人々に降りかかる厄災をその手で打ち砕く者のことだ。

つまり、目の前の少年のこと。

自分は違う、と男は思っていた。

「吊り橋か？ 吊り橋効果なのか？」

「そんな、実在したなんて！ ニコポなんてハーレム系ラノベだけの設定だと思ってたのに！」

「最近の若いのは良いね。おじさんの時代なんてなあ」

「ちえ、オレがあと十歳若けりやーな」

「それでも無理だ諦メロン」

だが先輩隊員らの野次がそんなシリアス空気をぶっ壊していく。

「外野うるさすぎい!？」

相手が上司の息子や先輩なので遠慮していた男も流石にツツコミが爆発した。

「もう何でもいいや。あ、これ僕からね」

「ハイやめてくれませんか！ そうやって人が弁解する前に話を切り上げるのは！」

特にラブコメとか興味ないジンはさつきと話を切り上げて、見舞いの品である果物の盛り合わせ（産地直送）と自身が持ってきた花を退院間近の男以外の隊員達の花瓶に挿していく。

当然ちや当然だが後輩の男以外の花瓶にも、先に来たメグの贈った花が挿してあった。

ただ、男の花瓶の方が気持ち凝り気味……な、気がしなくもない。

「この花って確か……なんだっけ？」

「ガーベラだよ。ウチの庭園にあるのを、庭師の人に頼んでちょっとね」

「ああ、通りでどこかで見たことあったなって思ったんですよ」

ガーベラには『常に前進』という意味の花言葉がある。

そしてピンクのガーベラの、西洋での花言葉は『appreciation』。意味は『感謝』。

如何にもジーンらしい、花のチョイスだった。

「呼び出してすまない」

「それはいいんですけど、どうしたんです？ 俺だけ呼び出して」

ジンから二人きりで話したいことがあると言われ、先輩達に一通りからかい倒された男は病院の屋上に来ていた。

普段プライベートで他者と積極的に会話しないジンに呼び出されたことで、話すこととは一体何のことなのかと男は少し緊張しながらジンの言葉を待つ。

そして屋上の手すりに身を預けて街を眺めていたジンが口を開く。

「……………隊を、抜けるそうだね」

単刀直入に切り出された話題に男は一瞬呆け、ゆっくりと頷いた。「話っているのは、そのことでしたか」

彼の担当医曰く「負傷した場所が悪く、リハビリをしても麻痺が残る可能性が高い」とのこと。

程度は日常生活を送る分には問題ないレベルらしいが、戦闘者にとっては致命的な後遺症だろう。

「すまない。僕の到着が遅れた為に……………」

ジンは男に頭を下げる。

突然の謝罪に男は戸惑う。

「え!?! いやいや坊ちゃんは悪くないでしょ!?! 俺がへましただけで」

男がフォローしようとするが、頑固で自分の考えを曲げない性格のジンは納得しない。

「違う。貴方は貴方が出来ること、成すべきことを成し遂げた」

ワームを斃すことがゼクターに『選ばれし者』の義務。

そしてワームからもう何も奪わせないことが『天々座刃』に与えられた使命。

ジンはそれらを成せなかった自分が不甲斐ないのだ。

しかし、そんなジンの自罰的な考えを男は否定した。

「そんなネガティブなセリフ、坊ちゃんらしくないですよ。それに坊ちゃんはしっかり守ったじゃないですか。あの二人の命を」

それは飾り気のないまっすぐな言葉。

「坊ちゃんがいなかったらあの二人は現在を笑って過ごさせていません」

「……」

だからこそまっすぐに相手の心に刺さる。

「仮面ライダーがいるからこの街は怪物に狙われていても平穩でいられるんです」

「僕は……」

「コアといい、この男といい、ジンは人のストレートな善意に弱かった。」

純粋な願いから目を逸らし、まっすぐな願いを無視できない。

それは、そんな彼自身の心根が愚直なまでにまっすぐだから。

「それに家族と向き合ういい機会だったと思っています」

「家族？」

男は自身の身の上をジんに語り始めた。

「俺、実家が寿司屋なんですけど、跡取りになるのが嫌だって言って飛び出してきたんです。俺には寿司握るよりもっと凄いいことができないんだと思って……違うな、ただ認めたくなかったんです。親父の跡を継いで寿司職人になることが敷かれたレールを辿らされているようで……」

男が語るは挫折、過ち、そして気付き。

「でも違った。結局俺は現実から目を逸らして、自分の道を見失っていただけなんです」

男が久しぶりに実家に電話をかけると母親が出た。

母親はただ一言「帰っておいで」とだけ言った。

「今更跡継ぎにしろだなんて虫のいいこと言うつもりはありません。でも、直接親父に会ってケジメ……みたいなものをつけるつもりです。そうしてやると俺はスタートラインに立てると思うから」

男は語り終えた。自分がこれから往く道を。

何故そうしたかは男自身うまく言葉で表現できないが、あるいはこれも一つのケジメだったのかもしれない。

「それで、この街を去るの？」

「……………どういう結果になるにしろ、そのつもりです」

それは男の覚悟。未練を断ち、一步踏み出す決意。

ジンはその意志を飲み込み、頷いた。

「僕に貴方を止める権利はない。ただ、彼女らへの別れの挨拶は忘れないであげてね」

「恵ちゃん達、ですか」

「僕が言えた義理じゃないけどね。未来は不確定で、保障なんてどこにもないから……………悔いは残さないに限るよ」

未来を、限定的であるがその瞳に写せる者の言葉。

過去の悔いを引き摺ってでも、前へ進むと決めた戦士の言葉。

現在進行形で（サンドイツチ食べた）後悔と戦う少年の言葉。

言葉には妙な重みがあった。

「……………わかりました」

男もそれを感じ、首肯する。

ジンは言質をとって満足すると、彼に花束を差し出した。

「次いつ会えるかわからないから、今の内に退院祝いも兼ねてこれを送るよ。いずれ街を出て行く時、この花を貴方の往く道に連れて行ってくれ」

それはスイトピー、この街を去ったとしても 変わらず貴方は街の誇りだガザニア、貴方の往く道に幸あれゲツケイジュの花束。

自由奔放だが責任感が強く、

不愛想だが仲間思いな、

一匹狼で口下手なヒーローが送る、共に戦った同士への不器用なメッセージ。

花の教養が少ない男にそのメッセージは、少なくともこの場においては十全に伝わっていない。

「……………坊ちゃん、今までありがとうございます」

しかし、気持ちは十分に伝わった。

「うぐぐ、いづつ、あがい……！」

病院を出た瞬間、ジンはまた例の未来視をした。

今回の予知はおそらく、早くても数十分後の出来事と予想できた。いつもよりかは時間の猶予がある。

しかしその反動なのか予知が終わった後も眼球は煮え滾りするようなほどに熱く、脳の中をムカデが食い散らし回っているかのような痛みが止まらない。

「うぐッ……！」

激痛に耐えかねて自分の額を自分で殴る。

痛みを痛みで緩和しようとする矛盾した行動。

朦朧とする意識はジンから正常な判断力を奪っていた。

ジンのあまりに異様な様子に心配して声をかけようとする人もいたが、彼の修羅と見間違うほどの覇気に気圧されて去っていく。

(ジャンキーみたいになるから多用はするな、って医療班の人に忠告されたけど……)

堪らずポケットから鎮痛剤の錠剤が入った瓶をとりだし、中身を口内に煽る。

錠剤を飲んだことで大分マシになってきた。

だが、体の痛みは薬で抑えられても、心の痛みはそうはいかない。

「ジンはあ？　ひぐっ……ジンはどこにお？　どこにいるの？　わたじを……私をひとりにしなでえ……」

(お姉ちゃん……泣かないで……僕がずっと……)

ずっとそばにいるから………)

「大丈夫ですか?」

かけられた声に反応してジンの意識がいくらか鮮明になる。

眩暈めまいで顔がはつきり見えないが、声の質とシルエツトから金髪の少女だということは認識できた。

見慣れた白い制服を着ていることからリゼと同じ学校の生徒だろう、とジンは察した。

「今日は危ないから、暗くなる前に早く家に帰った方が良い」「え?」

唐突な言葉に金髪の少女は虚を突かれ、首を傾げる。

「……いや、何でもない。心配してくれてありがとう」

ジンは自分を心配して声をかけてくれた少女へ頭を下げる。

そしてそのまま彼女に背を向け、何もなかったかのように背筋を伸ばして歩き去っていく。

「早く家に帰ろうって言われても私、今日もバイトがあるんだけど………って、ひゃあつ!? もうこんな時間!」

少しの間呆気にとられていた少女だったが、そこでバイトの時間が迫っていたことを思い出す。

彼女は人と人の間を抜き去りながら、日が照らす街道を慌てて走り去っていった。

しばらく歩いて、少女の視線が外れたところで人目につかない裏路地に入る。

崩れ落ちそうになる体を、壁に手を付いて支える。

(僕はヒーローなんて大層なモノでは無い。今の僕の存在理由は、総

てのワームをこの手で斃すこと・・・それまでは・・・
苦痛と重責を引き摺りながらもジンはまっすぐ自身の道を進んで
往く。

初めて会った日の事憶えてる？ 自分の家のメイドにしようとしてたわよね 2

時刻は夕刻。

チノ達が切り盛りしている昼のカフェ・ラビットハウスを閉め、タカヒロがマスターを務める夜のバー・ラビットハウスに切り替える準備を終えたチノ・ココア・リゼはマグカップ専門のショップに来ていた。

何故、彼女達がそんな所に来ているのか。

発端は開店前にシンプルなデザインのラビットハウスのカップを見てココアがチノに「もっと色々なカップがあった方がお客さんもきつと楽しいと思うよ」と言ったことで、

丁度チノが（ココアが仕事に慣れるまでに割ってしまった分の）新しいカップの補充をしようと考えていたこともあってその意見に乗ったのだった。

「ジンくんも来れたら良かったのにね」

「ジンさん、家の手伝い大変そうですね」

「父は優しいが厳しい時は本当に厳しいからな。特に時間には厳しいし、断りの連絡を一文メールで送るだけで手一杯だったんだろう」

ジンは病院に家の部下達の見舞いに行ったあと、本来なら彼女らに合流する予定だったのだがまたしても用事が入ってしまったのだ。

本来ならラビットハウスに相応しい^{すい}粋な逸品を一緒に探そうと思っていたチノは残念そうにしている。

「まあまあチノちゃん。お姉ちゃんに任せなさい！」

袖を捲り上げながらガッツポーズを決めるココア。

「ココアさん？」

「お洒落で可愛い最高のカップを買って、私達のセンスでジンくんを驚かせちゃおう！」

落ち込んだチノを元気付けようとココアは張り切って店内に入っていく。

「大丈夫か？ ジンは食器であれ、料理に関係するものに関して特に
厳しいぞ？」

「限りある資金でそれなりの数を揃えなくちゃいけないから、安価かつ
丈夫なものでないといけないってココアさんわかっているんです
かね……」

二人は幸先に不安を覚えつつもココアに続いた。

そして案の定テンションが上がり過ぎて注意が散漫になったココ
アが、商品の陶器が飾られた棚に衝突。いきなりカップを割りかける
というハプニングがあったがそこは二人がフオローして事無きを得
た。

「わー！ このカップ可愛い」

それで反省し、多少は自制しつつもお洒落なカップの数々に気持ち
の昂りを抑えられないココア。

「あ」

彼女が何気なく伸ばした手が別の少女の手に触れた。

二人の少女が慌てて手を引っ込めてお互いの顔を見つめ合う。

「まるで少女漫画のワンシーンだな。ベタな展開ならここでお互いの
顔が急接近して」

『芋けんぴ 髪についてたよ』と言って食べるんですね。ジンさん
に貸してもらった漫画に描いてました」

「そうそう……ん？」

少女漫画の 法則が 乱れる！

「小麦粉、髪についてたよ」

「ついてるわけないでしょ！ 昔のヨーロッパの貴族じゃあるまい
し……」

ココアの少女漫画的セリフ（）にツツコミを入れた金髪の少女はり
ぜの存在に気付き、目を丸くする。

「あれ？ シャロじゃないか。奇遇だな」

リゼも一泊遅れて少女に気付く。

「リザさんのお知り合いですか？」

「ああ、私の通っている高校の後輩の桐間紗路だ」

リゼから紹介を受けた桐間紗路ことシャロ。

シャロも、ココアとチノがリゼのバイト仲間だと教えてもらい、二人に恐縮した態度で挨拶をする。

「り、リゼ先輩の後輩の桐間紗路、です！」

「あはは、そんなに固くならなくていいよ？ リゼちゃんの後輩ってことは同じ年なんだし。よろしくねシャロちゃん！」

出会って三秒で友達をモットーにしているココアはシャロの堅苦しい言葉遣いを和ます。

「あ、そうなんだ。あれ？ その割には……」

ココアが同じ年だと知って態度を軟化するシャロ。

だがそこで自分と同じ年であるはずのココアが年上のリゼに対してやけにフレンドリーな、悪く言えば馴れ馴れしい態度をとっていることに疑問を感じた。

そんな年功序列を重視するお嬢様学校に通っている者特有の疑問にリゼが答える。

「実は少し前までココアの奴、私のことを同じ年だと勘違いしててな。私自身、年功序列をそこまで重視してないし今更急に態度を変えさせるのもおかしいだろ？ ココア自身もこういうキャラだしな」

ジンのことも双子の姉弟だと思っていた模様。

実際、帽子などで髪型を隠して体型が目立たない服を着れば、ぱつと見どつちがどつちかわからない位には似ている。

「リゼ先輩はどうしてこの店に？」

「私達はバイト先の店で使うカップを買いに。そう言うシャロは？」

デパートの一店舗ならショップピングしている内に偶然出会っても不思議ではないが、業務用からそれなりに高価な商品を取り揃えているカップの専門店で見合わせたことが気になったリゼ。

「私はこの店のカップを見に……」

「買わないのか？」

「い、いえ、見てるだけで充分ですからっ」

リゼの問いにやたら動揺するシャロ。
目が全力でバタフライしていた。

「シャロさんはどのカップが良いと思いますか？」

憧れの先輩であるリゼ相手に下手な誤魔化しを言う訳にもいかず困っていたところで、チノの質問に救われるシャロ。

即座に話題を変え、彼女の相談に乗る。

「そうね、例えば……ほら、このカップは紅茶の香りが広がる形になっているし、こっちは持ち手の触り心地が工夫されているわ」「カップにも色々あるんですね」

「おおっ、触り心地が気持ちいく」

「細部を見るとカップそれぞれに職人の拘りこだわがあるのよ」

自分の趣味の話題であることもあり、上機嫌にスラスラと語っているシャロ。

その様子にココアはこの場にはいないとある少年と似たものを見た。

「そうやって語る姿、まるでジンくんみたいだね！」

「いや、誰よそれ」

リゼの弟であるジンの存在を知らないシャロは困惑した。

リゼとは暴漢（不良野良ウサギ）に乱暴どうせんぼされていた際、助けもなかったことで知り合った仲だった（シャロはウサギが大の苦手）。

しかし校内の人気者であるリゼとはその後、じっくり話す機会はあまりなかったのだ。

むしろ今日ほど長く話せた日は今までなかった。

「つまり『のぶれす・おぶリーじゅ』。高貴な人ってことだよ！」

「え？ 私が高貴つ?! そ、そんなことないわよ！」

自分が高貴な人と言われ驚愕するシャロ。

恥ずかしさから周囲に話してはいないが彼女は『お嬢様』と『一部の秀才』が通う高校に、奨学金制度を用いて通っている『一部の秀才』の方なのだ。

無論、その生活は高貴とは程遠い。

だが、チノもリゼもココアの発言を聞いてシャロを『お嬢様』の方だと納得してしまった。

件のお嬢様校の奨学金制度の対象となる水準は極めて高いことで有名であり、まさか目の前にいる少女とは夢にも思っていないのだろう。

シャロも自身の惨めな素性を憧れの先輩に話すわけにもいかず、否定できなかつた。

シャロの助言もあり、ラビットハウス組の三人の買い物は順調に終わった。

どのくらい順調かと言うと、当初の目的であるラビットハウス用の他に、個人用で幾つか買う余裕があったほどだ。

「そういえばさつきココアが言っていた」

「のぶれす・おぶリーじゅ？」

「その『nobles obliigation』なんだが、前に親父も言ってたんだ」

それは天々座家の屋敷の敷地内にある訓練場で、父の部下の隊員達と混ざって訓練をしているジンを偶然通りかかったリゼが見た時のことだった。

いつも小綺麗な格好をしているジンが、土に塗れてボロボロになりながら隊員達とCCCの組手を行っていた。

自分より体格の大きい壮年の熟練隊員に投げ飛ばされ、幾度も地面に叩きつけられるジン。

そんな彼の姿を見ていられず、リゼが止めに入ろうとした。

だが肩に置かれた手によって彼女の動きは止まる。

いつからか背後にいた父がリゼを制止していたのだった。

リゼは「何故、ジンはあんなになってまで部下達と訓練をしているのか」と父に訴えた。

しかし何度聞いても父は理由を教えてくれなかつた。

ただ「ジンは『nobles obliigation』のために

頑張っているんだ』とだけ言った。

リゼもここまで言っても教えてくれないのならそれなりの訳があるのだろうと諦め、それ以上追及はしなかった。

……その日からだったかもしれない。リゼにとって、ジンの存在が遠くに感じるようになったのは。

そして『nobles obligation』の言葉と共に、いつも冷静沈着で生半可なことでは動揺しない父が、リゼの最初の問いかけを受けた一瞬だけ見せた辛そうな渋い顔が強く印象に残っていた。

「ただ、解釈がココアとは違っていたな」

「リゼちゃんのお父さんは、なんて言ってたの？」

『nobles obligation』とは直訳すると『高貴さは（義務を）強制する』となり、元はフランスのことわざで『貴族たるもの、身分にふさわしい振る舞いをしなければならぬ』……要約にすると『高貴な者は高貴な振る舞いをせよ』という意味を持つ言葉だった。

現在では『特権は、それを持たない人々への義務によって釣り合いが保たれるべき』、『権力者や富裕層など特別な人々は、その立場に相応しい社会の模範となるように振る舞うべき』などの社会倫理や社会的責任に関して使われる言葉とされている。そして、

「確か『資格者の義務』、だったかな」

この街におけるワームとの戦いの全権を担う天々座家の当主は『nobles obligation』をそう解釈した。

※

シャロはルンルン気分で帰路についていた。

リゼ達に何だか後々面倒臭いことになりそうな誤解こそされたものの、その程度のマイナスは憧れの先輩にペアカップを買ってもらったことで打ち消された。

どころかそのままメーターを振り切つて、未だに幸せMax状態だ。

(私こんな幸せでいいのかしら？　大丈夫？　今日死んだりしない？)

幸せ過ぎて(麻雀でいう『九蓮宝燈の役である』みたいに)一生の運を使い切つてしまったんじゃないかとハイテンションのまま心配するシャロ。

「あれ？　リゼ先輩？」

その途中、何故か先ほど別れたはずのリゼの後ろ姿を発見する。

「リゼ先輩〜！」

疑問に思ったが、どうしてここにいるのか理由を聞こうと呼び止めた。

「うん？　誰だ君は」

「え？」

振り返り様に返ってきたセリフで、シャロは自身の早とちりに気付いた。

後ろ姿の雰囲気判断していたが、その人物はリゼではなくジンだった。

「す、すみません！　人違いでした！」

落ち着いてよく見れば、身に付けている服装がリゼの着ていた上下純白の制服とは違う。

裾に黒のラインが一本通っている白いズボンにワイシャツを着て、紫のセーターを腰巻にしている。

どこことなくココアの制服に類似点がある格好に、シャロはもしかして同じ高校なのかなと予想を立てる。

「それはいいけど君、その制服からしてリゼと同じ学校の子？」

「はい、そうですね……え？ リゼ先輩のお知り合いなんですか？」

予想外の問いかけにシャロは素で驚いてしまう。

「リゼは僕の……姉だよ」

「ああ、どうりで……」

見た目が非常に似ているので親族なのではと考えていたが、姉弟と聞いて納得したシャロ。

（それにしても似ているなあ……あれ？ この人どこか会った気が……）

「どうしたの？ ドッペルゲンガーにでも会ったような顔して」

「い、いえ、ただよく似ているなあと」

自分が初対面の男性の顔をまじまじ見ていたことに恥を覚え、シャロは顔が紅潮する。

対するジンは表情筋が死滅しているのでは？ と心配になりそうな安定の無表情。

「そうだね、それは言われ慣れているけ……はあ」

「？ どうしたんですか？」

会話の途中で困ったように溜息を吐くジン。

彼の視線を追ってシャロは振り返った。

シャロが私^私がシャロ^{ワタシ}を見つめました。

「うそ……私が、二人？」

自分と姿形、服装まで同じ人物が脈絡もなく現れたことで混乱するシャロ。

恐怖するとか以前に目の前の出来事が現実として処理できなかつた。

「逃げてくれ」

「え、あ、あの」

思考停止状態になっていたシャロの前にジンは立つ。

庇うように彼女を下がらせる。

「いいから何も聞かずに逃げてくれ。早く」

「は、はい！」

ジンは訳が分からず立ち往生していたシャロに避難を促す。

戸惑いつつも、のっぴきならない事態であるということは飲み込んだシャロは言われるがままその場を走り去った。

「ッ………」

「行かせないよ」

逃げる少女を追おうとする擬態シヤロの前にジンが立ちふさがる。

両者は眼前の敵を見定めるように睨み合う。

『白い服装の人物が標的となった連続猟奇殺人事件』を、起こそうとしたワーム」

【Stand by】

ジンは持っていた竹刀袋からサソードヤイバーを取り出しトリガーを引く。

連動して背後から空間を跳躍して飛んできたサソードゼクターを構えた右手で掴んだ。

「お前の未来は、僕が奪う………変身」

【HENSHIN】

ゼクターをヤイバーに装着してマスクドフォームに変身完了。

サソードは刀を抜く動作でヤイバーを構える。

「!!」

サソードの変身に対抗して、擬態も奇声を発しながら醜い怪物に変貌する。

その姿は熱帯地方に生息するウデムシのように長く頑強な腕を持ったワームに変わった。

「晩御飯の時間が迫っているんだ。冷めてしまったらコック達に申し訳ない」

だから速攻で終わらせる、とサソードは踏み込んで剣を振り下ろした。

上段からの一閃がワームの肩口に吸い込まれるように入った。

「なにッ？」

しかしワームの外骨格には傷一つ付いていない。

「~~~~~?」

ワームは「なんだ？ そんなものか？」とでも言いたげな様子で余裕綽々とばかりに挑発する。

「.....千切りにする」

静かに憤ったサソードは再度、ワームに斬りかかる。

それをワームは禍々しい棍棒のような腕で受け止め、空いてるもう片方の腕でサソードの横腹を打った。

「ぐ——っ!？」

腹部のダメージでサソードが怯む。

ワームはそれを見逃さず、さらに鈍器の腕で怪力を振るう。

サソードも自身の腕で攻撃を受け止めようとしますが、ワームの攻撃はガード越しからでも十分過ぎる恐るべき破壊力を持っていた。

一発ごとに腕が痺れる。

打撃は骨まで響き、全身が悲鳴を上げる。

そして僅か三発の攻撃でガードは弾かれてしまった。

サソードが最大の腕力を発揮する、防御に優れたマスクドフォーム。

今回のワームは、あろうことかそのマスクドフォームを腕力で負かし、防御を打ち砕いた。

ワームの怪力はサソードを大きく上回っていた。

サソードの体が、くの字に曲がる勢いで吹き飛ばされた。

そのままのスピードで建物の壁面に叩きつけられ、表面の煉瓦が砕け散る。

ブラッドベセルが千切れ舞い、飛び散るオレンジ色のポイズンブラッドが路面を濡らす。

「——かはっ」

壁面に受け身無しで叩きつけられた衝撃で、サソードの肺から空気が漏れた。

脱力した四肢が垂れ下がり、仮面は俯く。
壁を背凭れせもたれに座り込むような格好になったまま、サソードはピクリとも動かない。

戦闘不能になったと思われる敵にトドメを刺すため、ワームは悠々と近づいていく。

「——ゴホッ! ——ゴホッ!」

「はい、これお薬……」

「ありがとうね、ジン……」

「お母さん、だいじょうぶ?」

「ええ、今日は調子が良い方だわ。きっとジンの看病のおかげね♪」

「ほんとう?」

「もちろんよつ。じゃあ調子が良いから、看病してくれたご褒美にご本を読んであげましょう!」

「……うんっ」

『ごん、お前だったのか。いつもくりをくれたのは。』

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなづきました。

兵十は、火なわじゆうをばたりと取り落としました。青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。

おしまい……あら? どうしたの、ジン?」

「ねえ、お母さん……人は、死んじやつたらどうなるの?」

「っ……ジン、人はね、死んだら天に昇ってお星様になるの」

「そんな! 遠くにいつちやうなんて、やだよ!」

「いいえ、悲しむ必要はないのよジン。例え遠くにしても、そこからみ

んなの事をずっと見守ることができの」

「それでも、遠くにいつちやうのは……いやだっ！」

「ジン……」

「だから……もし、もしだけど……お母さんが天に昇つても、僕がお母さんをむかえにいくよ！ 何年かかっても、どれだけつらくても、ゼツタイにたどり着いてみせる！ だからお母さん、お星様になんかならないで、僕がいくまで待っててね！ 約束だよ！」

(僕は……常に頂^天点を目指す……それが、せめてもの償い……)

サソードの眼前までワームは迫っていた。

そしてサソードの命を絶たんと必殺の怪力を振り上げる。

サソードは未だ動かない。

だが突如、地面に散らばっていたブラッドベセルが舞い上がる。

「!?!」

予想外の事態に驚愕し、警戒するワーム。

そのワームを取り囲むようにサソードの装甲から伸びた無数のオレンジ色のチューブが空中を漂う。

「ッ!?!」

瞬間、チューブが収束してワームを捕縛。

ワームは拘束から逃れんと力を籠める。

やはりその膂力は凄まじく、ブチブチと音を立ててブラッドベセルは一本ずつ切れていく。

しかしそれはサソードも予想していた。

「キャストオフ」

【Cast Off】

サソードはブラッドベセルで拘束したままキャストオフを使った。

拘束され動けないワームにサソードの装甲が直撃。その体が地面を転がる。

【Change Scorpion】

絡まったチューブを引き裂いて立ち上がるワームの視線の先で、サソードは細身のライダーフォームに変身していた。

「さっきの攻撃は効いたよ。おかげで目が覚めた」

腰を落とし、下段の構えをとる。

「でも、もう食らうつもりはない」

再び、ワームに向かって踏み込んだ。

「!!」

同じことの繰り返しだ、とワームもサソードに向かって先程と同じように鈍器の腕を振るいサソードの頭を粉碎しようとする。

そしてサソードの姿が消えた。

「こっちだよ」

「!?!」

否、消えたわけではない。

サソードはライダーフォームの身軽さによって素早くワームの死角に移動したのだ。

ワームは背後に回ったサソードを討つため、振り返りながら腕を振るう。

だが、またしてもサソードはいない。

「————ッッ!?!」

それどころか体に鋭い痛みが走る。

見ると外骨格の隙間、無防備な関節部分が切り裂かれている。

ワームの脇の下をすり抜け死角へ移動する一瞬の間にサソードが斬ったのだ。

だがこれは口で言うほど簡単なことでは無い。走り抜けながら手でタッチするのは訳が違う。

その難易度を例えるなら『走っている車の運転席から手を出して対向車線の車の窓に素早く手を入れ、窓枠に手がぶつからないうちに引き抜く』という普通なら不可能に等しい行為。

少しでもタイミングを間違えば、殺人的な一撃が直撃する。

防御力の高いマスクドフォームの時ですら大ダメージだったのだ。身軽さの代わりに装甲を脱いだライダーフォームでは洒落にならない致命傷を負いかねない。

「———ッ!!」

ワームもそれを理解しており、意地でも当てようと腕を振り回す。しかし寸でのところでサソードに躲される。

死中に活を求めるサソードの覚悟は乱れぬ集中力となって致命的なミス回避し、アドレナリンの上昇によって彼の五感研ぎ澄まされる。

みるみるうちに傷だらけの血塗れになっていくワーム。

一つ一つの傷こそ小さいが、それが積み重なることによって戦意は削がれる。

初めより確実に動きは鈍くなっていた。

ワームは流石に自身の覆せない不利を悟り、クロックアップによる逃走を図った。

だが、それを許すサソードではない。

帯を締め直すが如き所作でベルトのスライド式のトレーススイッチを作動させる。

「クロックアップ」

【Clock up】

サソードは低姿勢から懐に飛び込み、逃げ腰で隙ができたワームの膝裏を切り裂く。

耳をつんざくような悲鳴をあげ、ワームの体勢が崩れた。

「ライダースラッシュ」

【Rider Slash】

すかさずサソードは必殺技を発動。

ワームも足を負傷したことで逃走は不可能であると判断し、迎撃の構えをとる。

両者の時が加速し、世界の時から外れた世界。

決着は一瞬だと両者共に理解していた。

戦士と怪物が睨み合う。

お互いが必殺の間合いを図り、相手の隙を狙う……体感では数十分以上に引き延ばされた時間。

実際の時間は一秒だったか、一分だったか……測れる者はここにはいない。

「ハアツ——！」

「——ッ!!」

サソードが首を狙って剣を振るう。

ワームが腕で防ぐ。

ただしフェイント。本命は返す刀による胴薙ぎ。

ワームは片腕で胴を守り、口腔から緑色のアコニチンを含む毒液を放って目潰し。

それをサソードは頭を下げて回避。さらに肩のブレードによるシヨルダータツクルを繰り出す。

ワームが仰け反る。

だがすぐさま顔をあげ——

【Clock over】

深々と斬られたワームの喉笛から緑色の血の飛沫があがる。
一歩、二歩、とたたらを踏み、転倒。
その体は爆裂霧散した。

「うっ……！！」

戦闘が終わり、サソードは膝を着く。
変身が解除されてジンの姿に戻る。

(今回は苦戦した。ワームが強くなってきている。もつと気を引き締めないと……ああ、そうだ。今回の苦戦の原因の一つは僕自身への気の緩みだ……思えば近頃、余計な事を考えている時間が増えた気がする)

前まではヒーロー云々とかで一々動揺しなかった。

別にテストで一位になれなろうが次のテストを頑張ればいいと割り切れていた。

サソードゼクターの資格者になってからは一度も悩むことなんてなかった。

悩んでも無駄だからだ。

と言っても彼がサソードゼクターの資格者になったのは三月……いやもう四ヶ月前ぐらいだろうか、時空の彼方からワームが出現し始めて真っ先にリゼが標的にされた事件の時からなのだが。

兎も角、何故今更になって心が掻き乱されることが増えたのだろうか。とジンは考えた。

考えた結果、やはりあの時から……『サンドイツチ落涙事件(仮)』からだという結論に至った。

(これも全部、あの時ココアさんが……いや最後に選択したのは僕だ……何故だ、何故、僕はあそこでサンドイッチを食べてしまったんだ。それに食べたとしても……くっ)

堂々巡りのたられば思考。

その無意味さをわかつてはいる。

過去は過去。今は今。

そう自分に言い聞かせてジンは無駄な行為を止めようとする。

(嗚呼、こんなの僕らしくない……何だろ僕らしくなくて……ダメだ、やっぱり冷静じゃない)

だが、理性で理解していても心のモヤモヤは晴れない。

(何でも最近上手くいかないことが多いんだ？ 店が全部閉まっていた事いい、ココアさんの事といい……店の事は結果オーライだったけど……パン、美味しかったけど……) 最早ネガティブなのかポジティブなのかわからなくなってきている。

ジンの面倒臭い精神構造がさらに面倒臭いことになっていた。それでも少しずつ周りを見る余裕が復活してきた。

(今日なんて、逃げてくれて言ったはずの子もまだいるし……え?)

そして前を見ると先程の少女・シャロが物陰からジンを見ている。

「……………」

「え……………」

そしてジンと目が合った。

「はぁ……………ラーメン食べたい」

「は?」

過去の動揺を引き摺って無様な戦いをした拳句、不注意から一般人の前で変身解除。

流星のジンもちよつと現実逃避したくなった。

初めて会った日の事憶えてる？ 自分の家のメイドにしようとしてたわよね 3

シャロはバイトが終わった後、帰る途中で行きつけのカップ専門店に立ち寄った。

この時点でバイト前に病院の前で発作(?)を起こし苦しんでいた少年の忠告は、直後にバイト時間に遅刻しかけて奔走していたのもあつて頭から抜けていた。

しかしそのおかげで偶然にも憧れの先輩のリゼに会うことができ、さらに彼女とのペアカップを買ってもらおうという幸運に恵まれた。

幸福な気持ちに包まれたシャロは意気揚々と家に帰る。

その帰り道でもう一人の自分と対面した。

摩訶不思議な出来事にどうしたらいいのかわからず立ち尽くしていた彼女を助けたのは、偶然出会った少年だった。

後で気付いたが、その少年は病院の前で会った少年と同一人物だった。

少年はシャロへ逃げるように促し、シャロもそれに従った。

だが、逃げたはいいがまたしてもどうしたらいいのかわからなくなる。

とっさに逃げてしまったが、あのドツペルゲンガーは一体何だったのか？

少年はドツペルゲンガーについて訳知りのような様子だったが、どういった関係なのか？

そもそも少年を置いてきてしまつて本当に良かったのか？

様々な疑問が頭を回り、收拾がつかない。

このまま見捨てるのも後味が悪いが、だからといって助けを呼ぼう

にも「ドツペルゲンガーが出たから」などと言っても誰も信じてくれないだろう。

実際、白昼夢でも見たと思つて踵を返し、全部見なかったことにして家に帰るのが賢い選択だ。

他人事にして忘れるのが精神衛生的にも無難。

だがしかし、シャロにとって少年は他人ではなかった。

ドツペルゲンガーが現れる前の会話で少年は自身の事を『リゼの弟』だと言つていた。

少年は知り合いではないが、リゼは知り合いだ。

少年に強い個人的感情は抱いていないが、リゼにシャロは強い憧れを抱いている。

少年個人は今日会つたばかりの他人だが、リゼは先日（苦手なウサギから）シャロを助けてくれた学校の先輩だ。

リゼはシャロを助けてくれた、少年もシャロを助けてくれた。

シャロは自分自身を博愛精神を持った聖人君主などとは思っていないが『自分とは知り合いじゃないけど、自分の知り合いと親しい人』そして『深くは知らないが悪い人には見えなかった人』は見捨てられない、ぐらいの良心は持っているつもりだった。

だから、少女シャロは来た道を振り返った。

「僕にとつてのベスト・オブ・ラーメンは、やはり豚骨だ」

「え、あ、うん？」

「北海道の塩や味噌も捨てがたい。だけど福岡の豚骨は……ふう、格別だ」

「えーと、醤油は？」

「醤油は殿堂」

「そ、そう………」

そして現在、その少年に連行されている。

と言っても拘束されているわけでもなければ、脅されているわけでもない。

歩く少年の隣り、正確には2歩右斜め後ろをついていく形だ。

「ところで君って週どのくらいラーメン食べるの？」

「そこまで頻繁にラーメン食べないわよ」

「ふーん、そうなんだ。美味しいのに」

（その謎のラーメン推しはなんなの？）

監視されているわけではないが、つけ入る隙もまた無い。

歩幅が短い低身長の子ヤロがリゼと同じくらい高身長な少年に置いて行かれないのは彼が気配で歩くペースを常に調整しているからだ。

なので『死角にいる間にこっそりと』とはいかない。

（私を連れて行って、どうするつもりなんだろう）

引き返してしまった結果、戦士に変身した少年と謎の怪物との戦闘を目撃してしまったシャロは呆然としていた。

そんな彼女に、少年は言ったのだ。

ラーメン食べたい——と。

（いや意味わかんないから）

そんな思い出しツツコミをするシャロが大人しく少年の後に続いている理由は、正体不明の力を持つ少年に対する恐怖心もあったが、ドッペルゲンガーや戦っていた怪物などへの好奇心も強かったからだ。

少年についていけばそれらについて教えてくれるのではないか、という期待があったからだ。

しかし少女は知らなかった。

下手な真実なら知らないくらいがいいのに———ということ
を。

歩いていると、野原が広がる公園が見えてきた。

夕陽に照らされた野良ウサギが野原のあちらこちらでぴよんぴよんしているのが見える。

(あれ、なんのお店かしら?)

そんな公園の前に、シャロが知らない白い移動販売車が停車していた。

シャロは学費や生活費を稼ぐため多くのバイトを掛け持ちしている。

上手く複数のバイトをこなすために街の求人情報については一通り網羅しており、以前この公園で移動店舗のバイトをしていたこともある。

そんなシャロが知らないということとは新しくできた店なのか……というわけでもなく、掲げている看板はそれなりの年季が入っている。

「流石、時間通りだ」

心なしか嬉しそうに呟いた少年はシャロに少しの間近くのベンチで待っているように言つて、その移動販売車に向かっていく。

しばらくして左手に紙袋を下げて戻ってきた。

そして買ってきた商品の一つをシャロに差し出す。

「これは?」

「見てわかるでしょ、たい焼きだよ」

「ラーメンじゃないんかい!」

さんざつぱらラーメン語りしてこれである。

「あんた……リゼ先輩の弟さん、なのよね？」

「やめてくれないか、そういうお子様ランチのおまけみたいな呼び方は。僕には『天々座刃』という名前があるんだ」

食い気味に反論する少年・ジンの態度に、怪訝に眉をひそめつつシャロは不満げに反論する。

「私、あんた名前聞いたのが初めてなんだけど」

「そういえばそうだね」

「こいつ……」

あつけらかんと言いのける少年^{ジン}にシャロは辟易してきた。

こういうとことんマイペースなタイプは一度手綱を握られるとどこまでも引きずられていく。

似たようにマイペースな友人を持つシャロは経験則でわかっていった。

既に手遅れ感はあるが、わかっていた。

それでもシャロは『天々座刃^彼』の事がわからなかった。

病院の前で悶えていた『彼』は地獄の苦しみに耐える囚人のようだった。

怪物と戦っていた『彼』は死線を潜ることに慣れている冷徹な剣士のようだった。

面と向かって話す『彼』は見た目こそ憧れの先輩に似ているが、それ以外が全然似てない。

ラーメンを語る『彼』はただのラーメン厨。

どれが本当の『彼』なのか、シャロにはわからなかった。

「たい焼きを食べるシャロの姿をじつと見つめるジン。」

「……なに？ 食べたいの？」

「勘違いしないでくれ。そのたい焼きは既に君のものだ。僕が他人の物を欲しがるような卑しい奴に見える？」

見えるか否かはともかくすぐく食べ辛い、というのがシャロの返答

だった。

それを慮ってシャロがたい焼きを食べ終わるまで目を逸らすジンだが、妙なプレツシャローは隠しきれていなかった。

「味、どうだった？」

「美味しかったわよ……」

釈然としないが、たい焼きが美味しかったのは事実だ。

生地は外がパリツと、中はもちもちの不思議な二段構造。生地そのものが風味を持ちながら、餡子の味を引き立てる。

その餡子はたい焼きの尾ヒレの先まで詰まっついて、そのこし餡のしつこ過ぎない甘味が口の中で溶けるように広がっていく感覚が堪らない。

そんな一品であり、逸品だった。

「そう、よかった」

「どういうこと？」

「元々これはいつもお世話になっている父の部下の隊員達の差し入れに買おうと思って、三か月前から予約していたんだ」

『味は絶品だが、予約した数しか作らないたい焼き屋』の情報を口コミで聞いた噂を基に連絡先を突き止め、何とか人数分ギリギリを予約することができたのだ。

「今までのたい焼きにない美味しさという評判だったけど、どこぞの誰とも知れない人の評価を鵜呑みにしてそのまま渡すのは失礼だからね」

（その言い草だと、まるで毒見させられたみたいで嫌なんだけど）

「なにはともあれ、噂に違わぬ美味しさが証明されたところで……」
空気の変化にシャロは身構える。

随分と回り道をしてきたがとうとう説明してくれる気になったかと。

一体どんな秘密があるのか、自分が知らない世界への恐怖と興味で身が震える。

ジンの口が開く。

シャロは生唾を飲む。

「今日見たことは他言しないように。じゃあね」

そう言ってジンはそそくさとその場を去った。

「って待ちなさいよー」

シヤロはジンの右腕を掴んで止める。彼女の顔は呆れと困惑、そして少しの苛立ちが混ざったしかめっ面になっていた。

「なに？ 僕にはこのたい焼きをあつたかいうちに隊員達に届けて、その上で夕食の時間までにウチに帰るといふ重要な用事があるんだけど」

「知らないわよ。そんなことより、ここまで来て放置はないでしょ、放置は」

シヤロからしてみればドツペルゲンガーや少年が変身した戦士のこと等々、色々と説明してほしいことが山ほどある。

それが知りたいがためにここまで来たのに、これでは肩透かしもいところだ。

「その件なら、あげたでしょ？ たい焼き」

「……まさかとは思うけど、あれが口止め料だったわけじゃないわよね？」

「……？ だって、食べたでしょ？」

「いやそれはおかしい」

「ただだけ安い女だと思っているのか、とシヤロの中で苛立ちのメーターが上がる。

「絶対あんた頭悪いでしょ」

「誰の頭が悪いって？」

テストはオール90点超。

全教科トップ10ランクイン。

でも数学でココアさんに負けた。おのれココアさん。ゆるさん
次は絶対勝つ的な意味で。

「自慢か」

「誇りだ」

少女と少年の言葉の応酬は続く。

「一体何が不満なんだ？ ……こうなったら奥の手だ。何が食べたい？ 最高の店を紹介してあげよう」

「何でっ！ 食べ物っ！ オンリーなのっ!？」

「美味しいから」

「知るか！」

天然でエキセントリックな性格の少年にシャロのツツコミが光る光る。

ただし効果は今ひとつのようだ。

ポ○モンでいうならシャロはフェアリータイプ。少年はどく／はがねタイプといったところか。

「あのたい焼きは最低でも数か月前から予約しないと買えない、とても貴重なたい焼きなんだ。君にあげたのはそんな貴重なたい焼きの一つ。厳密には僕の分だ」

「たい焼きならまだあるでしょ？ それを食べればいいじゃない」

「これは隊員達の分のたい焼きだ。僕のじゃない」

「じゃあまた買えばいいじゃない」

「だから予約した分しか買えないたい焼きなんだよ」

「あーもう！」

罇が明かない問答にシャロは頭を抱える。

一方的だったとはいえ期待を裏切られたこと、非日常的な秘密をたい焼き一つでチャラにされようとしていることに納得ができずイライラが募る。

それらの負の感情に引っ張られるように、普段から心の隅で燻くすぶっていた経済的な劣等感までも浮き上がる。

そして、つい口が滑ってしまった。

プライドの高いジンの前で言うてはならないことを口にしてしまった。

「あんたの家、お金持ちでしょ。そんなに食べたいならお金を出してサービスしてもら」はっ？」

シャロは、首筋を氷の刃で撫でられた……錯覚をした。

「僕にそんな恥知らずなことをしろっていうのか？」

言葉が、

視線が、

空気が、

総てが鋭い刃になってシャロに向けられていた。

「実際に口にしていなくても店を見れば、品の出来上がりを見れば、この品にたい焼き込めた店の人の想いはわかる。わざわざ面倒な予約をとって販売していることには相応の理由があり、こだわりがあるということが……そんな言わば彼らの職人としての誇りを、プライド金で買収しろと？ 君はそう言っているの？」

かつてリゼからジンについて相談された際に千夜は『お客様にはまず敬意を払う』のが自分の考えだが、ジンなら『店員も客も相応に敬意を払うべき』と言い返しそうだと思像していた。

事実、その想像は的を射ていた。

ただし天々座刃という少年が、敬意を払うと認めた相手が貶められる発言・行為に対し、例え過失であったとしてもここまでキレ憤るとは流石に予想できてはいないだろう。

「うっ……ごめんなさい」

だが、その理不尽な氷点下の怒りが逆にシャロを冷静にさせる。

イライラ怒りで我を忘れていたのはシャロの方もだったからだ。

先程の発言はたい焼き屋さんに失礼だ、と考えられるだけの頭は回るようになった。

ただし結果的に自分の頭を冷やしてくれたとはいえ冷水どころか氷塊をぶっかけてきた少年には、そこまで罪悪感はなかったが（そもそもシャロがイライラした原因はジンだ）。

（つて、本題はそこじゃないでしょー！）

冷静になったところでシャロは改めて事情を問おうとした。

「……こちらこそ、ごめん。今のはちよつと言い過ぎた」

しかしあまりに素直過ぎるジンの謝罪に拍子抜けした。

シャロはジンのことをもつと傲慢な人間だと思っていたがために、尚更だった。

「腕、いい加減に離してよ」

「ああ、ごめんなさい」

少年の意外な一面を見て衝撃を受けていたシャロは言われたままに右腕を離す。

そこで、日頃から多種多様なバイトをこなしていくうちに培われた洞察力と観察力……一言で『気遣い』と略せるシャロの技能が気付かせた。

「右腕、怪我してるの？」

「……だったら何？」

ジンが右腕を庇ったほんの僅かな違和感をシャロは見抜いた。

これはひとえにシャロが特別だったからではない。

むしろ逆。

シャロがジンにとって特別でも何でもない他人だったからだ。

リゼやチノ、ココアの前ならジンはもつと上手く自身の痛みを隠す。

実際にそうやって今まで隠してきた。

シャロがジンと親しくない他人だったから、ジンはそこまで気を張って隠そうと思わなかったのだ。

「……来なさい。(勇気が無くて) 行ったことは無いけど、たぶんここからならリゼ先輩の家よりウチの方が近いから」

「どういふこと？」

「だ・か・ら、簡易的でも手当してあげるからウチに来なさいって言うてるの」

「え？」

ジンは、シャロの義理堅く面倒見のいい性格を甘く見ていた。

シャロは頭の悪い人間ではない。

それは学力が高いというだけでなく、人間としてできているという意味でもだ。

しつこく説明責任を求めているものの、何となく『危ない所を助けてもらった』というのは理解できているし忘れていない。

説明を求めているのも『何から襲われ、どうして助けられたのか』が

わからなければどう感謝したらいいのかもわからないから聞いて
いるのだ。

見知らぬ世界への好奇心があるのも偽りない事実だが、それだけで
はないのもまた事実。

「その必要はないよ。まずは差し入れたい焼きを届けることが最重要事項だ」

「いいえ手当が先よ。治療が遅れた分、後に響くんだから」

「いいって言ってるでしょ。この程度は問題ないよ。それより、早く
家に帰らないとリゼが……」

「え？ リゼ先輩がどうしたの？」

妙なタイミングで出た憧れの先輩の名前にシャロは引つ掛かりを
感じた。

「……何でもない。君には関係ない」
「？」

シャロは急に暗くなったジンの表情が気になったが、あくまで他人
だったので深くは聞かなかった。

「だから僕は……なに？ そんなことより治療してもらえって
？ なんで？ ……ついでに事情もある程度説明してあげれ
ばって、そんなことしてたら夕食に間に合わないよ。……いや、
ちゃんフォローするとかそういう問題じゃ……じゃあ
いいよ。わかったよ。僕の責任だよ。説明すればいいんでしょ、説明
すれば。……掘ねてないから」

最後に幾つか事務報告をして、ジンはスマホの通話を切った。
「オペレーターの人とやらと話は終わった？」

スマホをズボンのポケットにしまって振り返れば、ジト目で呆れて
いるシャロがいた。

「勝ったと思わないでよ」

「何の話よ……」

シャロの抵抗に折れた（できれば穏便に済ましたかった）ジンが
渋っていた隊員達への報告（という名の相談）をしたのだった。

その結果シャロの主張が通ったが、ジンの負けん気が納得しない。納得はしてないが、されど反抗する理由があるかとなると今回はないので従う。

「ここらへんに彼が普段、敬意を払う人物にどう対応しているかが見える。」

「とにかく、話がついたのなら行くわよ」

「あ………たい焼き、どうしよう」

「まだ言うか」

「いや確か、『冷めても美味しいたい焼きだ』という評判も聞いた………それに賭ける」

「もう賭けるなり何なり勝手にしてなさいよ………」

シャロは深い深い溜息を吐いて『なんで自分はコイツにここまで親身になってあげているのだろう』と当初の目的を忘れそうになりながらも、自分の家の救急箱の位置を記憶から探っていた。

※

そして場所を移動してシャロの家。と言っても彼女が一人で下宿している仮の住まいだが。

しかもちよつとボロい一階建ての小屋。

それでも部屋の中は綺麗に掃除が行き届いている。

外側は貧相でも内側は錦………そんな彼女の性質を反映しているようだった。

ジンのシャロへの好感度が結構上がった。

「これでよしっ」と

打撲していた患部^{上腕}をタオルで包んだ保冷剤で冷やし、十分冷えたのを確認してから冷湿布を貼って包帯で圧迫する簡易的な応急処置を手早く終わらせたシャロ。

ジンは患部を心臓より上の位置に置き（血流が滞ってうっ血になる

のを防ぐため)ながら、その手際に感心する。

ジンのシャロへの好感度が大分上がった。

「えーと、どこから説明すればいいかな」

「あ、ちよつと待って」

とても億劫そうに説明を始めようとしたジンを一旦止めてシャロは部屋の奥へ消える。

そして紅^{ハイフレイ}茶が入ったポッドと二つのカップをトレイに載せて戻ってきた。

「それは？」

「ちよつと長話になりそうだし、飲み物ぐらいは出すわよ」

「なるほど」

その気遣いは良し。

ただし味の方はどうか？ とジンは淹れられた紅茶を受け取り、一口。

ジンのシャロへの好感度が一気に上がった。

「さて、まずはさつき君を襲ったドツペルゲンガー………ワーム」について話そう」

「紅茶飲んだ途端、急に乗り気になったわね」

「君の品にそれだけの価値があった、というだけだよ」

「はいはい、わかったわよ」

美味しい紅茶を飲んで態度を改めたジンの現金な性格に、それまで能面のように無表情で感情の見えない彼に苦手意識を持っていたシャロは少しだけ親近感が湧いてきてしまっていた。

紅茶で一息ついて、ジンは語り始めた。

人の姿と記憶を奪う「ワーム」のことを、

この街の有力な地主である天々座家とその「ワーム」に対抗する組織だということを、

「ワーム」に唯一対抗できるのがマスクドライダーシステム………仮面ライダーの力だけだということを、

そしてそれらは街の一般市民は勿論、リゼにすら秘密にしているということを。

「なんで秘密にしているかは……言わなくてもわかっているみたいだね」

「^{パニック}混乱が起きないため、もとい『魔女狩り』が起きないようにするため、ね」

「ワーム」が持つ擬態能力。これは下手なクローン技術よりも完璧だ、と言っても過言ではない。

姿形どころか記憶さえ完全にコピーする彼らは質問応答でボロは出さないし、精密検査を行ったとしても人間と判別することはできない。

ただしその肉体強度は人間を遥かに上回り、その気になればあつという間に人を殺傷できる。

しかもそのまま食わぬ顔でまた人間の中に紛れ込むのだ。

木の葉を隠すなら森の中、というが「ワーム」の場合は自由に形と色を変えられる木の葉を緑が生い茂る山から発見する、とかそんな『0%じゃないけど、実質不可能』……そういうレベルの話になる。

そんな奴らが人間社会に紛れていると周知されればどうなるか？

即、怪しき者は殺せの魔女狩りが起こるとは限らないが、間違いなく人々の平穏は終わりを告げる。

『もしかしたら今さつき擦れ違った奴は怪物かもしれない』

『いや、もしかしたらお隣のあの人はもう怪物になっているのかも』

『あるいは自分以外の家族は全員、怪物が成り代わった偽物なんじゃ』
『それとも気付いてないだけで既に自分は自分ではなく、同じ記憶を持っているだけの怪物なのでは？』

そんな不安と疑心暗鬼に飲まれて生きていくしかない地獄に変わってしまうだろう。

例え故郷を捨てて街から離れても、その恐怖からは一生逃れられない。

今の桐間紗路のように。

「心配することはない」

だが天々座刃はその不安を無用だと切り捨てた。

その断言にシャロは怪訝な目を向ける。

「……どうしてそう言い切れるの？ そう言っているあんたでさえ、本物である保証は無いのに」

シャロの意見は正論だった。常識的とも言える。

しかしその常識に、ジンは非常識を返した。

「総てのワームは僕が斃すし、仮に僕がコピーされても判別は容易だよ。だって僕の体内にはウチの優秀な技術班メカニック達お手製のGPSが埋め込まれているんだから」

ジンはGPSを誇らしく、自慢げにさえ見えるように話した。

シャロの背筋には、ついさつきジんに睨まれた際の比ではない悪寒が走った。

「あん、た……それ、どういうことよ……」

嫌悪感で顔を真っ青にしてシャロはジんに詰め寄る。

「そんなの、おかしいでしょ……！！ 体の中にGPSって……まるで、モルモットか道具みたいな扱いじゃないっ……！！」

あんた、それでいいの!? 何とも思わないの?!

ジンはシャロが嫌悪感だけでなく、自分のために怒りも感じてくれているのがわかった。

そんな優しい彼女の性格を知ってさらに好感度が上がりそうなことに、ちよつぴり困ってしまう。

「ああ、同じことを僕の体内にGPSを埋め込んでくれるようこそ頼んだ医療班の人にも言われたよ」

「はい?」

シャロはジンが言った言葉の意味がわからず、思考が止まる。

否、わからないのではなく、わかりたくなかった……が正しい。

「なん、で……そんなことを?」

「君がさっき言ったでしょ、僕が本物である保証は無いつて。実際そうさ。」

しかもワームの擬態能力はマスクドライダーシステム、ゼクターさえ欺くことができる。ワーム奴らに負けてゼクターまで奪われる気はさらさらないけど、如何せん保険ってやつだよ」

「保険って……それだけでそんな……」

「まあ、実際こんなことしているのは僕だけだよ。僕以外のワームなら僕が見破れるし」

「え？ どうやって？」

「それは流石に機密事項かな。ただ僕が特殊体質だから、とだけ言うっておこう」

いつそ飄々とした物言いであらう。

GPSを自分の体内に埋め込むというおよそ社会の倫理感から外れた行為は、ジンにとってその程度のことらしい。

ジンに親近感を抱き始めていたシャロだったが、急に彼との間に深い谷ができたような気がした。

溝、ではなく谷。

とてもじゃないが手も足も向こう側へ届きそうにない谷だ。

シャロはただ、カップに残った冷めた紅茶を見つめることしかできなかった。

「じゃ、シャロちゃんが男の人を自分の家につ……!」

そしてお隣の千夜から要らぬ誤解を受けるのを阻止できなかった。